ＩＳ鏡伝～漆黒の隼～

Fe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ鏡伝～漆黒の隼～

【Ｎコード】
Ｎ１７４５Ｘ

【作者名】
Ｆｅ

【あらすじ】
ＩＳ学園に一人の青年が現れた！一夏と同じく、ＩＳを操るその青年は教師として学園にやってくる。
ＳＦ学園ドタバタラブコメディの再構成。一夏達の甘酸っぱい十代の恋愛と、その青年・ザックと教師達が織り成す大人の恋愛をお楽しみ下さい。

オリジナル設定　加筆しました（前書き）

1. オリキャラとのＣＰがあります。
2. 一夏のヒロインはシャルロットです。

以上どちらかでも認められない人は速やかに戻って下さい。

オリジナル設定　加筆しました

オリジナル主人公（一夏はちゃんと主人公です）

名前：ザック・ブルード（イメージＣＶ：中村悠一）
年齢：２５歳
国籍：イギリス（ドイツと日本の血も混ざっている）
ＩＳ適正：Ａ（機動戦のスキルに限ればＳクラス）
性別：男
一人称：俺
容姿：漆黒の髪と青い瞳。目つきは切れ長で、一見すると普通の美青年。髪を肩甲骨辺りまで伸ばし、うなじで結んでいる。
身長：１８９ｃｍ
体格：細身だが必要な筋肉はついているため、脱いだ時は割とマッシブ。
好きな物：猫・空
嫌いな物：アメリカの軍用レーション（栄養最優先のため死ぬ程不味かった）
趣味：日本産の特撮ＤＶＤ鑑賞・機械弄り

ＩＳ学園に教師として赴任してきたＩＳ適格者の青年。一夏とほぼ時を同じくして感応したため、どちらが第一号かは日本とイギリスで物議を醸している。
千冬とはイギリスとドイツの合同軍事演習の際にコンビを組んだ程度の知り合い。その際にバズーカとスタングレネード、アサルトライフルを駆使して生身のままＩＳを撃墜した経緯で『幻想の破壊者（ファンタズム・ブレイカー）』と呼ばれる事もある。その経緯からラウラとも顔見知り。
性格は気さくで生徒にも対等に接するが、授業は苛烈。
重度の特撮オタクでもあり、平成仮面ライダーシリーズとメタルヒ

ーローシリーズは全て網羅する程。但しクウガについては、信者のマナーの悪さに辟易している為ファンだと公言はしていない。
ゴミ捨て場に燃えるゴミとして捨てられていた双子の子猫・アポロとルナを飼っている。
オタク根性故か、ＩＳ起動時に「変身！」と叫ぶ癖あり（ポーズはアギト）。
機械や壊れた物を修理するのが好きで、暇があれば愛用の工具を磨いている。自前のバイクをチューンしたり、轡木十蔵の仕事を手伝ったりする事もしばしば。
軍にいた頃に立てた手柄は全て同僚や上司に譲ったため、彼のお陰で出世できた人員は数知れず。よって政府内にもかなり根強いコネを持つが、使う事は今のところない。

使用ＩＳ
名称：スカイファング（クウガを英訳したもの）
待機状態：黒い玉をはめ込んだペンダント
機体色：黒
主武装
左腕：６６式ガドリング砲
右腕：３２ミリ突撃機銃
背部：空戦支援用リフター『ゴウラム』（ビーム機銃・ヒートクロー・攻勢フィールドを展開しての突撃等の武装がある）
近接用：零式対装甲用ブレード『タイタン』

ザックが愛用している第三世代ＩＳ。イギリスで培ったノウハウと彼のオタク知識を総動員して開発された機体。背中に大型のリフターを背負っているためずんぐりした見掛けに見えるが、本来のフレームはかなりほっそりしている。

ゴウラムは分離して専用ＡＩによる独自戦闘を行う他、ザック本人を乗せて更にアクロバティックな戦闘を可能とするシステム。見た目は殆どでかいクワガタ。
機体コンセプトは機動力と一撃の火力を重視したヒットアンドアウェイタイプ。他にもオプション装備は存在するが、ザック自身の好みから使用される事は殆どない。

ワンオフ・アビリティ：『音速（ソニック）の荒鷲（イーグル）』
端的に言えば、発動中は全ての機動がイグニッション・ブースト級のスピードになるというもの。勿論機動性は損なわれないため、印象としてはクロックアップ（カブト）やアクセルフォーム（５５５）に近い。
乗り手の負担もかなり大きいため、発動できる時間は１０秒が限界。

以下、十話以降のネタバレあり

名称：スカイファング・サードフォーム
待機状態：色が白くなった以外は変わらず。
機体色：白をベースに黒のラインが入る。
主武装
手持ち武器：タイタン（ソードフォーム・アックスフォーム・ロッドフォーム・ガンフォームが追加）
両腕部：ヒートブレード（手首から伸びる鎌にも似たブレード。高熱で標的を断ち切る事が可能）
脚部：スパイラルブレード（ぶっちゃけエネルギーのドリル。エネルギーを装填してキックと同時に相手を貫く）

福音との戦いで第三形態（サード・シフト）移行したスカイファング。ザックの心にあった白騎士の記憶と融合して誕生した。
スカイファングがザックと共に視聴していた仮面ライダーの武器が多数追加されており、全体的にスペックの向上が認められている。
またタイタンが絶対防御を無効に出来る事は変わらず、剣以外の形態も取れる事からより危険な武装となった事は否めない。
ワンオフ・アビリティは今までと変わらないが、スカイファングが強化されてパイロットの安全をより保障出来るようになったので制限時間が６０秒へと延長されている。

オリジナル設定　加筆しました（後書き）

始めまして。今回からＩＳの本編再構成長編を書く事にしました。
今回はオリキャラとオリジナルＩＳの説明でしたが、いかがでしょうか？突っ込み、提案お待ちしております。
ＰＳ：自分はシャルロッ党です。でもってシャルロットは一夏の嫁。

オリジナル紹介　不可視の軍隊とは？（前書き）

徐々に明らかになっていく部隊ではありますが、概要だけでも乗せときます。

オリジナル紹介　不可視の軍隊とは？

基本構想：国際条約や治外法権などに囚われずに人命救助や紛争根絶などを行うために作られた非公式の軍隊。存在しない軍隊なので、構成員はどんな戦果を上げようと決して表彰されず、精々が多額の報酬を受け取れる程度。
世界各国に陸・空・海軍の三部隊が常駐しており、常に目を光らせている。

技術力：常に研鑽を積んでおり、その技術力は世界の十年先を行くと言われている。『ＩＳを倒せるのはＩＳのみ』という言葉は、彼らの中では既に過去のものとなっている。

部隊

Ｉ・Ａ・Ｆ（インビシブル・フォース）
不可視の空軍。ザックが所属しているのはイギリス支部・漆黒（ダークネス・ファルコン）の隼。隊員は皆薬物投与や改造手術で身体能力を強化されており、通常の人間が耐えられないＧがかかる加速や旋廻などを容易く行えるようになっている。
また、自分を一種の催眠状態に持ち込む事で恐怖心を麻痺させる事でより容赦のない戦いを可能にしている。『生還を忘れた零距離射撃』とは彼等が基本としている戦法で、あらゆる犠牲を厭わずに敵へ接近して叩き落すというもの。因みにこの犠牲には当然上官や部下、同僚、自分自身も含まれている。

薬物の影響で瞳の色が蒼くなっており、「瞳に死沼（ウィル・オー・ウィスプ）へと誘う鬼火を宿す」と言われている。

I・A（インビシブルミー）

不可視の陸軍。日本には「銀（しろがね）」と呼ばれる部隊が存在している。戦車を所有してはいるが、その実力は寧ろ白兵戦で発揮される。事実閉鎖空間内でならば生身でＩＳを破壊出来るというのは基本技能であり、他にも様々な化学兵器や特殊弾頭等を装備している。

I・N（インビシネルビー）

不可視の海軍。アメリカには「赤い海蛇（レッド・シースネーク）」と呼ばれる部隊が存在している。

高速潜水艦を所有しており、水中から一気に地上を強襲するなどの戦法を得意としている。

核装備を許された部隊でもあり、その火力は三軍中随一といえる。

共通しているのは「必要な犠牲を躊躇うな。不要な犠牲は死んでも出すな」という点。

オリジナル紹介　不可視の軍隊とは？（後書き）

彼等の出番ももうすぐです。一体どうなるんでしょうね？（オイ）
ではでは、次回は月曜日までには必ず更新しますので。

第一話　始まりは何時も突然

季節は春、桜の花に飾られた道を鼻歌交じりに一人の青年が歩いていた。肩には大型のショルダーバッグを担ぎ、左手でキャリーケースを転がしている。

「ニャア」

ショルダーバッグから白い子猫が顔を出した。

「こらアポロ。まだ目的地は先だぞ？」

「ニャウ」

アポロと呼ばれた子猫はいそいそとバッグに戻る。その様子に青年は微笑を浮かべつつ足を速めた。

それから少し後。ＩＳ学園の校門前で一人の女性が腕組みをして立っていた。

「遅い・・・！」

既に到着予定時刻を十分程経過している。

「全く奴は！軍を辞めた途端にルーズになりおってからに！」

「しゃーないだろ。元々俺はこっちだぜ？軍を辞めてまで枠に嵌まりたかないわ」

「しかし貴様はもう教師だ！初日からこれでは生徒に示しが付かんだろうが！」

「相変わらず千冬は固いなあ。せっかく美人なんだし、もうちょい愛想よくしないと男釣れないぜ？」

「だだだだだ誰が美人だ誰が！・・・おい」

さっきから自分は誰と会話しているのか、そこに彼女―織斑千冬はようやく疑問を覚えてその存在に目を止めた。

「よう。久しぶりだな」
「・・・何時からそこにいた？」
「んー・・・遅いって唸ってた辺りから」
千冬は俯いて拳を震わせる。
「来たなら来たと・・・」
青年は一歩下がりつつ肩に担いでいたバッグをそっと地面に置いて離れた。
「早く言わんか大馬鹿者がああああああああ！」
「やっぱこうなるかあああああああ！」
殴りかかる千冬を青年が迎え撃つ。ハイレベルな格闘戦を行いつつ、二人の口元には微かに笑みが浮かんでいた。

ＩＳ。インフィニット・ストラトスと呼ばれるそれは、一種のパワードスーツのようなものだ。宇宙での活動を目的に作られたそれは、二転三転して軍事利用されかけ、今ではスポーツの道具と化している。
何故か女性にしか扱えないという事実は世界規模で女尊男卑の文化を浸透させて今日に至る。
そしてそのＩＳの使い手達を集めて育成する施設こそ、このＩＳ学園であった。

何故俺はここにいる。それが織斑一夏の正直な感想だった。
何しろ辺りを見渡せば同年代の少女ばかり。普通なら眼福だろうが、そうは行かない事情があった。何しろここは女子高なのだ。本来なら。

（せめて先生にだけでも男の人がいればなあ・・・）
それは儚い望みだろう。何しろこの学園で教えているのはＩＳ、女性にしか使えない道具を教えるのに男性を起用する意味がない。
「全員席につけ。このクラスを担当する実技教官を紹介する」
千冬が入ってくるのと同時にクラスが静まり返る。その後に続いてきた長身の姿を見た生徒達は一斉にざわめいた。
「ザック・ブルードだ。何の因果か俺もＩＳを動かせるという理由でここに来た。まあよろしく頼む」
周りが色めき立つなか、一夏は女性の中に放り込まれた重圧が少し和らぐのを感じた。

（なるほどね・・・あいつが千冬の弟か）
なにやら地獄で仏のような顔をしているが、残念ながら仏になってやる気は毛頭ない。向こうが頼る分は勝手だが、こちとら戦友の弟だからと特別扱いは出来ないのだから。
「あああああ！思い出しましたわ！『幻想の破壊者（ファンタズム・ブレイカー）』！」
「よーしお前はセシリア・オルコットだったな？悪いがその二つ名は好きじゃないんだ」
大人気ないとは思いつつもそこそこ本気の殺気を込めて睨んでやる。セシリアは短く悲鳴を上げて大人しくなった。
「・・・よし」
「いきなり生徒を威嚇する奴があるか馬鹿者」
千冬が出席簿で頭を叩いてきた。まあ自分でもやりすぎたとは思うのであえて回避せず頭で受けた。
「いきなり済まなかったな。あの二つ名がバレると、何処でも化け物扱いだったからついな。さすがにさっきのはやりすぎた」
とりあえず泣かすことは避けられたと安堵しつつ、ザックは薄く笑った。

「あの・・・すいません」
思わず一夏は手を挙げていた。
「ん？織斑か・・・なんだ？」
何故か思い出す動作がなかったのが疑問になったが、唯一の男子だし覚えやすいかと納得して一夏は質問した。
「失礼を承知で聞きたいんですが、その二つ名の由来を・・・」
「やれやれ・・・勇敢なのか唯の馬鹿か・・・」
「間違いなく後者だ。恥ずかしながら我が弟は頭の回転がさほどよくなくてな」
（大きなお世話だ）
内心一夏がぼやいていると、ザックは溜息を一つついて頷いた。
「まあここでぼかして、後で根も葉もない噂を流されるよりはマシだな。由来は俺がＩＳ抜きでＩＳを撃墜した事が理由だ。現在ＩＳが最強の戦闘システムであるという幻想をぶち壊しにした事への皮肉と畏怖を込められたのが俺の二つ名だ」
空気が凍った。
「マジですか？」
「マジだ。まあ素手でやったわけでは当然ない。スタングレネードで視覚と聴覚を数秒麻痺させ、アサルトライフルの牽制射撃で動きを封じ、バズーカで有り弾全部叩き込んでエネルギーを使い果たさせただけだしな」
それにしたって尋常な腕ではない。
「もちろん、お前等にも訓練次第では十分可能なレベルだ。ご希望なら基礎から叩き込むが？」
とりあえず今は首を横に振った。

To Be Continued.....

第一話　始まりは何時も突然（後書き）

次回予告

遂にＩＳの実技指導が始まる。専用機持ちのセシリアは一夏と戦う前にザックと戦う事を決意。ザックもこれを受諾し、授業は一転二人の模擬戦観戦となってしまう。

次回、『空の牙・蒼き涙を喰らう』

目覚めろ、その魂！

第二話　空の牙・蒼き涙を喰らう

一週間が過ぎた。一夏の部屋が幼馴染の箒と同室で大騒ぎになったり、その彼女が束の妹らしいと分かってまた大騒ぎになったりとなかなかにスリリングな学校生活をザックも楽しんでいた。
「やっぱ一夏を俺の部屋で寝起きさせるべきじゃないか？」
「却下だ。教師が一生徒をえこ贔屓していると見られかねない」
「実の姉貴が担任やってる時点で今更な気がするがな」
ここはザックに割り当てられた部屋である。因みに本人と猫以外で入るのは千冬が始めてだったりする。
「それでもだ。それに相手は箒だし、見ず知らずの相手と同居しろと言ってる訳ではない」
「一夏が卒業までに殺されなきゃいいが」
初日に木刀で穴だらけになった扉を思い出し、ザックは軽く身震いした。
「まさか。私の弟だぞ？」
「その根拠の出所を原稿用紙一枚分に纏めろ。生憎俺は運命と神様の奇跡は全く信じてないんだ」
「奇跡は神が起こすのではない、人が神に出来ない事を成し遂げるからこそ奇跡である・・・か。お前の教官がよく言っていたな」
ザックは無言で肩を竦めた。

実技指導の回、ザックは生徒達のＩＳ装着を見て回っていた。
「・・・おいおい一夏。いくら何でも遅すぎだぞ」
既にセシリアは完了しているにも関わらず、未だにもたついている一夏にザックは苦笑しつつ声をかけた。

「そうは言っても、こう・・・イメージし辛いというか・・・」
「でしたら、先生のお手本を見れば早いのではなくて？」
セシリアが一夏に声をかける。言われてザックも納得してしまった。
「まあ確かに見よう見まねをやろうにも手本が少なすぎるわな。じゃあ・・・」
ザックが首に下げたペンダントに触れようとしたその時だった。

「きゃあああああああああ！どいてくださあああああああああああい！」

「何だぁ？」
思わず顔を上げると、小柄でメガネをかけた女性がＩＳを装着したまま錐揉み状態で突っ込んできた。というか、墜落していた。
「っ・・・！一夏、セシリア下がれ！」
弾道を計算し、彼女を受け止めると同時に背後へ跳んだ。それでも凄まじい衝撃で肋骨が幾つか折れたのが分かった。
（くそ・・・ったれがあああああ！）
いくら絶対防御があるといえど、そもそもザックは絶対という言葉をこの世で一番信用していない。何とか女性の頭を抱え込み、地面と触れる部分は全て自分の体が受け止めるよう体勢を整えて着地した。
「せ、先生生きてる？」
「おう、俺も山田先生も無事だぞー」
生徒達に軽く手を振ってやると、少女達は安堵したように息をついた。

「・・・って答えたけど大丈夫だったか？」
「私は大丈夫ですけど・・・生身で墜落中のＩＳを受け止めるなんて無茶しちゃ駄目ですよ！」
真那は涙目になりながらザックに詰め寄る。肋骨はかなり手酷く折れているのか、彼女の胸が当たるだけでもかなり痛い。しかしザックはダメージを顔には出さずに立ち上がった。
「まあ、ＩＳ起動してる暇がなかったんでな。それに出来たとしてもそれで先生が怪我しちゃ元も子もないでしょ？俺は怪我させない為に助けたんだし」
「う・・・それはまあその、ありがとうございます・・・」
耳まで赤くなっているのを微笑ましげに眺めつつ、ザックは肩を軽く叩いてから一夏達の下へと向かった。

「えっと・・・じゃあ手本だったな」
ザックは軽く呼吸を整え、右手を祈るように挙げる。同時に左手は握り締めて腰だめに構えた。
「変身！」
そう叫ぶと、一瞬の閃光と共にザックの体には漆黒のＩＳが装着されていた。
（へ、変身！？）
思わず一夏は固まってしまった。そりゃそうである。何処の世界に特撮ヒーロー紛いのノリを真剣に通す大人がいるというのか。
「まあ要するに、一番格好良く装着した自分の姿をイメージすりゃいいんだ。俺の場合は仮面ライダーになった訳だが」
しかもあの変身ポーズはアギトだ。一夏の好みで言えば龍騎辺りなのだがそれは余談である。

「先生、特撮好きなんですか？」
「ん？ああ好きだぞ。初めて日本に来てアギト観た時は、何で俺は日本に生まれなかったのかって居るかも分からん神様を呪ったくらいだしな」
冗談めかした口調に、生徒達にも笑いが零れる。
「まあそれはさておき、一夏。とりあえずやってみろ」
頷き、一夏は構えを取る。イメージを固め・・・
「変身！」
一瞬にして自分を何かが包み込む感触。光が晴れた時、一夏は白式を装着していた。
「・・・一夏」
「はい」
ザックはなんとも複雑そうな顔で彼を眺めていた。
（あれ？俺なんかミスった？）
「装着は完璧だった。実際一番早かったしな。けどよ・・・」
ザックは溜息をついた。
「何で・・・しかも王蛇とかカイザならともかく、よりにもよってインペラーなんだよ？」
「え、駄目っすか！？」
それからしばらく、一夏は自分が一番上手くＩＳを起動するためのイメージ固めに四苦八苦する事になる。

やっとこさ全員の装着が終わり、ある程度練習した時だった。
「あの先生」
「セシリアか。どうした？」
「私もイギリスの代表候補です。なので、先生の実力を間近に体験

してみたいのですが・・・」
どうやら見た目に似合わず彼女は相当好戦的らしい。聞けばクラス代表を決める時にも一夏に食って掛かったというし、そう考えれば余り不思議でもないのかもしれないが。
「・・・まあ時間は余ってるしな。よし、残りの十五分を全て俺とセシリアの模擬戦に当てる。俺の勝利条件はセシリアの撃墜、セシリアの条件は俺が条件を時間内に満たせなかった場合でどうだ？もちろん俺を撃墜出来ればその時点で勝ちだ」
「異存はありません」
そう言ってセシリアはブルーティアーズのライフルを構えた。

上空に二人が舞い上がるのを眺め、一夏は二人の機体を見比べてみた。
（セシリアのは射撃戦特化。つか実際に戦ったからそのスペックはよく分かる。で、先生のは・・・クワガタ？あんなもん背負って戦えるのか？）
試合はまずセシリアがライフルを連射しつつ後退。追い縋るザックを足止めする形らしい。
「どう見る？」
箒が近づいてきた。
「そうだな・・・セシリアの性格から言って、時間切れまで粘るってのは有り得ない。そんなに時間かけてたら先生が勝ちに行くしな。どちらにしてもすぐ決着つくんじゃないか？」
そう言って見上げた一夏の視線は、背中のリフターを分離したザックを捕らえていた。

「そろそろカードを一枚切るか。ゴウラム！」
《分離》
背中から合成音声が響き、リフターが分離して独自に動き始めた。
「な、何ですの！？」
「俺の相棒さ。お前の使うビットと似たようなもんだ」
（まあ、俺が操作する訳じゃないがな）
ザックが内心で付け加えていると、ゴウラムは背面と腹部に搭載されたビーム機銃を連射しながらセシリアに迫っていた。
「くっ・・・負けませんわ！」
セシリアはさすがの機動力でゴウラムをかわしつつ、ライフルの照準をザックに向けた。
（流石だな。もうこいつのからくりに気づいたか）
ゴウラムもスカイファングと同じくシールドエネルギーを持っている。それは本体が持っているエネルギーを分ける事で補給しているため、分離している時のスカイファングは通常よりもエネルギーが低下している状態なのだ。つまり、ゴウラムの動きを見切りさえすればザック本人を狙うほうが攻略の難易度はある程度低くなる。
「が・・・虎の子のビットを使いこなせていないなら負ける理由はないな！」
ここでブルーティアーズ最大の特徴であるビットを併用して攻めていれば、ザックも本気を出さざるをえなかっただろう。しかし残念ながらセシリアの技量はまだそこまで至っていない。
「それに照準が素直過ぎだ。これじゃどこで足を止めるかバレバレだぞ？」
左腕のガドリング砲と右手に握られたアサルトライフルを斉射して彼女の動きを止める。その一瞬の隙を突いてゴウラムが背後から巨大なクローでセシリアを腰から掴みあげた。
「きゃあっ！」

「このままクローのシステムを起動すれば一気にエネルギーを削り取られて終わり・・・今降参しておけば痛い目みなくて済むぞ？」
セシリアは悔しげではあったが、すっきりした顔で頷いた。
「今回は私の負けですわ。二つ名に偽りのない、見事な腕前でした」
「恐悦至極」
おどけて礼を取ると、セシリアは声をあげて笑った。

・・・・・・

To Be Continued・・

第二話　空の牙・蒼き涙を喰らう（後書き）

次回予告

一夏とザックが女子校で暮らすという異常事態にようやく慣れてきた頃、一夏のセカンド幼馴染が遂にやってくる。乙女の聖戦が勃発する傍ら、ザックはアポロとルナとの出会いを回想する。

次回、「太陽と月、闇を照らす光たれ」全てを破壊し、全てを繋げ！

あとがき

えー、突然ですがアンケートです。一夏のヒロインはシャルロットで決定しているのですが、ザックのヒロインは未だ未定です。候補は

1．織斑千冬（軍にいた頃の戦友。一夏の面倒を見る意味でも絡みは多い）

2．山田真耶（副担任。今回の話で若干フラグ建つ）

3．篠ノ之束（ある意味ライバル？ザックが生身でＩＳを倒した経緯で彼に興味を抱く）

の三名です。この中で誰とのＥＤが見たいというのがあればコメントでお願いします。

何も反応がなければ山田先生ルートにしようかと考えてはいます。

ではでは。

第三話　太陽と月、闇を照らす光たれ

ザックは今日非番である。というか時間割の関係で彼が担当する授業がない。よって自室で猫じゃらしを振るくらいしかやる事がなかった。

というか、先日真耶を受け止めた時に肋骨を骨折したのが千冬にバレたのも原因の一つであった。

「・・・さっきから爆音だの轟音だの響いてるんだが、また一夏がフラグ立てたか？」

素直に猫じゃらしを追いかけるルナと、何を思ったかザックの手を抑えにかかるアポロを纏めて相手をしつつザックはぼやいた。

一方その頃、当の一夏は・・・命の危険を感じていた。

「だあああああ！鈴のやつなんでこんな怒ってるんだよ？確かあの時、料理の腕が上がったら毎日の食事を作るって言ってたよな？それって普通にあいつの家の中華料理食べ放題ってことじゃないのか？」

聞く人が聞けば、「ブチ殺すぞ旗男」と言いたくもなる台詞を真顔でのたまいながら一夏は白式のスラスターを噴かした。

「コラ待て馬鹿一夏ー！一度や二度と言わず百度は殴られろーーーー！」

「甲龍で殴られたら普通に死ぬだろうがあああああああ！」

馬鹿は死ななければ治らないというが、一夏の鈍感はきっと死んでも治らない。そう思うのは決して間違いではない筈である。

「ザック入るぞ。見舞いだ」
「おうサンキュ」
部屋に入るなり千冬が放り投げた桃缶と栄養ドリンクの入った袋を受け取り、ザックは軽く笑った。
「それからこっちは山田先生からだ。水が合わずに体調を崩したとは、軍にいた頃のお前を知っていれば明らかに言い訳と分かるな」
「しゃーないだろ。自分を受け止めたせいで相手が骨折なんて知ったらハードボイルド通してる俺でもヘコむぞ。心優しい山田先生なら言わずもがな。つか世の中知らないほうが幸せでいられる事なんざそれこそ星の数程あるだろ」
こちらは投げずに渡されたロールケーキの箱を冷蔵庫にしまいつつ、頭に乗って機嫌よく鳴いていたアポロを床に下ろした。
「しかし、お前が猫を飼うとは意外だな。ここに来た時、えらく鞄を気にしていたのもそれか？」
「下手にお前の攻撃受け止めたらこいつら死にそうだったし」
千冬は納得したように頷いて椅子に座った。
「そういや演習場のほうが騒がしかったが、一夏が何かやったか？」
「人の弟をトラブルメーカーみたく言うな。現役時代のお前よりマシだ」
途端にザックは吹き出した。
「確かにな。気に入らない上官のカツラ暴いて晒し者にしたり、ＩＳ至上主義の馬鹿女の食事に入ってたチーズを薄切りの石鹸と摩り替えたりと色々やったっけか？」
因みにザックが撃墜したＩＳの操縦者はその石鹸を食わされた被害者だったりする。
「・・・基地内の放送で同僚が私に宛てたラブレターを叙情的に読み上げた事もあったな？」
「ああやったやった。差出人は三日後に除隊したけどな」
一頻り笑い、ザックは本題に話を戻した。

「・・・で、実際何があったんだ？」
「一夏の幼馴染が編入して来てな・・・」

話を聞いたザックが頭を抱えたのは言う間でもない。

「こう言っちゃなんだが、お前育て方間違えたんじゃ・・・」
「言うな。否定出来ん・・・！」
とりあえずその幼馴染には後でフォローが必要になると判断しつつ、ザックは膝の上で欠伸をするルナを撫でた。
「よく懐いているな。何時からだ？」
「日本に来てすぐ。空港出て東京の街をぶらついてたらな・・・」

「ぜえ、ぜえ・・・っ！？ちょっと待て鈴止まれ！」
「止まって欲しかったら大人しく往生しなさい！」
一夏は慌てて手を振った。
「だから落ち着け！千冬姉が近くにいるんだよ！」
途端に鈴の顔が青ざめた。さすがに二人とも演習場を飛び出したらＩＳを仕舞う程度の分別はあるため、現在はどちらも制服姿だ。
「でも、この辺りだっけ？」
「どうもザック先生の部屋らしいんだ。確か今日体調崩して休んでるけど」

そう一夏が言うと、鈴の目が輝いた。
「ね、それってもしかしてもしかしたりする？」
「分かるかよ。大体千冬姉にそんな浮いた話があった記憶なんざ全然・・・」
そう言いながらも一夏は扉に耳を押し当てる。鈴もそれに倣った。

「ゴミ捨て場だと？」
「ああ。最初は野良猫がゴミ漁ってるのかと思ったんだが、妙に声が小さかったしおまけにくぐもってた。十中八九袋の中だと思って音だけ頼りにゴミ袋を開けたら案の定・・・三匹のうち一匹は間に合わなかったけどな」
キジトラだった、と寂しげに付け加えてザックは力なく笑った。

「・・・鈴落ち着け。とりあえずその間接鳴らすのやめろ。それからセシリアもブルーティアーズ握り締めるな。箒も木刀しまえ」
何時の間にか（箒とセシリアはズタボロにされているであろう一夏の手当てをするため探していた）四人に増えた盗み聞き組だったが、ザックが飼っている猫の話だったと知って脱力。その筈が、アポロとルナとの出会いの話を聞いているうちに女性陣三人はゴミ捨て場の件になるや揃って剣呑な空気を醸し出していた。
（頼むから先生、詳細な住所まで言わないでくれよ？こいつらガチでカチコミかましかねないし）
それが今の一夏の切実な願いだった。
「そこの四人！盗み聞きするくらいなら入って来い」
「「「「いっ！？」」」」

完全にバレていた。

「す、すみません・・・」
「まー気にしてないから安心しろ。大方お前の姉貴が男の部屋にいるんで心配になった訳だろ？」
ザックが笑うと、一夏はばつが悪そうに苦笑いして返した。
（口が裂けても千冬姉がザック先生にトドメ刺すのを心配したとか言えないなこりゃ・・・）
「・・・で、何処まで話したっけか？」
「そいつらを動物病院まで連れて行ったところだ」
千冬の指摘にザックは「おお」と頷き、話を続けた。
「まあ、里親が見つかるまで面倒見るよう頼まれてな。流石に丸投げも寝覚め悪いし、引き受けた訳だ」
「ミャア♪」
喉を撫でられてご満悦なのか、アポロは白い毛並みを見せびらかすように伸びをした。
（ヤバい・・・鈴が捕食者の目になってやがる・・・！）
硬派とふにゃふにゃの葛藤で顔が凄まじい事になっているのは箒だったが、鈴は早々にふにゃける方向に決めたらしい。恐らくアポロとルナ、どちらか一方でも近づけばたちまち頬ずりしかねない雰囲気だった。この辺り、女の子というのは須く可愛い物に弱いのだろう。
「・・・話を続けるぞ？そんな訳で俺はこいつらの面倒を見てた訳だが、見ての通りルナは無口でな。その分アポロが飯時でも喋りながら食ってたくらいだが」
確かに黒猫のルナは活発なアポロとは違い、大人しくザックの膝で

丸くなっていた。
「キツくなかったのですか？」
セシリアが尋ねると、ザックは頷いた。
「メチャキツだぞ？猫は基本六時間周期だし、しかも離乳期もまだの子猫だ。目覚ましセットして夜中に飛び起きてはミルク温めてトイレの世話。体重計ってちゃんと大きくなってるのを確認して・・・その繰り返しだった」
一度ルナが消化不良起こして、慌ててかかりつけの獣医を叩き起こした事もあったと付け加えてザックは小さく笑った。
「まあそんなこんなでようやく里親も決まってな。その人が気に入ったのはルナで、ルナだけを引き取って連れて行こうとしたんだ」

「・・・ニャア！ニャウ！ニャアア！」
初めて聞くルナの声。女性の腕から逃れようと身を捩りながら懸命に声を上げていた。
「す、すみません・・・っ！」
気づけばザックは困惑する女性に頭を下げていた。

「後にも先にもルナが鳴いたのはその時だけだった。アポロと一緒に俺が正式に引き取ってからはまた無口なルナに逆戻りだ・・・セシリア、ハンカチ」
感極まって涙ぐむセシリアにハンカチを渡してザックは話を終わらせた。

「っつー訳だ。納得したか？」
「お前にそこまで情があったとはな」
「お前馬鹿にしてるだろ・・・？」
千冬とザックの空気が微妙になるや、アポロとルナはトコトコと一夏のほうへやって来た。
「ね、ねえ一夏。ルナちゃん貸して？」
「嫌がるならやめとけよ？」
幸いルナは鈴の腕の中でほっとしたように目を閉じている。アポロはセシリアと箒で少し迷ったようだったが、ヒョイと箒の膝に飛び乗った。
（あ、堕ちた）
再会してから一番緩んだ顔を見せる箒に、一夏はようやく肩の荷が下りた感覚を覚えた。

言い合いながらも、千冬は内心小さな同居人達に感謝していた。
（あの日壊れたあいつがここまで持ち直した・・・そこは本当に喜ぶべき事だがな）
それでも表情はあくまで冷静に。自分と彼の関係は戦友であり口喧嘩友達であり、そして多少は弱みを見せてもいいと思わせる相手なのだから。逆に言えばそれだけの関係。
（それで、お前は何時・誰に・何処でなら弱みを見せるのだ？）
再会した時に感じた小さな違和感が少しずつ膨らんでいくのを千冬は感じていた。軍にいた頃とは違う、まるでガラスごしに会話するような感覚が彼女を少なからず苛立たせていた。

箒の膝に飽きたのか、セシリアの膝に飛び移るアポロを眺めながら
ザックは楽しげに口元を緩めた。
（大丈夫・・・俺はまだ、俺だ・・・）

To Be Continued・・・・・

第三話　太陽と月、闇を照らす光たれ（後書き）

次回予告
世界で三人目の男性ＩＳ適格者、シャルル・デュノア。彼の登場を切欠に、一夏の運命も大きく動き始める。箒との暮らしを終え、彼とルームシェアとなった一夏を待ち受けるトンデモイベントとは？
次回、「転校生、気になるアイツは・・・！」天の道を行き、総てを司る！

あとがき
どうも、今現在アンケートは束さんに一票入ってます。とりあえず、紅椿登場までは三ヒロイン共通ルートなのでこのまま行きます。
・・・いっそ三人分ＥＤ書いたほうがいいですかね？その方がいいという方もコメントして貰えると助かります。ではでは～。

第四話　転校生、気になるアイツは・・・！（前書き）

遂に我等が天使にして織斑一夏の嫁、シャルロット・デュノアが登場です！

一番テンション高く書けそうｗ

第四話　転校生、気になるアイツは・・・！

一夏達に子猫との出会いを話してからはや二週間が過ぎた。ザックの肋骨も何とか元通りに治り、無事彼も復帰していた。（とはいえ、セシリアや鈴がしょっちゅう猫目当てに入り浸ってはいたのだが）

「あらザック先生。おはようございます」

「おはよう山田先生。先日は美味しいロールケーキをどうも」

後ろから声をかけてきた真耶に、ザックは振り返ってにこやかに答えた。

「いえ、気に入って頂けたなら何よりです」

実際には九割七分くらい鈴や箒が食べてしまったのだが、そこは言わないでおく。

「よかったら今度店を教えて貰えるか？」

「いいですよ。ただ、ちょっと分かり難い場所にあるんで案内しますね」

そこまで言って真耶は思わず硬直した。

（言っといて何ですけど、これってデートの誘いとかになりますか！？）

中学高校大学と女子校通いだった彼女には男性に対する免疫が余りない。内心かなりワタワタしつつも、見上げなければ見えないザックの顔を見上げた。

「そいつは助かるな。この辺りはまだ不慣れなもんで」

（お、落ち着きなさい山田真耶・・・きっとこれは後から皆も連れて行こうとか言われる展開に・・・）

昔愛読していたラブコメ漫画の展開を思い出し、一応予防線と思っ

て口を開いた。
「ならそうしましょう。全部で何人になりますか？」
「え？普通に俺と山田先生の二人だと思ってたんだが・・・」
再び真耶は固まった。
「流石に一夏達も休日まで教師と顔突合せたかないだろうし、そもそも千冬は甘い物よりビールを好むからな。・・・あれ？俺ＩＳ学園じゃ千冬以外に友達いなくね！？」
突然一人で慌て始めたザックを見、真耶は緊張も取れて笑みを零した。
「大丈夫ですよザック先生。よければ私も友達になりますから」
「あ、それは助かるな。えっと・・・名前で呼んでも？基本友人は名前で呼ぶ主義なんで」
顔が熱くなるのを感じつつ真耶は頷いた。
「じゃあ真耶、よろしくな。あ、俺の事も先生は抜きで頼む」
「・・・はい、ザックさん！」

そんな会話から数分後、一夏達のクラスはとんでもない爆弾をぶちかまされていた。
「フランスから来ました、シャルル・デュノアです。よろしくお願いします」
世界で三人目（ザックと一夏どちらが一人目かは未だ両国で決着がついていない）の男性ＩＳ操縦者にクラスの女子達は一斉に歓声をあげた。
「きゃあああ！今度は守ってあげたい美少年系！」
「二人目の男の子なんて！」
黄色い歓声にシャルルは顔を引き攣らせていた。

その様子を廊下の前でたまたま通りかかったザックはその情報に眉を顰めた。
（フランスでデュノアっつったら・・・間違いなくデュノア社の関係者だよな？息子・・・？）
足早にその場を立ち去り、屋上で携帯電話をつないだ。
「Ｈｅ ｉｓ ｍｅ．Ｔｈｅｒｅ ｉｓ ａ ｒｅｑｕｅｓｔ．
（俺だ。頼みがある）」
《Ｗｈａｔ？（何だ？）》
軍時代の同僚に繋ぎ、ザックは久々に操る母国語で話し始めた。
「Ｉｎｖｅｓｔｉｇａｔｅ ｗｈｅｔｈｅｒ ｔｈｅ ｓｏｎ ｗａｓ ｂｏｒｎ ａｍｏｎｇ ｔｈｅ ｗｏｍｅｎ ｔｏ ｗｈｏｍ Ｄｕｎｏｉｓ'ｓ ｐｒｅｓｉｄｅｎｔ ｈａｄ ａ ｒｅｌａｔｉｏｎ ｉｎ ｔｈｅ ｐａｓｔ．（デュノア社の社長が過去に関係を持った女性との間に息子がいたかどうかを調べてくれ）」
《Ｉｔ ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ．Ｉｔ ｇｉｖｅｓ ｆｏｒ ３０ ｍｉｎｕｔｅｓ ａｎｄ ｉｓ．（了解した。三十分くれ）》
通信を切り、ザックは軽く溜息をついて職員室に向かった。

それから三十分後、相棒はザックが予想した通りの情報を並べてきた。
《Ｉｔ ｉｓ ｌｉｋｅ ｔｈｉｓ ｔｈａｔ Ｉ ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ．Ｐｒｅｓｉｄｅｎｔ Ｄｕｎｏｉｓ ｄｏｅｓ ｎｏｔ ｈａｖｅ ａ ｃｈｉｌｄ ｗｉｔｈ ａ ｌｅｇａｌ ｗｉ

ｆｅ．ｉｔ ｓｅｅｍｓ ｔｈａｔ ｉｎｓｔｅａｄ，ｔｈｅｒｅ ｉｓ ａ ｄａｕｇｈｔｅｒ ａｍｏｎｇ ｌｏｖｅｒｓ Ｄｏ ｓｏ？（分かった事はこうだ。デュノア社長には正妻との間に子供はいない。その代わり愛人との間に娘がいるようだがな）》

「Ｉｔ ａｐｐｒｅｃｉａｔｅｓ．（そうか、感謝する）」

ザックは通信を切り、携帯を握り締めたまま空を睨んで怒鳴った。

「Ｄｏｎ't ｐｌａｙ ａ ｔｒｉｃｋ！ Ｅｖｅｎ ｂｙ ｙｏｕｒ ｍａｋｉｎｇ ａ ｔｏｏｌ ｔｈｅ ｄａｕｇｈｔｅｒ ｗｈｏ ｄｉｖｉｄｅｄ ｂｌｏｏｄ，ｄｏ ｙｏｕ ｗａｎｔ ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ！？（ふざけるなよ！血を分けた娘を道具にしてまで情報が欲しいのか！？）」

その日の夕方。一夏はシャルルを先に部屋へ帰し（新しいルームメイトは彼に決まった）、ザックの部屋で今後の課題をプリントアウトして貰っていた。

「唯闇雲に避けるんじゃなくて、相手が持ってる銃の傾きとかから何処に撃ってくるか予想して避けろかあ・・・俺にやれるのかよ？」

ザックは受け持っている全ての生徒に対し、個別に課題を作って渡すため、ある意味では非常にやり易い。一夏はそんな事を考えつつ自室の扉を開けた。

「あれ？シャルルはシャワーか？」

断っておくが、一夏に下心は全くなかった。というか、久々に同年代の男子と話すのでつい浮かれていたのだろう（それもそれで問題あるが）。何となしにそんな事を言いながらシャワー室のドアを開けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

固まった。丁度シャルルがタオルで髪を拭きながら出てきたところ

だったのだが、彼には男にある筈のものがなく代わりにない筈のものがあった。

シャルルの悲鳴で一夏が復活するまでに十秒。それから二人が落ち着くまでにはたっぷり十分かかった。

「えっとだな・・・」

今はジャージ姿で座っているシャルルと目を合わせ、一夏は言葉を探した。

「お前あれか？お湯を被ると女になる体質とか」

「そんな妖怪みたいな生き物じゃないよ！イチカ、言うに事欠いてそれ！？」

「いや、日本のちょっと古い漫画でそういうのがあるんだ。何でも中国のとある泉の水を被ったせいとかで」

シャルルは微妙に苦笑いだ。

「それはまた大変だね・・・そうじゃなくて、僕はイチカが見てのとお・・・り・・・」

見る見るうちにシャルルの白い頬が紅潮し、瞳にも涙が溜まり始める。

「だあああああ思い出さなくていい！俺が悪かった！つかマジで済まん！」

「は、初め・・・全部、全部・・・」

「あーほら！お茶飲もう、それで落ち着こうぜ？な？」

何とかシャルルを落ち着かせ、二人は一息入れてから話を再開した。

「と、とにかく僕は正真正銘女の子。それで・・・これは僕の父に頼まれたんだ」

「シャルルの親父さんって・・・まさかデュノア社の？」

コクリとシャルルは頷いた。
「僕ね、本妻の子供じゃないんだ。愛人の子供だったの」
「え」
「父とは別々に暮らしてたんだけど、2年前お母さんが亡くなった時に引き取られたんだ。それで色々検査を受けたらＩＳ適正が高い事が分かって・・・非公式だけどテストパイロットをしてた。でも父とはほとんど会った事もなくて、話した時間は一時間程度にも満たないんだ」
一夏は険しい顔で手で待ったをかけた。
「シャルル、辛いなら無理に話さなくてもいいぞ？」
「イチカ？」
「お前はお湯を浴びたら女になる。それでいいじゃないか。俺はそれで納得する」
一瞬シャルルは呆けた顔をしたが、口に手を当てて笑い出した。
「ありがと・・・でもイチカには聞いて欲しい」
「・・・分かった」
「まずは話題作り」
シャルルの何処か諦めたような顔が妙に一夏の癪に障った。
「僕は非公式のテストパイロットだったから誤魔化しようはあったし、そういう状況を作ってでもデュノア社を持ち上げる必要が出てきたんだ。今深刻な経営危機に陥ってるから」
「マジか！？けどデュノア社って、量産型ＩＳのシェアが世界クラスだって前に何かの資料で見たぞ！？」
一夏が驚愕するが、シャルルは首を振った。
「それは第2世代の話。今ＩＳ開発は第3世代に移行してるんだよ？オルコットさんがここに来たのもそのテストだろうし、それに第3世代の研究は難しいんだ。何処も国の支援を受けてやっとっていうレベルでね」
シャルルはここで一息入れるためにお茶を一口飲んだ。
「まあ、ザック先生みたいにラファール・リヴァイヴをベースにし

て専用機を作る人もいるけど」
ここはザックが授業の合間に教えてくれていた。
「本当のプロは新装備盛り沢山の試作機よりも、低スペックでも信頼性の高い機体を選ぶもの。試作機貰って喜ぶのは英雄気取りの新兵か死にたがりの馬鹿だけ・・・そう言ってたな」
「なんだよね。僕もスカイファングのスペック見て驚いたし」
一夏は情報を整理する為に少し黙ってから口を開いた。
「えっとつまり・・・今のデュノア社じゃ第3世代のＩＳ開発は難しいって事か？」
「正解。ただ正確には出来ないんじゃなくて、やってるけど難しい――遅れてるって感じかな。フランスは欧州連合の統合防衛計画からも除名されてるし、第3世代型ＩＳの開発は急務でもあるのにね。国防のためもあるけど、資本力に劣る国がそういうアドバンテージを取れないと本当に悲惨な事になる」
「確か、イグニッション・プランだったな」
一夏が言うとシャルルは目を丸くした。
「驚くなよ。俺だって伊達にザック先生に補習喰らってる訳じゃないんだ」
因みにこの補習には、放課後に一夏を野放しにすると女子達が放っておかないから大変だろうという千冬の姉心が働いていたりするのだが・・・それは一夏の与り知らないところであった。
「ゴメンね。話を戻すけど、デュノア社にフランスはその抑止力となる第3世代型のＩＳの開発をかなり前から依頼していた。でもあそこは宝くじが当たって大きくなったような企業だから、開発は進まない」
「そうなのか？　というか、宝くじって」
「ラファール・リヴァイヴ自体が第2世代型の中でも最後発の機体だしね。企業そのものの開発技術とノウハウが不足してるんだよ。そのためにフランス政府からの通達で予算を大幅にカットされたんだ。そして次のトライアルで選ばれなかった場合、国からの補助は

全面カット。あとはＩＳの開発許可も剥奪される」
「おいおい、それ無茶だろ！　だってトライアルって事は・・・機体そのものも出来てないのに！」
そもそもトライアルは、様々な実験機を作ってそれらをテストして正式採用型を決めるものだ。実験機すらない状態でトライアルなど馬鹿げているという事は一夏にも分かった。
「うん、だから倒産はほぼ確定かな。だから僕なんだ。父は僕を男に仕立て上げてデュノア社の広告塔にするつもりなんだよ。希少なモルモットを所有している事を政府との交渉材料にする為にね」
一瞬歯がギシリと音を立てる。一夏は自分でも気づかないうちに歯軋りしていたらしい。
「後はスパイ。日本に発生した特異ケース、イチカと接触するには男のほうがやり易い。可能であれば白式の稼動データと本人のデータを盗んで来いってね」
「それはつまり・・・俺と白式のデータを参考にして開発を進めるって事か。あれ？じゃあ先生のは？」
「ザック先生については何も言われてない。特異ケースではあるけど、スカイファングはそもそもラファールをベースにしてるからね。それにカスタマイズの方向性がとんがりすぎてて参考にならないと思う。それにこうしてイチカと同室になったから、君に狙いを絞れって命令された」
シャルルはそこで頭を下げた。
「とにかくイチカ、嘘ついてごめん」
「いや、それは俺も悪かったし・・・おい？お前これからどうするんだ？」
シャルルは何処か疲れたように笑った。
「女だってバレたから、本国に戻されると思う。後は知らないけど、多分牢屋行きかな」
「いいのかよそれで」
「え？」

自分でも驚く程に低い声が一夏の口から飛び出した。
「それでいいのかよ！親が何だ！？親だからってこんな仕打ちをする権利があるのかよ！おかしいだろこんなの！」
シャルルの両肩を掴み、一夏は怒鳴っていた。
「い、イチカどうしたの？急に・・・」
「・・・俺と千冬姉は親に捨てられた。それはいい。俺の家族は千冬姉だけだ。お前はそれでいいのか？」
「仕方ないよ。僕にはどうしようも・・・」
一夏はシャルルの言葉を遮った。
「ある。お前はここにいろ」
生徒手帳を取り出し、手早くページを繰っていく。
「ＩＳ学園特記事項第２１条。本学園における生徒はその在学中において、ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外敵介入は原則として許可されない」
シャルルが目を見開くのを見、一夏は続けた。
「つまりこの学園にいれば三年は安全だ。デュノア社が何をしようとシャルルは守られる」
一息入れて気持ちを落ち着かせ、一夏は安心させるように笑いかけた。
「その間に見つけよう。シャルルがどうしたいのか、何処にいたいのか、『これしかない』じゃなくて、『これもある』に変えるためにさ」
「うん・・・ありがと、イチカ」
シャルルは目元を拭い、微笑んだ。
「・・・そうだイチカ。僕の本当の名前、教えておくね」
そう前置きしてシャルルはぺこりとお辞儀した。
「始めまして、シャルロット・デュノアです」
「始めまして、織斑一夏です」
同じように一夏も応え、二人はしばらく笑い合っていた。

To Be Continued.....

第四話　転校生、気になるアイツは・・・！（後書き）

次回予告
シャルロットの秘密を守るため、一夏はフォローに追われる毎日を送る。その中で深まる二人の絆、焦る箒達、蔓延する一夏のホモ疑惑。そんなゴタゴタが続くなか、今度はドイツから銀の戦姫がやってくる。
次回、『鋼鉄の黒兎はブリュンヒルデの夢を見る』さあ、お前の罪を数えろ！

あとがき
本来はラウラが来るまでシャルロットの正体はバレませんが、この話では速攻バレました。こうしたほうがやっぱり少しずつ仲良くなる描写がやれますし。
後、本文中でザックがやった英語会話はエキサイト翻訳を使っているため、余り正確ではないかもしれません。その辺りは平にご容赦を。

現在の投票結果（全４票）
千冬　３票
真耶　０票
束　１票

今時代の流行りはクールでカッコいい姉というジャンルなんでしょうか？まだまだ投票は締め切りませんので、皆さんの清き一票をお待ちしております（爆）

第五話　鋼鉄の黒兎はブリュンヒルデの夢を見る

一夏がシャルロットの秘密を知ってから一週間が過ぎた。相変わらず外では男として過ごす彼女のフォローは一夏の予想を超えて過酷であった。

事例その１

「えっと、イチカ？ここって男子トイレだよね？」

「仕方ないだろ！ここでお前を女子トイレに行かせる訳にいかないし、入り口で俺が見張ってもいいんだが・・・」

「あ、そっか・・・女子トイレの前に立ってたらイチカの立場が危ないよね。うん、頑張る・・・！」

事例その２

「浴場も男子専用が出来たみたいだな。よし、俺は入り口で待ってるから先に入ってきていいぞ」

「え、でもそこにいたら怪しまれない？」

「大丈夫、こんな事もあろうかと携帯端末に参考書の課題全部インストールしてきた！」

「そうじゃなくて、中に誰もいない筈なのにイチカが外にいたら変だよ」

「それがあったあああ！どうする？」

「よし・・・じゃあさ、一緒に入ろ？」

「シャルーーーーーー！？」

こんな調子である。結局押し切られる形で風呂は一緒に入ったものの、意地でもシャルロットのほうを見なかった自分の理性を褒めてやりたい。
（流石に理性がもたないよな・・・）
ぶっちゃけシャルロットは可愛い。一夏の周囲には割りとキツめの顔立ちの異性が多いせいか、優しく整ったシャルロットの顔は見ていて安心出来る。箒程じゃないにせよ、スタイルもいい。性格は言わずもがな、些か従順過ぎるきらいはあるものの気遣い上手な性格はオアシスと言ってもいい。
（くぁあああああ！消えろ雑念！燃えろ理性！）
そんな少女と同じ部屋で寝起きしているという事実に一夏の脳は沸騰寸前であった。
「何やっとんだお前は・・・」
猫砂と缶詰の入った袋を提げ、ザックが呆れ顔でぼやいた。

ある日の放課後。今回の補修にはシャルロットも参加する事になっていた。（これは極力一夏がシャルロットの傍を離れなくて済むように相談して決めた）
「じゃあ今日の課題は高機動中の格闘戦についてだ。特に一夏は雪片弐型の事もあるから、よく聞いておけよ？」
「はい」
ザックは頷いて映像を呼び出した。
「ＩＳに限らず、ドッグファイトをやる時に相手と接触している時間ははっきり言ってかなり短い。本当に一瞬と言っても構わないくらいだ。そういう状況で雪片弐型みたいな持っているだけで消耗す

る武装を使いっぱなしというのは、正直頂けない」
思わず一夏の頬が引き攣る。セシリアと戦った時、ものの見事に自滅した事を思い出したのだ。
「やるとしたら、普段は武器を仕舞っておいてクロスレンジに持ち込んだ一瞬だけ起動させる。日本の剣術にある、居合いの型だな。俺の知る限り、これが最も理想的な形といえる」
「あの先生」
シャルットが挙手した。
「何だ？」
「僕の場合、近接用武器がパイルバンカーになるんですが・・・この場合も同様でしょうか？」
ザックは彼女が表示したデータに目を通し、軽く頷いた。
「そうなるな。実際シャルルの得意技と組み合わせれば、これほど怖い武器もないだろう」
そんな風に今日の補修は終わり、一夏達三人はザックが所有しているＤＶＤを何本か観たりアポロ達と遊んだりして過ごした。

（どうやらシャルルは一夏に自分の正体を話したみたいだな。時に一夏よ、お前がシャルルとよく行動を共にしているせいか学校で噂になってるぞ？お前が同性愛者だとか）
事情を知っているザックからすれば苦笑いしか出来ない話ではあったが。

それから更に数日後。一夏達のクラスにもう一人転校してきた。
「ドイツから来たラウラ・ボーデヴィッヒさんです。皆さん仲良くして下さいね？」
真耶が紹介するが、当のラウラはにこりともしない。そのままつかつかと一夏に歩み寄り、裏拳気味に頬を打とうとしたその時だった。
「Ａｕｆｍｅｒｋｓａｍｋｅｉｔ！（気をつけ！）」
途端にラウラが竦み上がり、その場で気をつけの姿勢を取った。
「Ｅｉｎｅ　Ｋｅｈｒｔｗｅｎｄｕｎｇ！（回れ右！）」
言われるままに背後を向き、そこに立っていたザックに目を見開いた。
「Ｋｎｉｒｓｃｈｅｎ　Ｓｉｅ　ｍｉｔ　Ａｕｇｅｎ　ｄａｍｉｔ！（目を食い縛れ！）」
「は・・・ええ！？」
クラスの大半がドイツ語を理解出来ないせいか、何が起こっているのか全く理解不能であった。千冬だけは分かっているのか、口元が微妙に笑いを堪えるように震えていた。
「Ｖｅｒｓｔａｎｄ，　ｄａ？　ｉｃｈ　ｅｓ　ｎｉｃｈｔ　ｍａｃｈｅｎ　ｋａｎｎ？（出来ないというつもりか？）」
「Ｎｅｉｎ，　ｂｅｓｔｉｍｍｅｎ　Ｓｉｅ　ｓｏ　ｅｉｎｅ　Ｓａｃｈｅ！（いいえ、そのような事は決して！）」
ラウラは必死で眼帯で覆われていない右目を閉じようとしている。ザックは困ったように笑い、そっと彼女の肩に手を置いた。
「Ｉｃｈ　ｋａｎｎ　ｅｓ　ｎｉｃｈｔ　ｉｍ　ａｌｌｇｅｍｅｉｎｅｎ　ｍａｃｈｅｎ．（普通は出来ないぞ）」
そう言って彼女の頭を軽く小突いた。
「うう・・・ブルード教官は相変わらず意地の悪い」
「それが個性なもんでな。で、俺はお前に初対面でいきなり喧嘩売

るようなやり方を教えた覚えはないんだが？俺があいつを見損なってるんでなければ千冬も同じく」
責める口調でこそないが、何処となく呆れを滲ませた声にラウラは元々小さな体を更に縮こまらせてしまう。
「ドイツ政府から何を言われたか知らんが、ここに来た以上はお前も生徒なんだ。馴れ合いをやれとまでは言わないが、せめて平和的に人間関係を築け。平和的にな」
ラウラは無言で一夏に頭を下げ、そのまま指名された席についた。

それから。そのラウラがセシリアと鈴にまとめて喧嘩を売って再びザックに拳骨を喰らったり、次の試合がタッグマッチに決定して皆がそのパートナー選びに奔走したりと色々あった訳ではあるが・・・。

「つまり、ラウラの目的はお前を連れ戻す事だと」
「ああ。私が一夏を理由にドイツ軍を去ったのが不満らしい」
やれやれと言ったふうの千冬に、ザックは軽く肩を竦めた。
「お前何だかんだと面倒見よかったしな。厳しくも優しい姉とからかい癖のある兄貴とってところか」
「さり気無く自分を混ぜるな」
ザックと千冬は彼女の部屋でビールを飲みながら今後の事を相談していた。
「さすがに自惚れすぎかね？」
「・・・そうは言っていない」
ラウラの今後に多少不安を覚えつつも、ザックは缶に残ったビールを一気に呷った。
「時にザック」
「あ？」

「山田先生と休日に出かけるそうだな」
「・・・ああ、その事か。買い物があるんだったら引き受けるが」
千冬はしばし見透かすようにザックを見ていたが、ややあって「いやいい」とだけ言ってその話を終わらせた。

空き缶やつまみを入れていた皿を片付け、ザックが帰った後。千冬は寝巻きに着替えてベッドに倒れこんだ。
（奴め、後ろめたい事など何もないという訳か）
多少慌てた様子があれば、それを肴にからかえたというのに。予想に反して彼の反応は全く罪の意識のない普通の反応だった。
（私はあいつの反応が普通で安心しているのか、それともがっかりしているのか？）
考えれば考える程訳が分からない。千冬は軽く頭を振って目を閉じた。

同じ頃。自室に戻ったザックは電話に留守電が入っている事に気づいてボタンを押した。
《留守電メッセージは、９８件です》
「まさか、またか・・・？」
可愛らしい女性の声で延々とお経が流れ始め、ザックは思わず頭を抱えた。
「またか、束ええええええええ！」
ザックが生身でＩＳを撃墜してからというもの、何処で番号を調べ

たのか篠ノ乃束はこうやって留守電に延々とお経を吹き込むという嫌がらせとしか思えないアプローチを仕掛けてきていた。
（お陰で覚えちまったじゃねえか・・・！）
千冬にも相談してみたが、余りアテには出来ないだろう。彼女も束のフリーダムぶりには手を焼いているようだし。
因みに何故彼女が束と分かったかというと、最後の最後で自己紹介していたからだったりする。
「実際に会ったら覚えとけよ？ぜってーシメてやる！」
本当に束と出会ったらどうなるのか、それを彼はまだ知らなかった。

ラウラは窓から夜空を見上げていた。
「私は必ず、教官を連れて戻る。その為なら・・・」
手の中のシュヴァルツェア・レーゲンを握り締め、小さくそう呟いた。

ｅｄ．．．．．

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕ

第五話　鋼鉄の黒兎はブリュンヒルデの夢を見る（後書き）

遂に始まる大会。一夏はシャルロットと共に優勝を目指して邁進する。
しかしそこに立ち塞がるのはドイツの黒兎とファースト幼馴染だった！？
次回、「煌け白刃、駆けよ疾風」戦わなければ生き残れない！

さて、今回で一応三ヒロイン全員とザックの関わりが明らかになりました。
現在の三人のザックに対する好感度みたいなのを説明しますと、
千冬：弱みを見せられる相手。他の女性と関わりがあっても、まだ妬いたりするレベルではない。（というよりその辺りが自分でよく分かっていない）
真耶：気になる男性。恋愛小説のようなシチュエーションと重なる部分があるせいか、かなり舞い上がっている状態。
束：とにかくちょっかいをかけたい。生身でＩＳを倒せる男の技術やその精神面等に多大な興味を抱いている。

こんな辺りです。千冬は一夏の姉ですし、自分の色恋沙汰には凄い鈍そうなイメージがあるのは自分だけですかね？
アンケート結果は今のところ５票中千冬が４票持って行ってます。
はたしてこのまま独走か！？

第六話　煌け白刃・駆けよ疾風

遂に始まったトーナメント。第三回戦で準備をしている両チームのデータを確認しつつ、ザックは小さく溜息をついた。
「神様ってのはとことん残酷っつーか・・・意地悪いよな」
「お前が言うな」
千冬は軽く突っ込みつつも、内心は彼に同意していた。

第三試合：織斑一夏＆シャルル・デュノアＶＳ篠ノ乃箒＆ラウラ・ボーデヴィッヒ

「どちらが優勢でしょうか？」
真耶の疑問にザックはデータから目を離さず答えた。
「単純に個人の技量で言えば間違いなくラウラが上だ。しかしこれはタッグ戦・・・少なくとも箒にラウラと連携するだけの気概はないだろう」
千冬が横で頷いた。
「本来なら五秒前まで殺し合いをしていても任務なら連携してみせるのがプロだが、流石に高校生にそこまで求めるのは酷だしな。それなら一夏とシャルルのコンビのほうが有利になる」
真耶は難しい顔で試合場に目をやった。
「更に一夏達が有利な理由は、ラウラの手札をある程度知っている点だな。しかも鈴とセシリアが攻略の糸口を既に見つけている。逆にラウラの手元には二人のＩＳが持つスペックデータはあっても、操縦者の得意な戦法や弱点のデータがない。しかもあいつ、一夏を完全にナメてる部分もあるからな」
「とはいえあいつもプロ・・・数合も撃ち合えばすぐにその認識は

修正するだろう」
千冬の指摘にザックは頷いて続けた。
「実質この試合は二対二ではなく、二対一対一の状態だ。箒を完全に無視する訳にもいかないだろうし、やるとしたらシャルルが箒を速攻で片付けて二人がかりでラウラと戦うのが定石だろうな。つか俺ならそうする」
「そうですか・・・だとするとこの試合は・・・」
「何も起きなければ普通に一夏達の勝ちだ。たださっきから耳の後ろが痒くて仕方ない」
ザックが左耳の後ろを指で?きながらぼやくと、千冬が微妙に引き攣った顔でこちらを見た。
「まさか、またあのジンクスか?」
「今度こそ返上したいもんだがな」
さっきから感じている憂鬱な気分の原因はそれだ。ザックはそう自分に言い聞かせ、飛び立つ四機のＩＳを見送った。

試合開始。一夏の駆る白式がジグザグに飛行しながらラウラのシュヴァルツェア・レーゲンに迫る。懐に飛び込む一瞬前に抜き放たれた零落白夜がラウラの胴を斬る寸前で止められた。
「ちっ・・・！やっぱり止められたか」
「開戦直後の先制攻撃か。分かり易いな」
軽口を叩きながらも、ラウラは内心冷や汗をかいていた。自分の手元にあったデータでは織斑一夏は完全無欠の素人であり、こういう場合は一直線に突っ込んで来ると予想していたのだ。しかし彼が取った軌道は回避運動と撹乱を織り交ぜたプロの動きであり、完全に

予想外だった。
（教官二人が教えているのだ。寧ろこれくらいは当然か・・・！）
認識を書き換えようとした途端、今度は横からオレンジの閃光が突っ込んできた。
「しま・・・っ！」
ＡＩＣの弱点を的確に突く動きに、やむなくシステムを停止させる。距離を取り、ワイヤーブレードを発射してシャルルを牽制しようとした時だった。
「はぁぁぁぁぁーっ！」
箒の打鉄がブレードを振り被ってシャルロットに斬りかかったのだ。
（遅いぞ全く・・・）
試合前に自分を利用しろと言ったのにも関わらずこの有様だ。当初の予定であった圧勝とは行かない事態に、ラウラは小さく嘆息した。

「あンの馬鹿！射撃武器を回避しつつ接近するマニューバは幾つも教えただろうが！！」
シャルルが放つアサルトライフルに被弾するのも構わず直進する箒に、ザックは憤懣やるかたないといった顔で怒鳴った。
「良くも悪くも侍根性の抜けん奴だからな。まあ、これならお前の予測通りに事は運びそうだ」
千冬も呆れているのか、溜息交じりに言った。
試合状況は、ダメージに構わず距離を詰めようとしていた箒を割って入った一夏が蹴り飛ばし、そこにシャルロットがライフルから切り替えたバズーカを二発叩き込んで追撃したところだった。
「デュノア君、凄く切り替えが早いですね」

「ラピッド・スイッチだな。シャルルが第二世代でも渡り合える訳だ」
一度模擬戦で戦った時、やむなくタイタンを抜かされた事を思い出してザックは苦笑した。
「あれには私も驚いたぞ。というよりザック、お前腕が鈍ったのではないか？」
「ほっとけ！俺もあれはショックだったんだよ！お前以外にタイタンを使う気はさらさらなかったんだからな！？」
特に深い意味もなく言った台詞だったが、千冬は何故か目を逸らして試合に戻した。
（私だけ、か・・・）
一瞬だけ口元が綻びかけるのを必死に隠してはいたが。

ラウラが箒をワイヤーで引き戻し、一夏との一騎打ちに持ち込んでいた。防戦になっているとはいえ、決して技量の低くないラウラを相手に立ち回っているのだから一夏の技量も十分並外れているといえた。
「何を笑っている！」
自分でも気づかないうちに笑っていたらしい。少し苛立ったようにブレードを振るうラウラに応戦しつつ答えた。
「お前が仲間を見捨てるような奴じゃないって分かったからな！」
「何の話だ！」
逆袈裟に振るわれたブレードを受け流し、カウンターの要領で右肩に当てつつ加速する。
「箒を助けただろ？だから嬉しいんだよ」
「仲間を手駒にされて嬉しいとは酔狂な奴だ」

「それでも助けた事に変わりない。安心したよ」
「抜かせ！」
次々と射出されるワイヤーブレードを通常状態の雪片弐型で切り払いながら距離を詰めていく。
「イチカ！」
背後で箒に照準を合わせていたシャルロットから通信が入った。
「五分！」
「任せて！三分でやるよ！」
ラウラの黒い雨を攻略する為にはシャルロットの援護が不可欠になる。逆に言えば、接近戦上等の一夏一人で彼女と戦うのは荷が重い。
（さて、シャルが来るまでに落とされたら最悪にカッコ悪いよな！）
ＡＩＣを使ってこない今なら十分渡り合える。一夏は咆哮と共に挑みかかった。

「三分だと・・・！？」
「うん、今の篠ノ乃さんなら三分で勝てる」
その言葉に激昂して突っ込んでくる箒に狙いを定め、シャルロットは武装を重機関銃に切り替えてトリガーを引いた。
「卑怯者！正々堂々勝負しろ！」
「勝負してるよ？ちゃんと僕に出来る事を最大限に生かして戦ってるんだから」
少なくとも剣道で優勝経験のある箒に接近戦を挑むのは愚策と言っていい。だからこそシャルロットは彼女の間合いで戦わず、自分の長所を生かせる距離を保ち続けていた。
「ふざけるな！飛び道具などに頼らず、私の剣を受けてみろ！一対一の決闘から逃げるのか！？」
シャルロットは溜息をついた。

「あのさ・・・ザック先生が言ってたでしょ？己の長所を生かして相手の長所を殺せって」
この場合は、シャルロットの得意な長距離戦で箒の得意な接近戦を行わせないというケースが該当する。
既にエネルギーが残り少ないにも関わらず一直線に突っ込んでくる箒を体を捻ってかわし、がら空きの背中めがけてショットガンとバズーカを一気に叩き込んだ。

「・・・二分十三秒か。宣言よりも早かったな」
情けなさそうにザックが呟いた。
「千冬、箒は林間学校の時に特別補習受けさせるのでいいか？」
千冬は眉間に皺を寄せて頷いた。
「ああ。いっそ例の軍曹式に鍛えてやれ」
「俺の所属は空軍だ！」
というか年頃の少女達が大半のこの学び舎で、あんな下ネタ満載かつ伏字だらけの罵詈雑言なんぞ張り上げた日にはザックの両手がセクハラで後ろに回りかねない。
「まあそれはさすがに冗談だが・・・これで決まりか？」
「だといいんだが・・・」

完全に自分の不手際だった。自分自身箒をパートナーとして信頼し切れていない部分があったのは否めない。そんな後悔をする暇もなく、金色の光に包まれた白式が一直線に斬り込んできた。
「ええい！」

まともに貰えば唯では済むまい。そう考えてＡＩＣを起動させる。
レールガンを零距離で当てて反撃を試みた途端、今度はシャルルの狙撃でレールガンが破壊された。
（やはり弱点は完全にバレているか・・・！）
歯噛みしつつも、思考を組み替えていく。
（考えろ・・・教官達ならこの場合どう反撃する？）

「普通に尻尾巻いて逃げるぞ俺は」
腕組みをしたまま、ザックは言った。
「そうだな。実戦なら死なない事が最優先事項だ・・・試合ならどうする？」
「んー・・・一夏とシャルル、厄介なのは武装が多彩かつ使いこなす技量のあるシャルルだ。かといって一撃の威力では最強格の一夏を完全に無視出来る訳じゃない。シャルルを牽制射撃で抑えつつ一夏に雪片弐型を使わせる距離を保ち、使わせると同時に距離を取る事で無駄弾撃たせて自滅を誘う。それが終わったら遠距離からシャルルを落とすってのが今俺とスカイファングにやれる最善策だな」
口ではそう言ったものの、正直なところ今あの二人を相手に勝てる確率はいいとこ六割だろう。
（やっぱ実戦退くとカン鈍るのかねえ・・・？）
一度本格的に鍛えなおす必要がありそうだ。ザックはそう気合を入れ直して試合に目を向けた。

前衛と後衛を入れ替え、今度はシャルロットが前に出た。放たれた砲弾をＡＩＣで止め、ワイヤーブレードで彼女を狙い撃つも、その隙を突いて一夏が一撃を入れた。
「ナイス、イチカ！」
「仕上げだシャル！一気に決めるぞ！」
その声に、すかさずシャルロットはイグニッション・ブーストを起動。体勢を立て直したラウラの腹にシールドを突きつけた。
「この距離なら！」
「シールド・ピアス・・・！」
巨大な杭打ち機が装甲に守られた華奢な体を一気に１００ｍ程吹っ飛ばした。

「うわっ・・・またすげえ良いのが入ったな」
思わず自分の腹を押さえながらザックが呻いた。彼もシャルロットのあれを喰らった経験を持つ為、どれだけのダメージを食らう代物かはよく知っている。
「・・・そういや前に何かのアニメかゲームであんな感じの武器があったような？」
「どこの古鉄だ。いくらラウラといえど、あれを立て続けに喰らっては一たまりもあるまい」
千冬が分析する横で真耶がふと何かに気づいたように目を凝らした。
「真耶？」
「いえ、ボーデヴィッヒさんのＩＳが・・・」
その瞬間ザックは総毛立つような感覚を覚えて目を見開いた。
「あれは・・・！？」

ＩＳが液状化し、青い火花を散らしながら変化していく。ややあってそれは黒いＩＳを纏った女性の姿を模った。
「おいおいおい！あれって千冬じゃないのか！？」
避難警報を出し、自分は場内へと走りながらザックは呟いた。
（まさかＶＴシステムか・・・？だとしたらドイツの奴等、完全にやらかしやがったな！）
この件は仲間にも通して徹底的に潰してやると誓い、ザックは右手を掲げた。
「変身！」

まず最初は戸惑った。次に感じたのは怒りだった。
「イチカ？大丈夫？」
「ああ・・・シャルは下がっててくれ。あいつ、何がどうなってるのか分からないけど・・・昔の千冬姉の姿そのままなんだ」
シャルロットも息を呑んでラウラだった何かを見つめた。
「一人で大丈夫なの？僕もまだ戦えるし・・・」
「いや、俺がやりたいんだ。邪魔しないでくれ」
梃子でも動かないと感じたのか、シャルロットは苦笑しながら頷いた。
「分かった。でも約束して？絶対に二人で帰ってくる事、そして僕に止めなかった事を後悔させないで」
「ああ。後悔なんざさせるかよ！」

サムズアップして見せ、一夏は再び白式を加速させた。

フィールドを包むバリアをゴウラムの攻勢フィールドで無理矢理突き破ってザックは場内に突入した。
「くそっ・・・もう始まってやがる！」
一夏が千冬もどきと切り結び、激しくぶつかりあっている。
（完全に昔の千冬みたいだな・・・ってエネルギーがもう１５％以下かよ！？やっぱさっき無理矢理入ったのがマズったか？）
これでは現場に行ったところでまともに戦えるか怪しい。ザックは仕方なく一夏を見守っていたシャルロットの傍らに降りた。
「先生！？」
「済まん。助けに来たはいいがここまで来るだけでガス欠だ」
ガクリとずっこけるシャルロットに苦笑しつつ、ザックは一夏が黒光する千冬もどきを斬り裂くのを見届けた。

騒動が収束し、ラウラと一夏は精密検査を受けて眠っていた。
「約束・・・守ってくれてありがとうね」
シャルロットは眠り続ける一夏にそっと語りかけた。
「本当は起きてる時がいいんだけど・・・」
そっと身を乗り出し、一夏の唇に自らのそれを重ねる。たったそれだけの事だったが、シャルロットの心は天にも昇る心地だった。

「本当はね、凄く怖かった。イチカがいなくなるんじゃないかって・・・」
立ち上がり、部屋を出る直前でシャルロットは呟いた。
「だって僕、イチカの事大好きだから」

「・・・マジか」
シャルロットが部屋を出て十秒後。一夏は赤い顔のまま寝返りを打った。
（確かヨーロッパじゃキスは挨拶の意味も・・・待て待て！いくら何でも口にキスは挨拶じゃやらねえだろ魚じゃあるまいし！）
因みにキスする魚は実在するが、実際は挨拶でなく縄張り争いが目的だったりする。
「つまりシャルは俺が好き・・・ｌｉｋｅで？」
いくら何でもアホ過ぎる考えをぶちまけつつ、一夏は頭を抱えて更にベッドの中を転がっていた。

それから数日後、ラウラによる「一夏は私の嫁」宣言でクラスが騒然となるのだが・・・それよりも更にでかい爆弾があった。
「つまりですね・・・デュノア君ではなくデュノアさんだったみたいです」
「あーやっぱりか」
真耶の紹介にザックは頷いた。
「ええやっぱりだったんです・・・ちょっと！？知ってたんですか！？」

「まあ、歩きかたの癖とかでな。因みに黙ってた理由は何かしらの事情を鑑みてだ。現に一夏は黙ってたわけだし、俺が憶測で物を言う訳にもいかんだろ」

結果一夏はクラス中からフルボッコにされる事となるのだが、それはまあ余談である。

To Be Coninued.....

第六話　煌け白刃・駆けよ疾風（後書き）

次回予告
林間学校を控え、生徒達は水着選びに奔走する。そんな中で膨らんでいくシャルロットへの想いに戸惑う一夏。テンパるシャルロット。そんな二人が出かける傍ら、ザックも真耶との約束を果たすべく出かける事になる。
次回、「デートと水着と初恋と」これで決まりだ！

あとがき
まずファース党の皆様ごめんなさい。箒はすっごい書き難い＋あの性格なのでかなり扱いが悪く感じてしまうかもしれません。
自分で書いていて不安になるのは、オリジナル主人公であるザックのレベルです。
極力最強にはならないよう、一夏達に勝つのはあくまでも経験があるからというくらいにしているつもりなのです。
このザック・ブルードというキャラクターがちゃんと受け入れて貰えるのかどうか。いかがでしょうか？

ＰＳ，現在の投票結果は千冬に一票増えた状況ですね。このまま独走するのもいいですが、できればもうちょっと接戦が見たかったり（無茶言うな）。ではでは。

第七話　デートと水着と初恋と

ザック・ブルードの日曜日は何時も朝七時から始まる。まず起床後自分のパソコンに届いたメールをチェックし、ＯＳのアップデートを行う。ついでにウィルススキャンとデフラグをセットしてからテレビを付けるのだ。

「さて、今週のスーパーヒーロータイムはと・・・」

丁度戦隊シリーズのＯＰ曲でアポロ達も目を覚ます。内容を理解しているのかは不明だが、ザックの膝に飛び乗って三人で鑑賞するのが常だった。

「・・・ふう。フォーゼも観たし、今日はキバ辺りをマラソンするか」

まだフォーゼの評価は正式には下していない（クウガ信者はアギトを三話で切り捨てたというが、そこはザックが彼らを嫌う理由の一つであった）。剣の例もあるし、まだ評価を決めるには早すぎるのだから。

「っておいルナ。そこに陣取られたらＤＶＤ出せないだろうが」

ライダーシリーズのＤＶＤを詰め込んだ段ボールの上に座ってじっとザックを見上げるルナは梃子でも動きそうにない。

「・・・俺が何か忘れてると？」

ルナがこういう態度を取る時。それはザックが何某かの予定を忘れている時だった。

「・・・・・・・・・・・・・・」

部屋を見回す。カレンダーには『買い物　真耶　０９００』と書かれていた。

「忘れてたあああああ！ルナすまん、恩に着る！」
因みにこの時点で愛猫達の朝食は頭から吹き飛んでいる。慌てて壁にかけておいた私服（紺のジーンズとTシャツ。その上に薄手の上着を羽織るタイプ）を着込み、外へと飛び出した時だった。
「きゃあっ！」
「うわっと鈴か。おはようさん」
危うく部屋のドアをノックしようとしてた鈴を蹴り飛ばしそうになり、ザックはブレーキをかけた。
「おはようございます。えっと・・・」
「丁度よかった！俺今から出かけるんだが、もし暇ならアポロ達の相手してて貰えるか？休日使わせるんだし、バイト料くらいは払えるが」
「やります！てーかやらせて下さい！」
言葉尻を食う勢いで鈴が食いついた。ザックは頷いて手短に食事と場所と猫用玩具の場所を教えてから改めて駆け出した。

鈴は部屋に入り、早速駆け寄ってきた二匹の皿に教わった通りに固形キャットフードを入れた。
「アポロ達は一夏が何処にいるか・・・知らないわよねえ・・・」
「ミャウ、ミャウ、ミャウ」
食事に夢中になっているアポロを眺め、鈴は思わず苦笑した。
「あんたね、食べるか喋るかどっちかにしなさいよ」
ルナはもう食べ終わったのか、玩具箱に首を突っ込んで猫じゃらしを銜えて持ってきた。
「うん、遊ぼっか！」
鈴は笑ってそれを受け取った。

「悪い真耶！遅くなった！」
時刻はこの時点で８時５７分。予定の上ではギリギリセーフだが、相手を待たせた時点でザックの基準では遅刻であった。
「大丈夫ですよ。私も今来たところですから」
「そうなら助かる」
軽く呼吸を整え（この辺り、伊達に軍人はやっていない）、ザックは手に持っていたヘルメットを一つ真耶に渡した。
「バイクですか？」
「ああ・・・ってスカートか。ちょっと待っててくれ、サイドカー引っ張り出すから」
自分の愛用しているバイクを取りに戻るザックの背中を眺め、真耶は楽しげに微笑んだ。

同じ頃、ラウラの攻撃（という名のアプローチ）を何とか振り切った一夏はシャルロットと共に町へ向かうモノレールに乗っていた。
（き、気まずい・・・・！）
どうにも二人の間にはぎこちない空気が漂っていた。原因は間違いなく前回のキスである。
（どうすりゃいいんだおい・・・）
普通にシャルロットに「こないだキスしただろ？」と訊くのは簡単だ。しかしそれは彼女の心を暴き出す事にも繋がる。ひいては一夏

自身の感情にも関わってくるのだ。
（もしもシャルが俺を好きだと仮定する。そしたら俺も答えなくちゃいけない。でも肝心の俺自身がよく分からない・・・）
こんな状態でシャルロットの想いをきちんと受け止められる自信は全く無い。
（もう少し考えよう。俺の気持ちを）
そう考え、一夏はこの問題を先送りする事に決めた。

一方のシャルロットも相当にテンパっていた。
（どうしようどうしようどうしよう！イチカの顔全然見れないよー！）
それでも勇気を振り絞って目線を向けると、なにやら真剣に考え込んでいる。何を考えているのかは分からないが、その表情は彼女を惚れ直させるに十分な魅力を持っていた。
「シャル？」
「ひゃ、ひゃいっ！」
唐突に声をかけられ、シャルロットは思わず裏返った声をあげた。
「大丈夫か？そろそろ降りるぞ」
「う、うん。だいじょぶだいじょぶ」
全然大丈夫じゃないのは分かっていたが、一夏を心配させる訳にもいかずに頷いた。

ザックの運転するバイク（サイドバッシャーの黄色い部分を青く、

黒い部分を白に塗装してあると想像を）に乗り、二人は奇しくも一夏達が訪れているブティックに来ていた。
「この気温だし、食べ物先に買ったら確実に傷むなこりゃ」
「ええ。ですから水着とかから先に買っておきましょう」
そう決め、ザックは真耶と一旦別れて水着を選び始めた。
（ってよく考えたら俺金槌じゃねえか！・・・後で釣具屋にも寄ろう）
とりあえず釣り師御用達のジャケットを見繕い、篭に放り込んでから真耶を探してぶらついていた時だった。
「そこの貴方。水着を片付けといて」
「てめえでやれタコ」
聞き覚えのない声に間髪入れずに返す。女尊男卑の弊害はこんなところまで来ていると思うと情けなくなってくる。
「ふうん、自分の立場が分かってッ！？」
警備員を呼ぼうとでもしたらしい女の口に部分展開したスカイファングのアサルトライフルを捻じ込む。男である筈のザックがＩＳを使っているという事実と、銃器を口に突っ込まれるという事態に女は目を白黒させている。
「よく聞けカナリア」
カナリアは、実力もなくただ囀るだけの女を侮蔑する時にザックが好んで使う単語だった。
「ＩＳが使える事が女の特権だと思っているならこの現実は何なのか考える事だ。次に俺を少しでもイラつかせてみろ？今すぐこの引き金を引いて汚ねえケツから鉛の糞をさせてやる。血便ぶちまけてくたばるのがお好みの死に様ならもう一度囀ってみせな」
アメリカ海軍の男達とも親交のあるザックはこの手の語彙も結構豊富だったりする。
「ひ・・・あ・・・」
完全に怯えた女に、ザックはつまらなさげに鼻を鳴らして手を引いた。

「せめてブリュンヒルデくらいの貫禄と実力つけてから出直せ。さもなきゃ不味い挽肉にしてやる」
腰を抜かした女を放置し、再びザックは真耶を探して歩き始めた。

「さすがはブルード教官。相手の隙を突いて主導権を奪い、迅速に対象を無力化。これは私も学ぶべきだな」
「い、いえボーデヴィッヒさん？さすがにあのスラングの雨は見習わなくてよいのでは？」
ほんの数秒の間にザックの口から飛び出した機関銃の如き、年頃の少女が耳に入れるには余りにもドギツい単語にセシリアの顔色は若干悪い。
「何を言っている。言葉による精神攻撃も立派な戦術だぞ？それに海軍ではあの程度の台詞などまだ大人しいほうだ」
「あれで大人しいほうなんですの！？」
うむ。と頷き、ラウラは何故か黒のビキニと可愛らしいキャラクターのアップリケが入ったワンピース水着を見比べている。
「私も全部言える訳ではないが、たしかファッ・・・」
「それ以上は駄目ですわあああああ！」
慌ててラウラの口を塞ぎ、セシリアは何時の間にか苦労人のポジションを獲得している自分に心の中で涙した。

（神様、俺なんかしましたか？）

寧ろ何もしないのが問題だと人によっては言いそうであるが、ここで一夏を責めるのは酷だろう。
そう、ここは更衣室である。かといって、一夏がろくでもない水着を無理矢理刷かされるとかいうのではない。ていうかそんなの書いても楽しくない。
問題はここに無防備な姿を晒すシャルロットがいるという点だった。
（本当なんでこうなった？）
衣擦れの音や、時折触れる彼女の体温が一夏の平常心をガリガリと削っていく。恐らく白式ならとっくにエネルギー切れを起こすダメージと言ってもいい。
「い、イチカ・・・」
「なんだ・・・ってえ！」
思わず振り返ろうとする反射と、シャルロットを見てはいけないという理性の鬩ぎ合いで一夏の首がグキリと変な音を立てた。
「もう、大丈夫だよ・・・？見ても」
首を擦りながら振り返ると、ワンピースとセパレートの中間のような黄色い水着を着たシャルロットが所在無さげに立っていた。
「に、似合うぞ・・・その、綺麗だ」
その一言でシャルロットが気を失いかけ、慌てた一夏が抱きとめたのはある意味当然の帰結だった。

「「「「あ」」」」
レジに並んでいた一夏と、何とか平静を取り戻したシャルロットは思わぬ二人と出会っていた。
「何だ、お前等も来てたのか」
「先生達もデート？」

何気ない一夏の台詞に、真耶が真っ赤になる。しかしザックは逆に口元を歪めた。
「へえ、『も』か。という事は一夏とシャルロットは確実にデート中って訳だな」
「「んなっ！」」
思わず真っ赤になって硬直する二人に、ザックは軽く笑って手を振った。
「別に咎める気は無いさ。校則にも恋愛するなとは書いてないしな」
冗談交じりに笑いあいながら、ザックは心の中に過る不安をかき消した。

しかし彼はまだ知らない。その不安は紛れもなく、ゆっくりと確実に近づいてきていた死神の足音にも等しいという事に。

To Be Continued.....

第七話　デートと水着と初恋と（後書き）

次回予告

遂に始まる臨海学校。一夏を巡って火花を散らす乙女の聖戦と風雲の天才が巻き起こす嵐が同時にやってくる。

次回、「紅椿、舞う」時空を超えて・・・俺、参上！

あとがき

なんとなくヒロイン達は猫が似合う気がします。シャルロットやセシリアが膝に乗せた猫を優しく撫でるのに対し、鈴とかは抱きしめるわ頬擦りするわと凄い猫可愛がりしそうなイメージ。勿論異論は認めますが。

アンケートですが、次回でいよいよ紅椿が登場するので予告通り次回で締め切ります。このまま行けば千冬ルートが確定するので、まだ投票してない方はお早めに。

第八話　紅椿、舞う（前書き）

？？？「平成ライダーシリーズとは、仮面ライダークウガに始まるタイトルに仮面ライダーを関する特撮番組の総称だ。どれも基本ラインは変わらず主人公は男、ベルトを使って『変身！』という掛け声と共に悪と戦うヒーローへと変身する・・・というのがテンプレと言える。しかしその常識をぶち壊したある意味問題作が響鬼だ。何しろベルトを使わない・無言で変身するという仮面ライダーにあるまじき設定は懐古主義の信者を激怒させ、かなりの物議を醸した作品といえる。

しかぁし！これはつまり、ガンダムシリーズでいうGガンダムのような立場にある仮面ライダーだと考えれば十分楽しめる作品だという事は間違いない。む？そろそろ時間だな。それでは・・・」

ザック「ちょっと待てキバット！何でお前が響鬼の解説してるんだよ！」

キバット「細かい事は気にするな！それでは、ウェイク・アァァァァァップ！」

第八話　紅椿、舞う

「おいザック。まだ用意出来ないのか？」
「出発は明日だろうが！あーもう着替えは入ったスカイファングも準備万端・・・だああ！ルアーのチェックしてなかったあ！」
臨海学校前日。自室で大騒ぎしているのは言わずと知れたザック・ブルードであった。
「お前は泳がず釣りに行くつもりか？」
「千冬お前、俺が金槌だって知ってて言ってるだろ・・・！」
壁にもたれて含み笑いをする千冬にザックは唸った。
「はあ・・・で？お前がわざわざここに来るって事は、何か聞きたい事があるんだろ？」
「ああ。デュノアの事で少しな」
ザックは表情を改め、手を止めて目を合わせた。
「本人からも聞いたが、スパイの役目があったのだろう？それを自ら放棄したと宣言するような真似をしたのだ。当然実家のほうから何かしらの干渉があると踏んでいたのだがそれもない。何をやった？」
「大した事はしてないさ。イギリス政府の知り合いを通じてフランス政府とマスコミにデュノア社社長のスキャンダルを幾つかリークしただけだ」
因みにリークした相手がクリーンな態度と性格・思考の持ち主であり、それを実現するだけの権力も持った人間である事は既に確認してある。
「結果シャルロット・デュノアの親権はフランス政府に移譲され、彼女は晴れて自由の身って訳。まあ、政府もラファール・リヴァイヴに賭けるしかないからな。対外的には今まで通りあいつのＩＳはデュノア社がバックアップする形にはなる。けど実際にはもうデュノア社にシャルロットを縛る権限はない。寧ろあっちがお願いして

協力して貰ってる立場だからな。ああ、勿論フランス政府にも釘は刺してあるぞ。シャルロット・デュノアの意向を極力尊重するようにってな」
パワーバランスで言えばシャルロットが上だと付け加え、ザックは荷物チェックを再開した。
「相変わらずお前は・・・やると決めたら徹底的だな」
「当たり前だろ？まあこれだけやるのに、溜め込んでたカードを十枚近く捨てる事にはなったが」
「そこは私のほうで埋め合わせておこう。一夏も喜ぶだろうしな」
思わず言ってしまい、千冬は楽しげな目をするザックに気づいて口を押さえた。
「実際喜ぶと思うぜ？多分あのメンツの中で一夏が一番気を許してるのはシャルロットだろうしな」
「よ、余計な事まで聞き取るな！・・・って今の話は本当なのか！？」
「どわ！」
どうも千冬は一夏が絡むと冷静さを欠くらしく、一言たりとも聞き逃すまいとザックに掴みかかった。

さて、ここで二人の体制を思い出してもらいたい。ザックは旅行鞄に荷物を詰め込むためにしゃがんでいる最中で、千冬と話をするために顔を上げていた。かたや千冬は壁にもたれて立っていた。それがいきなり掴みかかればどうなるか。まあご想像の通り、千冬が押し倒した形になってしまった。
「お、おい千冬・・・流石にこの状況は俺も困るんだが？」
「う、あ・・・すまん、すぐに退く・・・」
珍しく歯切れの悪い口調で千冬はザックの上から退こうとした。が、

悪い事というのは重なる時にはとことん重なるらしい。
「ザックさん、明日の予定表なんですが・・・」
よりにもよって入ってきたのは真耶だった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「あーっと・・・これは事故なんですって・・・言っても信じちゃくれないよなぁ」
半ば諦めの境地でザックが呟くのと涙目の真耶が「不潔です！」と叫んで部屋を飛び出す（それでも渡す予定だった書類はちゃんと手近な棚に置いて）のは殆ど同時だった。
「・・・山田先生のフォローは私がしておく。それと・・・本当に済まん」
「まあ、珍しくもないだろ。こんなトラブル・・・はぁ」
ここまで憔悴した千冬を見るのは初めてかもしれない。そう思いつつ、ザックは声をかけた。
「ああそうだ」
「うん？」
「一夏の好感度が一番高いのがシャルロットてのは本当だ。けど本人が自覚してる可能性がかなり低いから今時点では余計な手出しは無用だぞ」
「・・・ああ。ありがとう」
千冬が部屋を出た後、ザックは頭をかきながら荷物にとりかかった。

翌日。旅館に荷物を置き、生徒達は水着に着替えて海へと繰り出していた。
「ザック先生泳がないんですか？」

水着どころか釣り師そのものの格好をしているザックに、生徒の一人が声をかけた。
「ああまあな。海は苦手でよ」
本当は海どころかプールも駄目なのだが、そこはザックにもプライドがあった。

一方の一夏は実に多忙であった。まずは不特定多数の女生徒から水着の評価を求められ、鈴を肩車して歩く羽目になり、セシリアの背中にサンオイルを塗り、ラウラの水着を褒めたら気絶した為旅館まで運ぶという有様だった。
（あれ？そういや箒は何処行った？）
なおシャルロットが除外されているのは、今自分が探しているからである。
（・・・まあ大丈夫だろ。あいつ強いし、その辺の男に引っ掛けられるようなタマでもないしな）
とりあえず箒本人が聞いたら殴られそうな事を考えつつ、一夏は改めてシャルロットを探しに行った。

同じ頃。ザックは生徒達が遊んでいる場所から少し離れた崖に座り、のんびりと釣り糸を垂らしていた。
「ヒット・・・またサバかよ」
一体この海の生態系はどうなっているのだろうか。さっきから入れ食いではあるのだが、その内訳がまたとんでもない。
実にカワハギ４匹。クロダイ２匹。シャコが５匹。挙句にサバが７

匹目である。
「そのうちカジキとか釣れたりしてな」
「あ～それいいね。釣れたらご馳走して欲しいかな？」
「・・・・・・・誰だおい」
不機嫌そうに振り返りつつ、ザックは目の前の女性の気配を今まで感じ取れなかったことに内心戦慄していた。見た目はロングヘアで垂れ目の美人。不思議の国のアリスを意識しているらしく、一風変わったエプロンドレスに身を包んでいる。少し発育が良過ぎるのか、ブラウスに包まれた胸が窮屈そうであった。一番目を引くのは頭に乗った機械感たっぷりの兎耳なのだが。
「えー？天下無敵の天才、篠ノ乃束を知らないの？」
「・・・へえ、お前がね」
その名前を聞いた途端、ザックの眉が片方ピクリと動いた。
「束さん、何か地雷踏んじゃった？」
「地雷も機雷もあるか・・・俺の留守電に延々お経吹き込んでくれやがったのはおのれかこらあああああ！」
そう怒鳴って襟を掴もうとし、何時も掴む場所に襟がなく素肌が見えている事に気づいて断念。胸倉を掴むのは流石に女性相手だとマナー違反（それ以前にザックも訴えられたくない）なので却下。結局顔面にアイアンクローをかます事で我慢する事にした。
「あたたたた！ちーちゃんに勝るとも劣らないこの握力！いいねえ束さん惚れちゃいそう！」
「いいからお前はこっち来い！・・・とりあえず箒か千冬に引き渡しとくか」
そんな事を考えていると、唐突に掴んでいる感触が消えた。
「なっ！？」
何時の間にか束はザックのアイアンクローからするりと抜け出していた。
「ま、とりあえず今日のところはざっくんに会えたからよし。また明日ね♪」

ゆったりした雰囲気からは想像出来ない身のこなしで姿を消す束を見送り、ザックは小さく嘆息した。
「つか誰だよざっくんって・・・」

そんなゴタゴタがあった一日目の夜。ザックは釣り上げた成果を厨房に引き渡し（結局サバもカワハギも全員分釣れた。カジキは流石に釣れなかった）、隣で味噌汁を啜る千冬に何時束の事を切り出すかタイミングを計っていた。
（まあ・・・どうせ就寝時間まで一夏を部屋に入れるだろうし、酒盛りもやるだろうからその時だな）
引き渡したサバが味噌煮になって出てきた事に気を良くしつつ、ザックは刺身に山葵を乗せて口に入れた。
因みに生徒組は一夏に「あーん」をねだる女子生徒で騒ぎになっていた。

それからしばらく経って。ザックはベッドにうつぶせになったまま固まっていた。
（どうしてこうなった）
とりあえず数十分前までの状況を思い出してみる。まず予定通り、一夏を千冬の部屋に入れて就寝時間まで時間稼ぎを行う事になった。次に一夏が得意のマッサージを披露する事になりザックも相伴に預

かる事になった。そしてそれが思いのほか気持ちよく、気づけば熟睡していた。で、今である。
「やらんぞあいつは」
どうも箒達が一夏の何処に惚れたのかを聞いていたらしいのだが、気づけば千冬が盛大に牽制を入れていた。
（余計な事するなって言っただろうがぁぁぁーっ！）
微妙にラウラがこちらを気にしているふうなので、思わず寝たふりをする。素人はここで寝息を規則的にしてしまうためバレやすいが、ザックはその辺りも慣れている。自分が普段行うであろう寝息を真似てみせる事など容易かった。
箒達が少ししょんぼりと部屋を出て行った時。最後に部屋を出ようとしたラウラが唐突に振り返った。
「教官、ブルード教官も眠っておられるようですので今のうちに聞いておきたいのですが」
（ちょっと待てラウラ。何を言う気だお前！？）
ラウラは軽く息を吸ってから言った。
「教官は、ブルード教官に・・・私が織斑一夏に抱くものと同じ感情を持っておられるのではないかと」
「なっ！」
（何馬鹿言ってるんだお前は）
恐らく千冬もそう返すはず。そう思っていたザックは次の瞬間組んだ腕で隠していた目を最大限見開くことになる。
「正直な・・・分からんのだ」
（は？）
普段とは違う、何処か自信のなさげな声で千冬は言った。
「こいつは一夏以外では、唯一私が飾らないで済む相手と言っていい。しかしこれがお前が一夏に抱く物と同じかどうかについては分からん」
ただな。と千冬は続けた。
「こいつは眠ると必ず眉間に皺が寄る。・・・あの日からずっとだ」

それはザックの心をずっと責め続ける楔であった。別段話されてどうという訳ではないので、止めるつもりは起きなかった。
「それを消してやりたいと思う事がそうなら、そうなんだろう」
誰もが肯定も否定も出来ないまま、夜は更けていった。

翌朝。ザックは結局あの後千冬に叩き起こされた事にして部屋へ戻った。
「よし、専用機持ち前へ。今回はまず・・・」
「ちーちゃああああああああああああああああん！」
自分の声を遮るように割り込んだ声に、ザックは思わず頭を抱えた。
昨日束が近辺に潜伏している事を話すのをすっかり忘れていたのだ。
「やあやあちーちゃん！会いたかったよさあハグしよう愛を確かめよふべらっ！」
ハイテンションに迫る束に、千冬は容赦ないアイアンクローを極めつつ溜息をついた。
「そういえば何しに来たんだお前」
昨日も彼女の真意が読めなかったザックは疑問を解消したくて尋ねた。
「昨日はざっくんに会いに来たんだよ～。言い忘れてたんだけど、私を一晩好きにしていいから解剖させて・・・」
「千冬！」
「うむ！」
ザックと千冬は同時に跳んだ。
「クロスボンバー！？」
二人の息のあった攻撃を喰らい、束は一瞬宙を舞って墜落した。
「で、今・日・の！本題は何だ？」

「今日の」を強調しつつザックは言った。またここで自分を好きになど言い出されてはたまらない。
「あ、そうだったそうだった。では大空をごらんあれー！」
つられて空を見上げると、ザックの身長を遥かに超える正八面体の物体が降ってきた。それが展開し、中から深紅と白のＩＳが現れた。
「これが箒ちゃん専用第四世代ＩＳ、その名も紅椿！いやあ束さんの天才ぶりが怖いよね～」
「待て待て待て！今うっかり流しそうになったが、第四世代だと！？」
チートどころの騒ぎではない。例えるなら、まだストライクやイージスが完成するかしないかの段階でフリーダムが暴れまわるような状況なのだ。
（マジで何者なんだこの女・・・）
嬉々として箒に紅椿をフィッティングしている束を眺め、ザックは左耳の後ろを？いた。

飛翔する紅椿を見送り、ザックはスペックに目を通す。
「カラーリングはともかく、中々スペックは楽しそうな機体だな」
「でしょでしょでしょ？あ、ざっくんも第四世代が欲しいなら作るよー？」
端末を返しながらザックは首を振った。
「生憎と俺はスカイファングが気に入ってる。それに新型はもうこりごりだ」
「そっかー。ところでさ・・・」
束の口が三日月型につりあがった。

「ドウシテソンナニコワレテルノニイキテイラレルノ？」

ザックの周囲から音が消えた。

To Be Continued.....

第八話　紅椿、舞う（後書き）

次回予告

暴走する福音の阻止。その為に不可欠な白式。それを運ぶ役割に束は紅椿を推す。しかしザックは容赦なくその案を却下した。新型機の即時実戦投入、それは彼にとって己に罪を突きつける刻印でもある。

次回、「翼をもがれた隼、受け継がれるファルコン０（ゼロ）」Ｏｐｅｎ ｙｏｕｒ ｅｙｅｓ，ｆｏｒ ｔｈｅ ｎｅｘｔ φ，ｓ！

あとがき

発表します！織斑千冬さん、見事全六票中五票を獲得してヒロインに決定しました！（ドンドンパフー♪）

何しろ原作が未完なので、この鏡伝は原作四巻辺りで終わりにする予定です。

なので最後までお付き合い下さい。

最後になりましたが、投票を下さった方々に心より感謝致します。

お気に入り登録して下さってる皆様も本当にありがとうございます。

とても励みになっておりますので。

第九話　翼をもがれた隼・受け継がれるファルコン０（前書き）

キバット「仮面ライダーシリーズの問題作といえば、響鬼以外にもう一つ電王が挙げられる。電車に乗って移動するという、従来の仮面ライダーからすると有り得ない形はある意味斬新ではあった。しかし、巨大化した怪人と変形した列車が戦うという戦隊モノに通じる要素や、異様に少ない死者といった形はやはり懐古主義者の怒りを買った。まあそもそも懐古の連中は新しければ何でも叩く悪癖があるため、余り参考にはならんがな」

一夏「結局のところ、この仮面ライダーは成功しなかったのか？」

キバット「いや、数字で見れば十分成功の領域だ。ただ、主役を演じた佐藤健君が余りにも演技力が高すぎたために、特撮俳優のイメージが定着する事を嫌った事務所の方針でもう彼が野上良太郎を演じる事はない。それでもまだ脂がのっている時期だから映画なり特番なりは作りたい、そんなスタッフの悪あがきがディケイドとのクロスだったりする訳だがな」

シャル「何だか大変だね」

キバット「全くだな。因みに電王が叩かれる要因としては、他にも余りに軽すぎるノリなどが挙げられる。歴代のライダーを観れば分かるが、基本的にダークな設定や主人公の苦悩、他にも日曜の朝からえげつない死亡描写を平然とやるといったお子様断りの演出が多々あった訳だ。頭から蟹型モンスターに丸かじりされたライダーとかもいたしな。

その点電王は戦闘シーンやストーリーの根幹に関わる部分以外はほぼ全てイマジン達のどつき漫才に終始している。この点も懐古主義者を怒らせる要因である事は想像に難くない。ではそろそろ、ウェイク・アァァァァップ！」

第九話　翼をもがれた隼・受け継がれるファルコン０

束の言葉が何を意味するのか、それを理解した途端に今度は真耶とセシリアの悲鳴があがった。
「！？」
「流石に今のを止めるのはキツかったぞ・・・！」
我に還ったザックの目に入ったのは束の首を掴んだ自分の左手、そして今にもその頬を殴らんとしていた右手を押さえつけている千冬の姿だった。
「・・・悪い」
それだけ呟くように言い、首から手を離す。かすかに震えるその腕を押さえ、ザックは踵を返して宿へと戻った。

「あやや～束さんまた地雷踏んじゃったかな？」
今にもぶん殴られそうだったにも関わらず、束は気にしていないふうに言う。そんな彼女を横目に見つつ千冬は溜息をついた。
（ザック・・・まさか物も言わずに殴ろうとするとはな）
千冬が知っているザックは、短気ではあったが問答無用で暴力を振りかざすような真似は決してしなかった（以前ブディックでやったのは威嚇の領域なのでノーカン）。
それ以上に気がかりだったのは、束を殴ろうとした瞬間の彼の表情だった。普段の飄々とした態度とも違い、時折見せる刃物のような態度とも違う。
（あれは、怯えていた・・・？）

それから数分後。彼らの元にとんでもない情報が持ち込まれた。

「銀色の福音（シルバリオ・ゴスペル）？」

落ち着いたらしいザックが眉を顰めながらスペックに目を通していく。

「なかなか楽しそうな機体じゃないの。そいつが盛大に暴走かまして日本目掛けてまっしぐら。で、専用機持ちがゴロゴロいるこのＩＳ学園に何とかしろと。いいよな～、高見の見物決め込んでりゃいい御偉方はさ」

「そう言うな。お前ならどう作戦を立てる？」

ザックは手元の端末に一夏達のデータを呼び出した。

「少なくとも一夏と白式は外せない。福音の機動を制限するために最低でもセシリアとシャルロット、ラウラもいるな。ＡＩＣが何処まで通用するか分からんが・・・後は接近して動きを止める役か」

「ねえねえ！だったら断然紅椿の出番なんだよ！」

何故か作戦会議に普通に参加している束が割って入った。

「却下だ。動きを止める役は鈴と甲龍にやって貰う」

「そんなのよりも紅椿だよお？断然速いし、それに強い！福音よりもスペックは上だし」

ザックはじろりと束を睨んだ。

「あのな。出力を巡航（クルーズ）しか出してないだろうが。戦闘機動（ミリタリー）も最大出力（マック）も限界突破（フルドライブ）もやってない状態でいきなり実戦投入だ？お前は妹を殺す気か！」

「えー？でもそれだけじゃないよね？」

どこまでも見透かすような束の目を真っ向から睨み返し、ザックははっきりと言い放った。
「そうだ。ろくな試験評価もやっていない機体を実戦には出せない。それをやって調子こいた挙句味方を壊滅させて死人も出した馬鹿を一人知っているからな」
苛立ったように頭をかき、ザックは千冬に「後を頼む」とだけ告げて部屋を出た。

「ちふ・・・織斑先生。ザック先生どうしたんですか？」
「お前達は気にする必要はない。出撃の必要があるなら伝える。解散しろ」
不満げな一夏達を下がらせ、千冬は足早にザックを追った。
「ザック！」
「どうした？」
旅館の外に立つザックは既にＩＳを装着し、今にも飛び立とうとしていた。
「何故だ？何故お前が行こうとする！？」
「生徒を危険には晒せない。それに・・・これが俺に出来る唯一の贖罪だ」
背中を向けたまま放たれる言葉に、千冬の苛立ちは徐々に募っていく。
「ふざけるな！そうやって自己満足に浸って逝けばお前は満足かもしれない・・・だが残された者はどう思うか考えたのか？お前は何時もそうだ、何処にでもいるくせに何処にもいない。お前の心の居場所は何処にあるんだ！」
「さて・・・一つだけ言える事は、俺が焦がれたのはあいつが飛ん

でいた空だって事だけだな」
聞き慣れない単語に、千冬の表情が怪訝なものに変わった。
「あいつ？」
「ああ。十年前、俺が戦ったあの白騎士だ」

白騎士事件。それが十年前に起こった、ＩＳのデビュー戦でもあった。
《ファルコン・リーダーよりファルコン０へ！パーティの主賓は日本海上空でお待ちかねだ！》
「ファルコン０了解！主賓を退屈させないようダンスに誘う！」
世界中から一斉発射されたミサイルを一瞬で切り裂き、撃ち落としたコードネーム・機械天使は何かを待つように空に浮かんでいた。
《ファルコン・リーダー了解。一度フラれたからってめげるなよ？女ってのは多少強引に誘われたほうが心も動きやすいってもんだ》
ザックが当時乗っていたのはイギリス空軍が開発していた単独星間飛行を目的とした多目的戦闘機・ファルコンであった。単独での大気圏離脱と突入、空中宇宙問わずに戦えるスペックと常識はずれの加速力と機動性を両立したまさに夢の戦闘機だ。
「こちらファルコン０！機械天使を肉眼にて確認、これよりアプローチをかける！」
神々しく、それでいて何処かあどけなさと無機質な恐ろしさを兼ね備えたそれはザックの駆る機体にゆっくりと向き直った。
「・・・Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ　？　Ｍｙ　ａｎｇｅｌ．」
通信機を介さずに呟き、ザックはフットペダルとスロットルを限界まで叩き込んだ。

「・・・その後、合流したファルコン小隊のメンバーと一緒に戦ったが結果は俺以外は燃料切れや撃墜。更に束がＩＳを世界中に発表した事でファルコンはプロジェクトごと凍結、チームは解散って訳だ」
ザックは泣いているような、憤っているような不思議な表情で海に向き直った。
「あの時俺が白騎士に心を奪われなかったら、もしかしたらファルコンは完成して制式採用されていたかもしれない。過去にＩＦが有り得ないのは知っているがな」
ザックは懐に入れていたバッジを取り出して千冬に投げ渡した。
「一夏達に渡してやってくれ。例のプロジェクトはやはりあいつらしかいない」
それだけ言い残し、ザックはスカイファングを飛び立たせた。

「それは・・・私だ・・・！」
小さく搾り出すような声で千冬は呻いた。
「形見にはさせんぞ、ザック！」

再び呼び集められた一夏達は、ザックが先んじて出撃した事に目を丸くした。

「お前達に与える任務は二つ、福音の暴走阻止とスカイファング及び操縦者の救出だ」
そう言って千冬は一夏にバッジを渡した。
「先生、これは？」
「本来なら二学期から正式稼動する予定だったが、この際仕方ない。お前達専用機持ちを集めた独立部隊のバッジだ」
一夏達は唖然となった。
「まだ織斑の分しか用意出来ていないが、いずれはお前達全員の分も渡される。今は任務に集中しろ」
千冬の言葉に頷き、一夏はバッジを見つめる。それは翼を拡げた黒い隼を模り、数字のゼロが刻まれていた。

・・・

To Be Continued・・

第九話　翼をもがれた隼・受け継がれるファルコン０（後書き）

次回予告

激突する福音とスカイファング。しかし仮面の外れかけたザックにとっては余りにも勝機の薄い相手。絶体絶命の危機に駆けつけた一夏達の願いとは？

そしてザックの心に誰かの影が過る時、スカイファングは新たなる高みへと翼を拡げる。次回、「Ｂｅｌｉｅｖｅ　ｙｏｕｒｓｅｌｆ」運命の切り札を掴み取れ！

あとがき

今回少しだけ明らかになったザックと千冬の因縁。因みにザックが十五歳の頃に乗っていた戦闘機のモデルはマクロスＦのルシファー（ブレラ・スターンの愛機）を黒く塗装した感じです。

ザックは千冬が白騎士だとは気づいていません。一応肉薄した時にバイザーに隠されていない顔の下半分は見たのですが、結構なスタイルだった事もあって無意識に年上だと思ってるんですね。なので一つ年下の千冬の事は白騎士候補から除外している状態です。では。

では。

第十話　Believe yourself（前書き）

キバット「仮面ライダーWは、平成ライダーシリーズ十一作目に当たる作品で史上初の二人で変身する仮面ライダーだ。今までで最もストーリーに着目した作品でもあるな」

セシリア「ストーリーですの？」

キバット「うむ。所謂推理ドラマなどで使われる事件編・解決編といった具合で話を構成し、解決編で派手なバトルを入れるといった手法だな。また、ハードボイルドをテーマにした作風と初代仮面ライダーを彷彿とさせるシンプルなデザインは懐古主義者にも概ね受け入れられた。二人で変身するという設定上、主人公の左翔太郎とフィリップの凸凹コンビぶりも見所の一つとなっている」

箒「そういえば、フォームのバリエーションもかなりシンプルになっているな」

キバット「そうだな。それぞれ翔太郎が使うジョーカー・メタル・トリガーと、フィリップの使うサイクロン・ヒート・ルナの組み合わせのみだから全部で九通りの組み合わせがある。デモンストレーションの扱いもあった事を加味しても、劇場版ディケイド・オールライダー対大ショッカーでライジング・アルティメットフォームのクウガを一蹴したシャドームーンを終始翻弄、圧倒した事からもそのスペックの高さは計り知れない。おっと、そろそろ時間だな。それでは・・・」

箒「（何故かノリノリ）さあ、お前の罪を数えろ！」

キバット「何でじゃあああああ！」

第十話　Believe yourself

福音の放つ光弾がギリギリでザックの頬を掠めていく。だが彼は構わずにきりもみ飛行に持ち込んで一気に距離を詰めた。
「いい加減落ちろ！」
至近距離になるとスカイファング最大の火力であるガドリング砲は逆に取り回しの点から邪魔になる。かといって敵機の長所を殺すには接近戦を挑むしかなく、その場合はスカイファングの長所も殺されているのが難点だった。
（タイタンは使いたくないんだが、四の五の言っていられんか・・・！）
ＩＳの装甲を断ち切る事を主眼に置いて開発された超高周波ブレード・タイタン。『絶対防御を突き破る事』を完成の域とした、戦争を前提にした負の武装といえる代物だ。
過去にザックがこれを使用したのは初めて持った時と千冬との模擬戦で一度、シャルロットと戦った時に彼女の銃を切り落とす事を目的に使った一度の計三度のみであった。

「Ｌａ・・・・・・・」

再びエネルギーの雨が襲い掛かる。それをかわすと同時に、ザックの右手には刃渡り２ｍ弱の大剣が握られていた。
《タイタン起動完了。ＯＯＡ発動準備完了》
「空気読めてるぜ相棒！それじゃいっちょやりますかね！」

単一仕様能力（ワンオフ・アビリティ）・音速の荒鷲（ソニック・イーグル）

《ＳＴＡＲＴ　ＵＰ！》
電子音声が告げると同時に左腕に装着されたカウンタが１０からカウントダウンを始める。それと同時にザックはモノクロの世界へと足を踏み入れた。

同時刻。一夏達は最高速度で戦闘が行われている空域を目指していた。
「イチカ、ラウラが遅れてる！」
「へ？大丈夫かおい！」
「問題ない。出撃前に換装したレールガンの分機体重量が増しただけだ」
なら無理にスピードを上げるのは継戦時間を縮める事にもなるため推奨は出来ないだろう。一夏は納得して少しスピードを緩めた。
「とはいえ、多少の無理はしなくてはならないかもな。もし教官がタイタンを振るったのであれば・・・」
「ボーデヴィッヒさん？そのタイタンというのは、ザック先生がデュノアさんと戦った時に使われたあの剣でしょうか？」
ラウラをフォローする形で飛んでいたセシリアが尋ねた。
「ああ。あれは世界で唯一、ＩＳの絶対防御を破る事が可能な兵器

なんだ」
ラウラはそれだけ言い、きっと前を睨んだ。
「つまり、それをガチに振り回したが最後操縦者はお陀仏？」
「うむ」
微妙に震えた鈴の台詞にも、ラウラはあっさりと頷いた。

アビリティを発動させた瞬間、凄まじい機動でこちらを翻弄していた福音がピタリと止まった。その刹那を見逃さずに繰り出した一撃でまずは右翼を一太刀で斬り落とした。
《9》
常識はずれに高まった加速力を何とか制御しつつ、Uターンして背後から第二激を狙う。
《8》
続いて左翼をすれ違いざまに落として僅かに足を緩めた。
《7》
加速した物体はその質量そのものが武器になる。それを利用し、福音の胸元目掛けて拳を叩き込む。
《6》
バランスを崩した敵機を、更にガドリング砲で追撃していく。
《5》
ゴウラムを分離し、別方向から攻撃させるべく動かす。
《4》
ヒートクロウがSEを削り、そこに更にアサルトライフルを叩き込んだ。
《3》
後一息。そう思い、タイタンを手に距離を詰める。

《2》
狙うは首。迷う事なく剣を振り被った。
《1》
右手に甦る感触。初めてタイタンを使った時、それはかつてザックに生身で落とされて雪辱に燃えるＩＳ乗りの女性だった。絶対の筈の防御が破られ、信じられないといった顔で胸に沈む刃を見つめるその映像までもがフラッシュバックした。
（そうだ・・・）

アノヒトハオレガコロシタンダ

《ＴＩＭＥ　ＯＵＴ》
福音が閃光に包まれた。

空域に突入した一夏達が見た物は第二形態移行（セカンド・シフト）を起こした福音と、光の翼に焼かれて墜落するスカイファングだった。
「先生！」
「待て！」
思わず箒が紅椿を動かそうとするが、ラウラの鋭い声が飛んだ。
「まずは福音の撃墜が先だ。頭に元がつくが教官は空軍エース、そう簡単にくたばりはせん」
「ラウラお前・・・！」

流石に一夏も気色ばむが、ラウラの唇の端から血が流れているのに気づいて表情を変えた。
「・・・分かった。皆、一秒でも速くこいつを止めるぞ！」
全員が頷いたのを確認し、ラウラは思考を巡らせる。
「まずは機動を殺ぐ！シャル、セシリア頼む！」
「分かった！」
「お任せあれ！」
飛び回る福音の進路を妨害するようにシャルロットが銃弾をばら撒き、更にセシリアがティアーズを動員して追撃する。
「一夏は雪片チャージ開始・・・箒、鈴行ってくれ！」
「任せろ！」
「やってやるわ！」
箒の狩る紅椿が第四世代の名に恥じない加速力で福音に襲い掛かる。続いて鈴の甲龍が不可視の砲撃を連続で組み付かれて身動きの取れない福音に直撃させていった。
「ダメ押しだ・・・！こいつも持って行けえっ！」
両肩に換装されたレールガンが同時に火を噴く。しかし福音は凄まじいパワーで紅椿を振り切り、光の翼を拡げて弾丸を受け止めた。
「腐っても軍用・・・容易く倒れはせんか！」
「諦めんな！あたし達ならまだやれるわよ！」
鈴の叱咤に、ラウラは大きく頷いた。
「分かっている！今の連携で奴の動きを止められる事は分かった。箒と紅椿を主軸に一夏と白式が一撃を入れるための状況を作り出すぞ！」

―ザック。

（何だ・・・？俺確か死んで・・・）

―残念ながら死んではいないな。

（つかお前・・・千冬に見えるけど、違うな？）

―流石に分かるか。見た目のみならず声まで再現したのだが。

（そっくりすぎて逆に違和感感じてんだよ。つーかあいつはそんな能面みたいな顔してねえっつの）

―よく見ているのだな。

（まあ色々と関わる事も多いしな。で、千冬じゃないお前は誰だ？）

―千冬や他の女性以外では間違いなく貴様を見ているのだがな・・・気づかんか？

（冗談だ。すまないな・・・人殺しの道具にしちまった挙句俺の罪にまで付き合わせた）

―では止まるか？今お前の教え子達が必死で戦ってるぞ？恐らくお前にまだ教わりたいのだろうな。

（全く、隠居もさせちゃくれないか。すまないついでにもう一回付き合ってくれ）

―一回と言わず何回でも付き合おう。彼女にもそう言えれば手っ取り早いのだが。

（そっちは一回じゃ足りないさ。行きますか・・・超変身！）

光の翼をブレードのように動かし、一気にブルーティアーズと甲龍が叩き落される。福音は続いてシャルロットに距離を詰めた。

「っ・・・シャルはやらせねえええええ！」

「イチカ！？まだ来たら・・・！」

本来なら最後まで動かず、一撃に全エネルギーを叩き込む手筈になっていたのに一夏は白式をシャルロットの盾にしていた。

「うおおおおおお！」

あっという間に危険域に達するエネルギーを雪片弐型に流し込み、カウンターの要領で福音を狙う。外せば自分もザックのようになる。シャルロットを守って相討ちならいいか、そんな考えが頭を過った時だった。

「焦って蛮勇奮うくらいなら尻尾巻いて逃げろって言った筈なんだがな・・・？」

横から福音を蹴り飛ばしたのはザックだった。しかし纏っているISはスカイファングに見えない。

「先生、それは？」

「ああ。どうも第三形態移行（サード・シフト）したらしい」

黒かった装甲は白をベースに所々に黒のラインが入っている。背中には有機的なフォルムの翼が拡がり、両腕にはゴウラムのものらしい長大なブレードが装着されていた。

「三曲目だが・・・お付き合い願えるか？」

まるで舞踏会で女性をダンスに誘うように手を伸ばし、ザックは無

邪気に笑う。まるで子供のような表情に、一夏とシャルロットはポカンとなって見つめた。
「ん？・・・これか？格好付けるのやめにした」
背中の翼が展開し、羽の一枚一枚がスラスターとして駆動し始める。
「箒と鈴の動きは俺が担当する。一夏はエネルギーを何とかしろ」
「わ、分かりました」

福音目掛けて新スカイファングが飛び立つのを見送り、シャルロットはラファールからコードを伸ばして白式に繋ぐ。
「今僕に渡せる全部をイチカにあげる。だから、負けないで」
「ああ。今度は意識なくすような真似はしない」
シャルロットは少しだけ勇気を振り絞り、一夏の頬に口付けた。
「シャル！？」
「お守りだよ」
一夏は頬にそっと触れて微笑む。
「任せとけ。ラウラに皆を頼むと伝えてくれ」
そう言って一夏も白式と共に戦場へと飛び立った。

（そっか・・・俺やっぱり、シャルが好きなのか）
心地よいレベルで鼓動を強める心臓に服と装甲ごしで触れ、一夏は少し赤くなりながら呟いた。
（けど、出来るなら皆を守りたい。守って、その上でシャルと一緒に生きていきたい・・・力を貸してくれ、白式！）
その思いに応えるように白式も光に包まれる。白式・雪羅、それが

第二形態移行（セカンド・シフト）した白式の名前だった。

「来たか！行くぞ一夏！」
「了解！」
福音の弾丸を、ザックは回避し一夏はシールドで打ち消す。
「エネルギーを対消滅させるシールドか・・・またエネルギー馬鹿食いしそうな」
苦笑しつつも二人は一気に距離を詰めていく。
《ＥＸＣＥＥＤ　ＣＨＡＲＧＥ》
スカイファングの右足にエネルギーが収束していく。どうやらこれを相手にぶつければいいらしい。
「ちんたらしていられる時間もないんだ、一撃で決める！」
「行けええええええ！」
ザックは一度高度を上げ、飛び蹴りの構えをとって急降下する。同時に一夏も変化した雪片弐型を構えて福音に斬りかかった。

二つの白と一つの銀が交錯する。落ちたのは、銀だった。

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎ

u
e
d
.
.
.
.
.

第十話　Believe yourself　（後書き）

次回予告

無事に福音を止めた一夏達。見事初任務を達成した彼らに、ザック正式に彼らをあるプロジェクトの参加メンバーとして認める事を話す。そのプロジェクトとは？

次回、「新生ファルコン、世界を駆ける風」Wake up！運命の鎖を解き放て！

あとがき

ちょっと駆け足だったか？そう思わなくもない福音戦でした。次回からは一夏とザックはそれぞれ自分の感情と向き合う事がメインになります。

皆さんの期待に応えられているでしょうか？その辺りも教えて貰えると助かります。ではでは。

第十一話　新生ファルコン、世界を駆ける風（前書き）

キバット「さて、今回は仮面ライダー龍騎についてだ。この作品は、初めて仮面ライダーと仮面ライダーが戦うという描写をメインにした話である」

ラウラ「そうなのか？ブルード教官に倣って今はアギトを観ているが、これでもライダー同士の戦いはあったぞ。G3をライダーに含めるかについては議論が必要と思うが」

キバット「あれはあくまでも勘違いや已む無き事情があった為だからな。龍騎の特徴としては、鏡の世界で戦うという点。倒す相手であるモンスターを味方にして戦う点。そして十三人のライダーが互いに殺し合い最後の一人となったライダーの願いが叶うという点だな」

楯無「あら、それはいいわね。私も参加しようかしら？」

キバット「待て待て。今回のライダーシステムについて詳しく解説するからそれから決めろ。まずカードデッキを手に入れる、次に何か鏡の中を徘徊しているモンスターを適当に選んで契約する。するとそのモンスターの戦闘力と特殊能力を反映したライダーが誕生する訳だな。勿論契約と言うからには代償も存在する。契約したモンスターはライダーに服従し、自分の力を貸してライダーと共に戦う訳だ。その代償として安定した餌の供給を求めてくる」

ラウラ「餌か。ドッグフードでも喰わせるのか？」

キバット「それなら楽だが違う。こいつらは命を喰らって生きてい

る。なのでライダーはその辺を歩いている人間を適当に指名してモンスターに喰わせるか、ミラーワールドを徘徊する他のモンスターを倒してその命を喰わせるかの二択が与えられている。喰わせればまた腹が減るまで契約は延長され、また喰わせた分モンスターも強化される」

楯無「大変ね。それだと願いが叶った後も戦い続けなければならないのかしら」

キバット「その辺りは何とも言えんな。どちらにせよ言えるのは、契約というのは気軽にするモノじゃないという事だ。さもないとどっかの魔法少女みたく命を石ころに変えられて一生戦う事を強いられるなんて事もありえる」

ラウラ「気をつけるとしよう。では本編を始める・・・答えは聞いてない！」

キバット「またかあああああああ！」

第十一話　新生ファルコン、世界を駆ける風

撃墜された鈴やセシリアを救助して戻ったザックを待っていたのは千冬の鉄拳、真耶のビンタと大泣き、一夏のボディーブローに箒のアッパーカット。セシリアには向こう脛を蹴られ、鈴からは痛烈なドロップキックを喰らい、挙句ラウラには容赦のない延髄切りをかまされた。シャルロット？目の前でＩＳを展開し、笑顔のままシールドピアスを構えております。但し米神にでっかい青筋つき。

「待てシャルロット、いくら俺でも生身でそれ喰らったら普通に死ぬから」

「大丈夫ですよ。先生ならきっと不死鳥のように立ち上がってくれると信じてるだけですから」

「信じるってのは世界で一番根拠のない理由だって事知ってるか！？」

「ちょっと落ち着けシャル！せっかく助け出したのにここで殺しちゃ元も子もないからな？」

流石にこれは一夏もまずいと思ったのか、何とか宥めてローキックで勘弁して貰った。

それから三十分後。生徒達が寝静まった後でザックは千冬と二人でビールを片手に部屋にいた。

「洒落抜きで福音ともう一回ガチバトルするほうがマシだったぞおい・・・」

あっちなら反撃出来る分まだやりようがある。しかしこれは防ぐ事も避ける事もザック自身が許していない。とはいえさすがに代表候

補達の一撃をノーガードで受け止めるのはやりすぎたかもしれない。
「自業自得だ。山田先生まで泣かせたのだしな」
「いやもうそれは本気で反省してますはい二度とやりません」
窓の外を見ている千冬にザックは平身低頭で謝った。
「二度とはしないが三度はやる・・・というのは認めないからな？」
思いっきり読まれている。ザックは苦笑しつつ、腫れ上がった頬をクールパックで冷やしながら首を振った。
「個人での無茶はしない。それは約束する。けど、仕事は別だぜ？俺はＩ．Ａ．Ｆだし」
「っ！」
愕然とした顔で千冬が振り返った。Ｉ．Ａ．Ｆ（インビジブルフォース）とは非公式の戦闘部隊。不可視の空軍の名に相応しく、彼らの活動は常に記録されず知覚もされない。闇から闇へと動き、正攻法（国際条約や憲法などに抵触しない方法）では解決出来ない問題を力ずくで解決していく非合法戦闘集団。
故にその構成員はその素性を決して明かさないというのが通説で、千冬も噂程度にしか聞いていなかったのだ。
（それをここで話すだと？）
勿論事実である確証はない。だが空軍という職場を誰よりも誇り、愛したこの男の口からそういう冗談が出てくる事自体がまず有り得ないのだ。
「何故私に話す？極秘事項はどうしたんだ」
「知るかそんなの。まあ、俺が委員会に進言したプロジェクトも俺が請け負っている任務と関係があるからというのはあるがな・・・単にお前相手に隠し事したくなくなったんだよ」
肩を竦め、ザックは残ったビールを一気に飲み干した。

「か、隠し事をしたくない？どういう意味・・・おい」
少し上擦った声で尋ねようとしたが、様子がおかしい事に気づいて振り返る。ザックは壁に寄りかかって寝息をたてていた。
「全くこいつは・・・！」
殴って起こしてやろうかと近づいた千冬は、ザックの表情に気づいてそれを止めた。
（そうか、もう悪い夢は見ないんだな）
眉間に皺の寄らない、何とも穏やかで幼い寝顔だった。
「本当に・・・何処まで私をかき乱せば気が済むんだ？お前は」
横にしてシーツをかけてやりながら、千冬は小さく微笑んだ。

翌朝。ＩＳ学園の生徒達は全員学び舎へと戻ってきていた。
「じゃあ各自荷物を部屋に置いて今日はゆっくり休むように。それから織斑、篠ノ之、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴィッヒは休む前に第五会議室へ来てくれ。荷物は置いてからでいい」
ザックが自分達を名前で呼ばない。これは確実に国際クラスでヤバい話が待っているとラウラは直感していた。

第五会議室。そこには既にザックと千冬、真耶と知らない生徒が一人待っていた。青い髪を肩で揃えた中々の美人で、プロポーションも相当・・・という辺りまで考えたところで一夏はシャルロットにわき腹を抓られて飛び上がった。

「はいそこ、じゃれ合うのは後で好きなだけやれ。こっちは生徒会長の更識楯無。これからお前等と行動を共にする事になるからな」
「よろしく」
一夏達も挨拶を返すと、ザックはモニターを点けながら話を始めた。
一夏達は横一列に整列して話を聞く。
「まず、千冬から大まかな概要を聞いているだろうがもう一度説明しておく。今回委員会に打診し承認されたのは、専用機持ちのＩＳ学園生徒を構成員とした独立部隊だ」
「独立部隊？何でまた・・・」
思わず疑問が口から漏れる。千冬の出席簿が来るかと思いきや、ザックがそれを制して頷いた。
「まあそう言いたい気持ちは分かる。だが、このままだとお前等が互いに殺しあわなくちゃならないとしたらどうだ？」
一夏達は目を見開いて顔を見合わせた。
「そんな、そんな事ありえませんわ！」
「そりゃお前等自身が自分の意思で殺しあうとは俺も思ってない。だがもし戦争になったらどうなる？それも世界各国が自国以外全てを敵と見定めたバトルロワイヤルに発展したら？現在各国の最新鋭装備を盛り込んだお前等のＩＳは間違いなく戦場の切り札になる」
シャルロットが青ざめた顔で一夏の腕をきつく掴んだ。
「例えば俺のＩＳに搭載されているタイタンだが・・・これはイギリスがＩＳ装着者を殺せる装備を開発していく過程で生まれた代物だ。もっと言えば、ドイツがシュヴァルツェア・レーゲンにＶＴシステムを搭載したのもその一環だろうな。中国やロシアも一皮剥けば何考えてるか分かったもんじゃない」
勿論日本も同じ。そう付け加え、ザックは安心させるように笑った。
「で、だ。今も尚世界中に火種は山ほど燻っている。もしそういったＩＳ絡みの紛争が起こった場合、速やかに急行して双方を戦闘続行不可能なレベルまで叩きのめすのがこの部隊の目的だ」
「しかしブルード教官。戦争は常に政治が絡みます。いくら現場を

叩いたところで・・・」
「ラウラの言いたい事は分かる。要はその場で戦う事が出来なくなればそれでいい。後は俺やその仲間が片付ける。下世話な言い方をすれば、お前等には戦争を望まない一般大衆にとってのヒーロー或いはヒロインを演じて欲しいわけだ。もし何かあっても彼らがいる限り安心して戦いに反対出来るという空気を作り出すためにな」
納得したように鈴が頷く。一夏の腕を掴んでいたシャルロットの力も大分弱くなっていた。
「だが、はっきり言ってこれはお前達を巻き込む必然性は全くない。それこそ教師部隊の有志を募ってやればいいだけだしな。それでも話した理由は、お前達ならかつて俺が所属していた部隊にも勝る最高のチームを作れると確信したからだ」
認められた。その事実が嬉しくて思わず頬が緩んだ。
「だからと言って付き合う義理はない。それでもこのふざけた部隊の為に時間と安全を投げ出してもいいと言える大馬鹿は一歩前に出ろ！」
ザッという足音が響く。一夏達の列は少しも乱れていなかった。だがその位置は前に動いていた。そう、一歩分だけ。

「本当に大馬鹿だなお前等・・・」
苦笑しながらザックが呟いた。
「では栄えある部隊名を発表する。『インフィニット・ファルコン小隊』、戦争の芽を踏みつけ平和の卵を守る鉄（くろがね）の隼だ」
「センスないなお前」
ぼそりと呟いた千冬の声は聞こえなかった事にする。
「続いてコールサインと部隊員を示すバッジを渡す。ファルコン０（ゼロ）、

ラウラ・ボーデヴィッヒ！」
「はっ！」
敬礼して前に出たラウラが真新しいゼロが刻まれた黒い隼のバッジを受け取った。
「ファルコン０１（ゼロワン）、セシリア・オルコット！」
「はい！」
セシリアに渡されたバッジには０１と刻まれ、隼の首に青いチョーカーが着けられていた。
「ファルコン０２（ゼロツー）、鳳鈴音！」
「はいっ！」
鈴の隼は紫のチョーカーだった。
「ファルコン０３（ゼロスリー）、篠ノ之箒！」
「はい！」
箒は手渡された紅いチョーカーを着けた隼をしっかり握り締めた。
「ファルコン０４（ゼロフォー）、シャルロット・デュノア！」
「は、はい！」
ラウラに倣って敬礼し、受け取ったバッジにはオレンジのチョーカーつきの隼が描かれていた。
「そしてファルコン・リーダー、織斑一夏！」
「はい・・・って俺がリーダー！？」
てっきりゼロを受け取ったラウラが隊長をやるものと思っていた一夏は素っ頓狂な声を上げた。
「会議の結果、お前を隊長にするのが一番部隊員の士気も上がると結論が出てな」
救いを求めて背後を振り返るが、全員同意しているらしい。
「分かりました、やります」
期待されているなら応えてみせる。それが一夏の出した結論だった。
「そうか。頼むぞ」
一夏に渡されたバッジに刻まれた隼には何も着けられていなかった。
しかしその背後に銃と剣が交差している。

「あれ？そういえば更識さんのコールサインは？」
シャルロットが首を傾げた。
「ああ、彼女にはお前達の司令官をやって貰う。書類の上ではインフィニット・ファルコン小隊は生徒会直属になる。有事の際には最優先でそちらに回ってもらうが、基本は生徒会員みたいな扱いになると思ってくれ。あ、出撃の場合授業は公欠扱いになるからそこは安心していいぞ」
「よろしくね、皆。それと先生？」
楯無は底の読めない笑顔でザックに向き直った。
「やっぱり部隊名は変更していいですか？流石にセンスが・・・」
「え、俺かっこいいと思うけど」
この時、部屋の女性陣全員の目が微妙だった理由が一夏には分からなかった。

一夏達が解散した後、教師三人は昼食を食べながら相談していた。
「けど、本当に織斑君を隊長にしてよかったんですか？」
ナポリタンをフォークに巻き付けながら真耶が尋ねた。
「グループのリーダーに求められるのは実務能力よりもカリスマだ。要は部下が着いて行きたいと思うだけの魅力があれば問題はない・・・まあ、周囲全部がそれだとそのリーダーを祭り上げるだけの集団になるからそのカウンターになる人間を副長ポジに就ける必要はあるがな」
「だからボーデヴィッヒを０（ゼロ）にしたか。多少不安ではあるが」
ザックはきつねうどん（芋天・稲荷つき）、千冬はカツカレーを食べている。ザックは大きく切られた油揚げを一口齧って頷いた。
「その辺りはラウラのプロ意識を見込んでだ。それにあいつは福音

とやりあった時に俺の救出よりも福音の撃墜を優先したからな。情の一夏、律のラウラでバランスいいだろ」
残っていたうどんを出し汁ごと流し込み、ザックは食後のお茶を飲んで一息入れた。
「・・・さっきからどうしたんだ二人とも？」
「いえ、その・・・」
「ザック、お前本当にイギリス人か？」
訳が分からずザックは顔を顰める。
「箸の扱いなどそこらの日本人より達者だろうが。しかも塩辛や納豆を好物と言い切って欧州の人間だというのが未だに信じられん」
「俺は自分の事日本人だと思ってるんだが。日本語で報道されるニュースとか左側通行の道路とか見たら安心するし、野球中継で巨人の事とか話してるの聞くとなんかほっとするんだよ。まあ俺は阪神ファンだけどな？」
たまらず真耶が笑い出し、千冬も肩を震わせて笑いを零す。ザックも小さく苦笑しながら残ったお茶を少し冷ましてから飲んだ。

d・・・・・

To Be Continue

第十一話　新生ファルコン、世界を駆ける風（後書き）

次回予告
遂に始まった夏休み。自宅でのんびりしていた一夏の元を訪れる恋する乙女達。そんな彼女達に気を使った千冬はザックと真耶を引っ張り出して近場のバーでのんびりする事となる。そこでザックが彼女に投げつけた爆弾とは？
次回、「俺はここにいる」Ａ　Ｎｅｗ　Ｈｅｒｏ．　Ａ　Ｎｅｗ　Ｌｅｇｅｎｄ．

あとがき
どうも、今回は久々に仕事が休みだったので昼間に更新です（現在１２：４３）。
夏休み編辺りで終わらせるとか言ってましたが、せめて文化祭まではやる事に決めました（勝手）。なのでもうしばらくお付き合い下さいませ。
因みにザックが食べていた食堂のメニューは自分がうどん食べに行く時のジャスティスだったりしますｗではでは。

と思ったのですが、アンケートです。
原作に沿って話を進めるのは七巻辺りまでになる予定でして。その後は千冬も戦線復帰する予定です。守られるヒロインよりも主人公と肩を並べる・背中を預けあう関係が好きなので！

そこで、千冬さんの専用機を考えています。

以下スペック

第四世代ＩＳ

主武装：大型バスターソード（ＦＦ？ＡＣのクラウドが使ってたような七本の剣を使う。合体させて大剣として使う他、変則的な七刀流も使用可能）

基本的には紅椿とほぼ同じスペック。小型の自立戦闘支援機や中距離用のビームマシンガン等も搭載されている。

開発者・篠ノ之束

募集するのは機体の色と名前です。漢字を使うもよし、横文字もよし。皆さんの応募をお待ちしております！

第十二話　俺はここにいる　（前書き）

キバット「今回は仮面ライダーカブトについてだ。前作の響鬼でやらなかったベルトと変身が復活しているのと、原点回帰とばかりに昆虫がテーマになってるのが特徴だな。主演は水嶋ヒロ。今は何かと取り沙汰される彼ではあるが、この作品で演じた天道総司の役には間違いなくハマり役だったと言えるだろう」

束「どんな役だったのかな？」

キバット「一言で言えば、『俺様・何様・総司様』という感じだ。天上天下唯我独尊を地で行く通称最強のニートだ」

千冬「ニートなのか！」

キバット「少なくとも定職に就いている描写はないな。ただどういう訳かどの分野でも一流以上の力を発揮する、何処でも重宝がられるというチートスペックの持ち主でもある」

千冬「だそうだぞ束。お前も少し見習ったらどうだ？」

束「えー、ちーちゃんひどーい」

キバット「・・・次はカブトのスペックだな。変身する為にはベルトともう一つ、カブトゼクターというメカカブトムシに気に入られる必要がある。これについては他のライダーも同様だ。次に、変身した直後の姿はマスクドフォームと呼称され、防御に優れたずんぐりした見た目になる。最大の特徴であるキャストオフを行う事でライダーフォームに変わると、今度は超高速での活動を可能にするク

ロックアップが使えるようになる。これは自分達が知らないだけで、もしかしたらすぐ傍でライダーが戦っているかもしれないという描写をやりたかったからだそうだ」

束「面白そうだねえ。ざっくんのＩＳに発現したＯＯＡも似た効果だったっけ？」

キバット「加速という点では似ているが、あれはどちらかというとファイズに近いからな。とはいえサードシフトした時点でクロックアップに近い現象になってはいる。加速力と持続時間共に大幅な上昇が確認されてる訳だ」

千冬「まあ今はカブトの話だ。確か、戦いの神だったか？」

キバット「それはガタック。カブトの異名は太陽の神だ。まあ、ガタックの場合語尾に（笑）が付くのが泣けるが」

束「えー？スペック上は最強なんだよね？」

キバット「確かに基礎スペックは全ライダー中でも最強なのがガタックだ。しかし変身したのが加賀美新。天道と比べるとどうしても凡人感は否めず、しかもカブトのパワーアップであるハイパーカブトのお披露目で爆死するという悲惨な役回りを回される不遇のライダーだ。おっと、今回こそは・・・」

束「天の道を行き、全てを司る！言って見たかったんだよねこれ～♪」

キバット「いい加減にしろおおおおおおおお！」

第十二話　俺はここにいる

夏休みである。というか日本の夏はシャルロットの予想を超えて過酷であった。

「湿度が高い分・・・フランスより辛いかも・・・」

基本的にフランスを初めとしたヨーロッパ諸国は日本と比べて湿度が低く、夏の暑い盛りでも割と過ごしやすい。しかし日本の場合、その湿度故に汗が乾かず非常に不快な思いをする事になる。

（案外ザック先生なんかはケロっとしてそうだけど）

セシリアやラウラもヘバっていた事を思い出し、彼女は小さく微笑んだ。しかし彼女の予想に反し、ザックもこの暑さで浜に打ち上げられたクラゲのようになっていたのだがそれは予断である。

「それはともかく・・・着いた！」

某所の一軒家。その前でシャルロットは織斑の表札を確かめた。

「何て言おうか？本日はお日柄もよく・・・じゃなくて！」

これでは見合いの仲人である。

（理由なんてないんだよね。一夏に会いたかったからだし・・・）

大分日本語の発音にも慣れてきたなと思いつつ、シャルロットは呼び鈴に指を伸ばした。

「シャル？どうしたんだこんな所で」

「ぅわひゃあ！？」

唐突に背後から声をかけられ、シャルロットは心臓を押さえて飛び上がった。

「い、い、い、一夏！？何でここに！？」

「いやそこ俺の家だし。寧ろ何でここには俺の台詞じゃないか？」

「ご尤もです・・・」

かなり派手なボケをかましてしまい、シャルロットは萎れた菜っ葉よろしく小さくなってしまう。

「えっとその・・・」

「うん？」
「来ちゃった♪」
（ってうわあああああ僕の馬鹿僕の馬鹿ぁ！）
余りにもあんまりな台詞が口から出て頭を抱える。しかし当の一夏は笑って頷いた。
「まあせっかく来たんだ。上がってけよ。あんまり大したもてなしは出来ないけどな」

「お邪魔しまーす」
玄関で靴を脱ぎ、シャルロットは一夏の案内でリビングまで通された。
「デュノアか。随分と早いな」
「あ、織斑先生おはようございます！」
新聞を読んでいた千冬が片眉を上げて言った。
「今は夏休みだし、そこまで畏まる必要はない。楽にしろ」
「は、はい・・・」
とはいえ学校では厳しく優秀な教師と名高い千冬と二人でリビングにいるというのは、シャルロットにとって緊張するなというほうが無茶振りである。
「・・・ふむ、一夏。私は今日用事があるので出かけるぞ」
「え？分かった。晩飯は？」
「済ませて帰る」
そう言って千冬は二階へと上がって行った。
（もしかして、気を使わせちゃったかな？）
普段から気遣いを主としているシャルロットは逆に気遣われる事に慣れていない。どうにも居心地の悪さを拭えぬまま、着替えて出か

ける千冬を見送った。

同じ頃。ザックは日本に来て購入した自宅の和室で打ち上げられたクラゲになっていた。
「うでー・・・何の因果で日本はこんなに暑いんだ。って湿度のせいだよな、うん知ってたわ」
アポロとルナも廊下のひんやりした床に腹ばいになっている。大一匹、小二匹のクラゲであった。
因みに一戸建て・一括購入である。Ｉ．Ａ．Ｆという特殊な立場にあるザックは、口止め料も込みでかなりの報酬を軍から受け取っている。具体的な額は伏せるが、割とメジャーなプロ野球選手の年収とタメが張れるといえば想像出来るだろう。最も家と必要最低限の家電（テレビ・冷蔵庫・洗濯機）以外はクーラーどころか扇風機も買ってないためある意味自業自得とも言えるのだが。
「無理やりにでも何か食っとかないと身が持たんなこりゃ・・・。昨日買った冷やし中華まだ残ってたっけ？」
ベリベリと音がしそうな動きで起き上がり、ザックが台所へ向かおうとした時だった。
《子供の頃の夢は～♪》
ザックの携帯だった。
「誰だ・・・って千冬か」
メールでなく電話な事にいくらか違和感を覚えつつザックは通話ボタンを押した。
「もしもし」
《休んでた所済まんな。その・・・今日の予定は空いているか？》
紛れもなく千冬の声であるが、妙に覇気がない。

「まあ空いてるっちゃ空いてるが。暇つぶしに付き合えって？」
《う、まあそうなるな》
歯切れも悪い筈だ。そう苦笑し、ザックは了承の返事を返した。

一方織斑家のリビング。一夏とシャルロットの二人っきりかと思いきや、千冬が出てから二十分と経たないうちにセシリアが来訪。続いて鈴、箒、ラウラが訪ねてきたため結局いつもの面子であった。
「あー・・・これじゃちょっとキツいな。よし、昼飯の材料買ってくるから待っててくれ」
「あ、僕も行くよ」
シャルロットが腰を浮かせるが、一夏は首を振った。
「せっかく来てくれたのにまた炎天下を歩かせるのはちょっとな。その気持ちだけで十分だ」
そう言って一夏が買い物に行ってしばらくしてからだった。
「いい機会だし、一応確認しときたいんだけど・・・」
鈴は冷えた麦茶を半分程飲んで他のメンバーを見回した。
「あんた達一夏の事好きよね？もちろん男として」
一瞬全員が固まったが、ややあっておずおずと頷いた。
「私がそうなったのは昔、男女と虐められていた時に一夏が助けてくれてからだな。あれからだ」
箒がコップを持ったまま言った。
「私は学校で出会って、代表決定戦を経てでしたわ。どんな逆境でも諦めずに走っていける姿に私自身の理想を見ましたの」
セシリアも頬を染めながら言った。
「あたしは、箒と似てるかな。やっぱり小学校の時にクラスの男子に虐められて、それを一夏が助けてくれたの」

鈴は内容については伏せておくことにした。やはりあれは自分だけの思い出にしておきたい。
「私は例のタッグマッチの時だ。ＩＳ同士の共鳴で一夏の願いや強さの理由を知って、それからだな」
ラウラが遠くを見る目つきになって言った。
「僕は、僕の過去を話した時だね。あの時僕は一人ぼっちで、これからもずっとそうなんだと思ってた。そうやって冷たい部屋に自分を閉じ込めてたら、一夏が手を差し伸べてくれて・・・とっても暖かかった。でも、何時しかその暖かさを独り占めしたくなってたんだ」
シャルロットも何時もの笑顔ではなく、真剣な表情だった。
「だったら、あたし達は敵同士って訳ね」
鈴の言葉にシャルロットは小さく息を呑んだ。
「一夏は一人しかいない。皆友達じゃ満足出来ない・・・だったらもう、敵同士でしょ」

ざっとシャワーを浴び、服を着替えて（流石にランニングと半パンで外を出歩ける程人生捨ててない）千冬との待ち合わせ場所へと来ていた。
「あらザックさん」
「真耶？買い物か？」
私服姿の真耶はころころと笑いながら首を振った。
「織斑先生にお呼ばれしたので」
「何だ真耶もか。俺もだ」
どうやら二人して暇つぶしの相手にされたらしい。そう思って二人

は笑った。

「・・・やだ」
誰もが口を開けないなか、シャルロットは震える声で言った。
「やだよ・・・せっかく友達になれたのに、そんなのやだ！」
止めようと思っても涙は止まらず、次々と溢れてはスカートに染みを作る。
「ふむ・・・ならばこうしてはどうだ？」
腕組みをしてラウラが口を開いた。
「そもそも考えてみろ。少なくとも一夏は私達が互いに争った挙句に想いを告げたところで、それを良しとする男か？」
一斉に首が横に振られた。
「そうだ。本気で一夏と付き合うなら、私達もまた友人付き合いをやめる訳にはいかない。そして私もやめたくない。そこでだ・・・」
ラウラは一旦言葉を止め、残った麦茶を飲み干して続けた。
「一夏が戻ってきたら全員で告白する。そして一夏が誰を選ぼうと恨みっこなし。これでどうだ？」
ある意味壮大な博打に、セシリアと箒が固まる。
「・・・いいわ。あたしは乗った」
「無論ここで退くのもアリだ。私は退かんがな」
不敵なラウラの笑みに、箒とセシリアも腹を決めたらしい。決然とした顔で頷いた。
「僕も、やる」
涙を拭き、シャルロットははっきりと宣言した。
「ただいまー」
まさにその時一夏が帰ってきた。

「悪いな。留守番させちまって。すぐ用意するから待っててくれ」
「あ、その前に一夏。話があるから荷物置いたらこっち来て」
鈴に呼ばれ、一夏は不思議そうな顔をしながらも買った食材を冷蔵庫に仕舞ってやって来た。
「何だ？」
「改めて言おう。私は一人の女として、お前が好きだ」
ラウラの台詞に一夏が目を見開く。
「一夏、小学校の時私を庇ってくれた事・・・私は一度も忘れた事はない。私と付き合ってくれ！」
「あたしの料理の腕が上がったら毎日の食事をあたしが作るって言ったのは、あたしと結婚してって意味で言ってたの。もう一度言う。今じゃなくてもいいから、あんたにはあたしの料理を食べて欲しい」
「一夏さん、貴方を誰よりもお慕いしておりますわ！」
口々に飛んでくる熱烈な告白に一夏は目を白黒させる。それが落ち着いた頃合で、シャルロットは深呼吸して言った。
「一夏は、僕がどうしたいのかって前に聞いたよね？僕はここにいたい。一夏の傍で、一夏と一緒に嬉しい事も悲しい事も全部分かち合って生きていきたい。大好きだよ、一夏」
「え、あ・・・その・・・」
しどろもどろになる一夏に、ラウラは一呼吸おいてから説明を始めた。
「・・・だから、無理に今返事をしろとは言わん。ただ返事をする時は全員がいる時にしてくれ」
「・・・分かった。今でいいか？」
一夏は全員が頷くのを見て大きく息を吸った。
「まず、俺みたいな奴を好きになってくれてありがとう。皆の気持ちは凄く嬉しいよ」
言葉を一つ一つ選ぶように一夏は続けていく。
「俺はインフィニット・ファルコン小隊の隊長として、クラスメイトとして幼馴染として、皆を守りたいと思ってる。けど、もし恋人

として一人だけ選ぶとしたら・・・俺は、シャルを選ぶ」
「・・・え？」
呆けた顔でシャルロットが呟いた。
「だから・・・箒、鈴、セシリア、ラウラ。ごめん、そしてありがとう・・・！」
「いや、構わない。お前は全員の気持ちを真剣に考えてくれたのだからな」
「うん、これですっきりした」
「恋人としては無理でも、友達付き合いはこれからもしたいのですけど・・・」
「シャルロットを泣かせたら承知せんからな。その場合は友人として私が報復すると宣言する」
皆瞳を潤ませてはいたが、それでも笑顔だった。

織斑邸がそんな事になっていたとは露知らず。ザック達三人は千冬行きつけのバーにいた。現在は日も落ちて七時を回っていた。
「マスター、ドライマティーニ。マスターが思う最高にドライな奴で頼む」
ザックの注文に、マスターは薄く微笑んでカクテルグラスにジンだけを注いで出してきた。
「どうぞ。視界に納めるベルモットはそちらの棚からどうぞ」
「そっか。じゃあチンザノ辺りを」
楽しげに笑い、ザックは一口酒を口に含む。舌に感じる刺激が心地よい。
「さて・・・お前がわざわざ俺、だけでなく真耶まで呼び出すって

事は何か厄介ごとか？」
「まあ、厄介と言えば厄介だな。家にデュノアが訪ねて来た」
思わずザックと真耶の目が点になった。
「それだけか？」
「向こうは気づかなかったが、家を出てからオルコットともすれ違った」
「・・・その分だと何時ものメンバーが揃いそうですね」
実際揃っていたのだが、そこは彼らの知るところではない。
「で？まさかとは思うが、あいつらが一夏にアプローチするのを止めろとか言わないだろうな？」
摘みにチーズを乗せたクラッカーを食べつつザックはじろりと千冬を見た。
「そうは言わんさ。ただまあ、臨海学校で少しばかりやらかしてな」
「何をですか？」
「・・・一夏をやらんとでも言ったか？」
千冬は無言でビールを口につける。珍しくちびちびとやるのは動揺している時の合図だった。
「マジかい・・・」
「心配なんですね～・・・」
頭を抱えるザックと苦笑いする真耶に、千冬はばつの悪そうな顔で頭をかいた。
「しかしだな、一夏はああ見えて人を見る目が少し心配だ。いや多少の火傷はしてでも経験は今のうちにしといたほうがいいとは思うんだが、手酷い火傷はその・・・」
「ああもう分かった分かった！」
周囲の迷惑にならない程度に声を張り上げてザックが千冬を止めた。
「はぁ・・・今から少しキツい事言う。覚悟はいいか？」
「うん？あ、ああ・・・」
しばらく見ていなかった氷の目が自分を貫くのを、千冬はなんとも落ち着かない気分で見た。

「お前、一夏が心配だと連呼しちゃいるがな。心配以上に、お前自身が一夏が独り立ちするのを恐れているように見えるぞ。一夏が頼ってくれなくなるのがそんなに怖いか？」
千冬の手からビールグラスが滑り落ち、床で砕けた。
「そう・・・見えるか・・・？」
「ああ」
千冬はカウンターに置かれたピーナッツの皿を見つめている。その目から一筋涙が零れた。
「そうだな・・・両親が蒸発して、私の家族は一夏だけになった。ずっと私が守って、育てていこうと誓ったんだ・・・けど怖い、一夏が一人で生きていけるようになったら、私は誰を守ったらいいんだ？いや、違う・・・私が一人になりたくないだけで・・・っ」
「・・・」
ザックは無言で千冬の頭に手を置いた。真耶はそっとザックに目配せして席を立った。何となく察してくれたのだろう。同僚の気遣いに感謝しつつ、ザックは千冬に話しかけた。
「以前お前、俺に何処にいるのかと聞いたな」
「・・・ああ」
ふっと笑みを零し、ザックは千冬がこちらを向くのを待って続けた。
「俺はここにいる。織斑千冬の前にいる、目の前の男がザック・ブルードだ」
マスターから新しいグラスを受け取り、ザックは笑った。
「そう、か・・・お前はここにいるんだな・・・？」
手を伸ばし、ザックがここにいる事を確かめるように頬を撫でて千冬は涙を流したまま微笑んだ。

それから十分後。流石にこのまま店で飲むのはマスターに迷惑だろ

うと三人は一番近かった織斑邸へと向かった。
「あ、お帰り・・・って先生？」
「よ」
「お邪魔しますね」
一夏は凡その事情を察したのか、苦笑しつつも家に上げてくれる。
リビングのテーブルに買ってきた各種酒や摘みのパックを置いて三人はそれぞれソファに座った。
「あ、そうだ。千冬姉聞いてくれるか？」
「何だ？」
一夏は少し照れたように笑ってシャルロットを連れて来た。（箒達は一足先に帰ったらしい）
「えっと、今日僕・・・私シャルロット・デュノアと」
「織斑一夏は正式に交際する事になりました！」
「まあ、おめでとうございます！」
「よかったな。頑張っていけよ」
真耶とザックが祝福する横で、千冬は無言でシャルロットの前にチューハイの缶を置いた。
「お、おい千冬？」
「弟を頼んだぞ！」
既に酔っているのか、千冬はテーブルに両手を着いて頭を下げた。
「・・・はい！」
感極まったようにシャルロットは頷いた。
「よし、今日は私が許す。一夏もシャルロットも付き合え！」
「うえっ！？」
「そりゃまずいだろおい！」
絶句する一夏と慌てて止めに入るザックだったが、千冬は何処吹く風だ。
「家主は私だ。そして私が許可を出したのだから問題はない！」
（駄目だこりゃ・・・完全に回ってやがる）
当のシャルロットは腹を括っている様子なので、ザックも早々に諦

める事にした。
「止めなくていいんですか？」
「止まるタマじゃないだろ」
真耶に苦笑で返し、ザックは自分のビールを手に取った。

結局、この晩に一番騒いだのは千冬本人だった。相当に悪酔いしたのか、何度もシャルロットに「一夏を頼む」と頼み、酔い潰れたシャルロットを一夏が寝室に運んでからは延々真耶に絡んだ挙句にザックの膝を枕に眠ってしまった。
「やれやれ・・・まあ、今回だけは多目に見といてやるか」
膝に広がった髪に手櫛を入れ、ザックは優しい目で千冬の寝顔を眺める。
「やっぱり、好きですか？」
ザックに尋ねたのは真耶だった。
「そうかもな。けど、もう一度白騎士（あいつ）に会って白黒つけないと自分の感情にも向き会えんわ」
「そうですか。・・・私はザックさんの事好きでしたよ」
一瞬聞き流しそうになり、ザックは慌てて真耶に向き直った。
「けど、分かっちゃいましたから。私じゃ絶対に織斑先生に勝てませんし・・・」
「・・・無自覚に振った挙句コレじゃ最低なのは分かってるが、友達は辞めないでくれるか？」
真耶は一瞬目を丸くしたが、今までで一番大人びた笑みを浮かべて頷いた。

To Be Continued.....

第十二話　俺はここにいる　（後書き）

次回予告

遂に始まる文化祭。一夏とシャルロットは生まれて初めて恋人同士で回る文化祭に心躍らせていた。その文化祭に伸びる亡国機業（ファントム・タスク）の魔手。それを察知したザックは単身立ち向かう。

次回、『英雄黙示録』次の駅は過去か？未来か・・・。

あとがき

今回で一夏とシャルロットはカップル成立です。そして千冬さんちょっとキャラ崩壊？一話に詰め込みすぎた感もありますが、この調子で行きたいと思います。

活動報告にも書き、前話のあとがきにも追記したのですが、千冬さん専用機の名前とカラーリングを募集しています。決定しているスペックなどは活動報告からご覧下さい。

現在候補は二件。『名前：繚乱・色：白とピンク』『名前：吹雪・色：白』の二つです。

これ以外にこんなのがいい！という方がおりましたら気軽に感想なりコメントなりで応募お待ちしております。ではでは。

第十三話　英雄黙示録（前書き）

キバット「仮面ライダー５５５は平成ライダーシリーズ四作目に当たる。五代雄介、津上翔一、城戸真司と優しい馬鹿が三代続いた主人公のなかで、５５５主人公乾巧はどちらかというとツンデレ気味で口の悪いヤンキーっぽい主人公だな」

のほほん「んっとー、オルフェノクっていうのと戦うんだよねー」

キバット「その通り。このオルフェノクという設定は、自然死した人間が低確率で覚醒するパターンと覚醒したオルフェノクが別の人間にエネルギーを注入する事で強制的に覚醒させる２パターンがある。それ故に、望まず力を得てしまった人間の苦悩なども描写されているな。因みにこういう怪人サイドのドラマを描くのは、ヒーローが殺人者に見えかねないからという理由でタブーとされていた」

虚「ままならないものね。それで、オルフェノクサイドの木場勇治と人間サイドの乾巧の二大主人公になるのかしら？」

キバット「もう有名な話だからバラしてしまうが、乾巧もオルフェノクだ。今作に登場する仮面ライダーはオルフェノクじゃなければ変身出来ない設定だからな。逆に言えばベルトさえあればオルフェノクないしオルフェノクの因子を持つ者なら誰でも変身出来る」

のほほん「すごいねー。じゃあ次はファイズ達の能力行ってみよー」

キバット「分かった。まずファイズは主人公乾巧がメインで変身するライダーだ。さっきも言った通り、オルフェノクがベルトを持てば変身出来るため別のキャラクターがファイズになるパターンもあ

る。巧が変身した時は右手首をスナップさせる癖があるんだが、このアクションのキレが実に格好良い。一般にヤンキースタイルと言われる戦い方だが、巧のキャラに合った戦闘スタイルと言えるな。因みにファイズが使う武器は携帯電話やデジカメといった家電製品が元になっており、戦闘時以外は普通に使えるものという設定だ」

虚「全部で三人のライダーだったわね。次はカイザよ」

キバット「よし。次に登場した仮面ライダーカイザは草加雅人が主な変身者だ。ただこのベルトは性能がピーキーな分とんでもない副作用がある。オルフェノクの因子適正が低いと一度変身した後灰になるというな」

のほほん「やだー」

キバット「泣くな！まあこの草加は適正が高いため灰にはならなかった。オルフェンクを憎み、全てのオルフェノクを滅ぼそうとしている男に埋め込まれた因子適正が高いというのは皮肉だがな」

虚「小説版ではヒロインを強姦するわ最後は手足切断されるわとテレビ版以上に悲惨ね。男版ヤンデレというのは怖い以上にみっともないわ。カイザについてはこれくらいで、最後にデルタ行きましょう」

キバット「任せてくれ。デルタは三本のベルトの中で最初に作られた設定だ。それ故に武器も銃一丁のみ。所謂ガンナー枠のライダーだが、殆ど格闘戦を行うためか『ガンナーライダーはヘタレ』というジンクスは中途半端にしか適応されていない」

のほほん「そんなジンクスあったんだー」

キバット「ああ。元々は前々作のアギトに登場したＧ３が銃メインのライダーだったんだが、これがまた弱くてな。それでもＧ３－Ｘになってからは活躍したし、何より氷川誠は白星こそ少ないが一度として人を守る仕事から逃げた事がない。彼の名誉を補足したところで話を戻すが、ファイズ以降の剣に登場したギャレンやカブトのドレイクなどで銃を扱うライダーのヘタレっぷりが強調された為にこのジンクスは生まれている。まあデルタの場合、終盤まで敵が変身していた＋その敵がオルフェノクの中でも屈指の強さだったという要因が重なって恐ろしい強さを発揮したために弱いという印象が余りない。その分主人公サイドに渡った時に変身した三原修二が素人で臆病という事もあって存分にヘタレぶりを見せていたがな」

虚「それでも最後まで逃げずに立ち向かったのよね。素敵じゃない」

キバット「そこが彼の強さではあるな。またデルタのベルトは適正が低い者が装着すると性格が凶暴化し、ベルトに対して異常なまでの執着心を持つようになる副作用がある。そう考えるとファイズが一番安全なんだな」

のほほん「オートバジンもー、可愛いよねー」

キバット「人型に変形して主人公をサポートするバイクというのも初だったしな。実際かなりの人気キャラとなっている。それではそろそろ・・・」

虚「Ｏｐｅｎ　ｙｏｕｒ　ｅｙｅｓ！Ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ φ，ｓ！」

キバット「・・・分かってたけどな」

第十三話　英雄黙示録

「さて・・・」
ＩＳ学園・アリーナにて。ザックはスカイファングを装着して武装をチェックしていた。
「コール・タイタン」
今までは長剣だったが、今回呼び出されたのは見覚えのある四つのパーツだった。
「まさかとは思うが・・・」
ＤＶＤの内容を思い出しながら組み立てていく。
《ＧＵＮ　ＦＯＲＭ》
「やっぱし」
拳銃型にした瞬間そんな音声が鳴り響き、ザックが苦笑交じりに呟いた途端だった。
《お前倒してもいいよね？答えは聞いてない！》
「声まで再現したのかよ！」
悪ノリする相棒に突っ込みつつ、ザックは更に武器を組み替えていく。
《ＲＯＤ　ＦＯＲＭ》
《お前、僕に釣られてみる？》
「ウラタロスも完備か。じゃあ次は・・・！」
徐々にテンションが上がってきたのか、上機嫌に武器を組み替える。
《ＡＸ　ＦＯＲＭ》
《俺の強さは、泣けるでぇ！》
「待ってました！よしそれでは真打！」
主役である彼の武器の組み方など目を瞑っていても出来る。鼻歌交じりに組み立て、ザックは大きくそれを振り被った。
《ＳＷＯＲＤ　ＦＯＲＭ》
《ガルル・セイバァァァーッ！》

そしてずっこけた。
「スカイファング！お前モモタロスをハブりやがったなあああああ！？」
全く変なところで気が利かない相棒である。別に「俺、参上！」がやりたかった訳ではないが。
「・・・まあいい。他の三つがあっただけでも十分だ」
ブレイクダンスも練習しとこうか、などと下らない事を考えていると待っていた相手がようやく現れた。
「来たか二人とも」
一夏と箒。福音戦でパワーアップした白式と紅椿のテストを兼ねた模擬戦だった。
「こっちはとっくに温まってる。始めようぜ」
拳を鳴らす仕草をしながらザックは不敵に笑う。一夏と箒も頷いてＩＳを展開した。

夏休み中の特訓が功を奏したのか、箒は既に絢爛舞踏を任意で発動出来るようになっている。それが一夏と白式のスペックを最大限生かせる状況を作り出していた。
「で、どうだ？お前の新しい相棒は」
まずは箒から狙うらしいザックに通信を繋いで千冬は声をかけた。
《全くお前そっくりのじゃじゃ馬だ！一段と過激になりやがった！》
「誰がじゃじゃ馬だ！」
《お前以外にじゃじゃ馬なんて俺は箒とラウラと鈴と・・・結構多いな、っと危なっ！》
箒を助けようと突っ込んできた一夏を跳び箱の前転跳びの要領でかわしながらザックはその背中を蹴り飛ばす。まるで舞うような動き

は人類初の第三形態移行（サード・シフト）を成功させたＩＳの名に恥じないものだった。

「誰がじゃじゃ馬か全く！」
鼻息は荒いが、箒もある程度はクールに動けるらしい。半分程に減ったＳＥを白式の分も回復して刀を構えた。
「このまま逃げ切れば俺達の勝ち・・・だけど、その勝ち方はちょっとな」
「分かってるではないか。同じ勝つなら・・・叩き落す！」
今ならやれる。その感情に身をゆだね、二人は一気に加速した。
「・・・待ってたぜ」
ニヤリとしたザックの笑み。その瞬間その姿が消えた。
《ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》
「なあっ！？」
「くっ・・・何処に！？」
二人が慌てた刹那、凄まじい衝撃と共に二機のＳＥは一気に０を刻んだ。

「だあああ！また負けたあああ！」
肩を解しつつ一夏が叫ぶ。
「そう簡単に勝ちは譲らないさ。とはいえ、アビリティまで使わされたんだ。そこは誇っていいぜ」
ザックはスポーツドリンクを片手に一夏の頭をポンポンと叩く。
「さ、速く帰って奥さん安心させてやれ」

「まだ違います！」
真っ赤になりながらも一夏は上着を羽織って更衣室を飛び出した。

二学期。現在織斑一夏とシャルロット・デュノアはまたも同室になっていた。これは二人が付き合い始めた事を知った更識楯無生徒会長の悪ノリ（ご厚意）である。
勿論悪ノリ１００％ではない。このまま二人に清い交際をさせておくと将来デュノア社がやってくるであろう横槍に対応出来ないかもしれないというのが原因でもあった。
楯無が危惧した横槍のケースとしては、まず結婚前に来るパターン。即ち、一夏にシャルロットと結婚したくばフランス国籍を取得する若しくはデュノア社の傘下にＩＳ諸共入れというもの。
或いは結婚後にシャルロットを無理矢理フランスに戻す事で一夏も道連れというパターンだ。
「・・・で、一つ目のパターンに対する対策として在学中に結婚させちまえと」
「素敵じゃないですか？」
頭痛を抑えるように米神を揉みながらザックが唸る。対する楯無は相変わらず水のように捉えどころのない笑顔で返した。
「まあ確かに日本なら男子１８歳、女子１６歳から結婚は可能だしな。そこは本人達の自由意志に任せるさ。二つ目の場合は・・・俺が動くべきか？」
そう言ってザックが振ったのは一枚のディスクだった。
「早いですね。まさか本当に出来てしまうとは」
中身はデュノア社社長が取引した麻薬や覚醒剤の目録である。無論でっち上げだが。
「このデータが社長の私的なパソコンから見つかる。同時に自宅か

らも物的証拠が上がる。これで何を言おうと言い訳としか取られず社長は妻諸共破滅する・・・完全にシャルロットを自由にするなら暗殺するのが手っ取り早い訳だが」
因みに物的証拠のほうは色々と貸しを作った売人を通じて調達済みだ。後はGOサイン一つでデュノア社長の邸宅に忍ばせる事が可能な状況にしている。
「穏便な方法としては二人の事を先に世界中に発表する方法ですね。デュノアさんをシンデレラに仕立て上げるんです」
「皆好きだものな。女の子は特に」
因みにザックはあの話を読んで「シンデレラが美人じゃなかったらどうなるんだ？」と疑問を持ち出して母と妹にえらく怒られた覚えがある。
「ええ。愛人の娘で道具として扱われたにも関わらず、見知らぬ土地で出会った王子様に見初められて幸福を掴んだヒロイン。世間を感動させるには十分なファクターかと」
楯無の目も何時しか駆け引きを主とする冷徹な目へと変わっていた。
「それを浸透させちまえば、デュノア社が何をしようと『空気読めカス』という扱いで世論を敵に回すことは確定。後はゆっくり衰えて会社も本人も潰れるのを待つと」
勿論強引な手を使う可能性が出てきたら即消えて貰う。それは言葉にせず、教師と生徒会長は口元を緩めた。

一夏とシャルロットが付き合っている事は既に学校中に広まっていた。一夏は知らなかったが、ザックや千冬は屋上から飛び降りようとしたり虚ろな目で彫刻刀と見詰め合う生徒を止めるのにかなりの時間を費やしていた。

「じゃあ文化祭で俺達が出す出し物を決める訳だが・・・」
黒板に書かれた自分絡みの出し物（一夏とポッキーゲーム、ホストクラブ、王様ゲームｅｔｃ．．．）を見て一夏は顔を引き攣らせた。
「もうちょい真面目に考えろお前等！こんなんやって楽しいのか！？」
「楽しい！私は断言する！」
「織斑一夏は共有財産である！」
「デュノアさんだけ独り占めなんてズルい！」
口々に飛んでくる攻撃に一夏はたまりかねて教壇を叩く。
「あのなあ！」
「だ、駄目だよ！一夏は僕の・・・僕の・・・僕の彼氏なんだから！」
真っ赤になりながらもシャルロットが援護を入れてくれる。
「じゃあ文化祭だけでいいから貸して！」
「駄目ー！」

そんなカオスな状況に終止符を打ったのは、まさかのラウラ発案『メイド喫茶』であった。

「十代女子のバイタリティ恐るべし・・・」
「年寄り臭い事を言うな」
時間は流れて文化祭当日。早朝の魚市場もかくやという賑わいを見せる学園でザックと千冬は並んで見ていた。
「さて、今回のイベントこそ何も起こって欲しくないんだが・・・」

そう言いながら左耳の後ろを？くザックに千冬は溜息をついた。
「お前、ジンクスを返上する気はないのか？」
「ある。けど痒い」
今度は二人揃って溜息をついた。

「あ、一夏さん！」
「よう蘭。しばらくだな」
今回一夏は弾ではなくその妹の蘭にチケットを渡していた。彼女がＩＳ学園を受験したがっていたというのもあるが、箒達に告白された事を切欠に「もしかして蘭も俺の事を？」と考え始めたのが切欠だった。この辺りは今までの箒達の行動をアプローチである事を前提に考えた場合、蘭の行動にも共通点が感じられた事が理由になる。そこでシャルロットに蘭が自分に対しては妙にたどたどしい事や、遊びに行くとどんなラフな格好をしていても大急ぎでお洒落な格好に着替えて来る事などを話して相談したのだ。結果、「絶対一夏の事が好き」。なら傷つけると分かっていても、はっきりシャルロットと付き合い始めた事、そして蘭の気持ちを受け止める事は必要だと考えていた。そのための招待である。

同じ頃。ザックは千冬とも離れて一人学園を巡回ついでに校庭をぶらついていた。
「やっぱ料理部は美味いの作るな」
出来立てのコロッケを食べながら歩いていると、外来らしい一人の

女性とすれ違った。
（・・・うん？）
ほんの微かな違和感。凡そこのＩＳ学園には似つかわしくない『匂い』がその女性から漂っていた。
「・・・？」
女性も振り返る。目線が合った瞬間、二人は同時に袖に隠していたナイフを投擲した。

途中でシャルロットと二言三言言葉を交わし（少し遅れる事。けじめをつける事など）、一夏は蘭を連れて屋上へ上がった。
「あの一夏さん・・・」
「何だ？」
蘭は指を摺り合わせながら尋ねた。
「さっき話してた人はクラスの人ですか？」
「ああ。シャルロット・デュノア、フランス代表候補で・・・俺の彼女だ」
「っ・・・！」
蘭の目が見開かれた。
「そ、そうなんですか・・・綺麗な人ですよね！」
どう見ても無理をしている顔で蘭は笑う。一夏は思わず手を伸ばそうになる自分を抑えながら言葉を続けた。
「実はな、夏休みに鈴達に告白されたんだ。情けない事なんだが、それまで俺は皆が俺の事を男として見てるなんて思ってもいなかった。でも今までのあいつらの行動が全部俺へのアプローチだったんだと分かったら、一つ気づいた事があった」
そう言って蘭の目を見つめる。蘭は目を潤ませながらも一夏を見上げた。

「勘違いだったら嗤っていい。蘭は俺の事が好きなのか？」
「・・・はい。一夏さんの事、初めて会った時から大好きでした」
一夏は俯いた。自分でやった事ではあるが、この少女にこんな顔をさせた自分を殴りたくなってくる。
「その、ごめんな。傷つけて、でも気持ちはとても嬉しいんだ。そこは分かってくれ」
「はい。いいんです・・・一つ、聞いてもいいですか？」
何度も目を拭いながら蘭は言った。
「もし、シャルロットさんと会う前に私が告白していたら・・・付き合ってくれましたか？」
「・・・ごめん。俺はずっと蘭の事を妹みたいに思ってたんだ。だから、すぐには付き合えなかったと思う」
蘭はまだ涙を浮かべたまま微笑んだ。失恋は少女を美しくするのだろうか、太陽に照らされた雫が宝石のように輝いていた。

互いに投擲したナイフをかわし、ザックと女は距離をとる。
「けっ・・・やっぱり同業には見破られるか」
「何が同業だテロリストが。大人しく穴倉の奥でその無駄にデカいケツでも振ってやがれってんだ」
どちらも殺気を隠そうともしていない。ＩＳに手をかけ、二人は同時に動いた。
「出番だアラクネ！」
「超変身！」
一瞬の閃光。スカイファングとアラクネと呼ばれた蜘蛛のようなＩＳが同時に起動していた。
「さあて、第二世代ベースのポンコツが何処まで足掻けるか見てやるよ！来な！」

その声に従うように五人程ＩＳを装着した女性が現れる。
「分かりましたオータム様」
「オータムねえ・・・まあいいか。どうせ死体の名前なんか覚えてもしゃーないし」
軽口を叩くとオータムの米神に青筋が浮かんだ。
「言うじゃねえか三下」
「お前程じゃねえよ雌豚」
嘲笑を隠さず、ザックはタイタンをガンフォームにして構える。
（久々に・・・あっちに戻るか）
大きく息を吐き、一つずつ心の撃鉄を上げていく。一つ上げる都度、自分の心から温もりが消えていくのが分かる。その感触がなんとも懐かしく、心地よかった。

誰がコインを弾いたわけでもないが、ある一定のタイミングで全員が飛び立った。スカイファングの背面から射出された何かが空中で炸裂し、白い煙で周囲を埋め尽くす。
「何だ・・・ちぃっ！ジャミングと煙幕か！」
オータムの苛立った声が聞こえる。兵士の一人は役立たずになったセンサーを無視して肉眼で周囲を探ろうとしていた。
「・・・！？」
前触れもなく額に押し付けられた冷たい感触。それは紛れもなく銃口だった。

一発の銃弾。それが彼女の額を引き裂き、脳を砕き散らした。

一撃で対象を一人始末したのを確認し、ザックは更なる敵を求めて耳を澄ます。どうやら目標はこちらの奇襲を警戒して動き回るつもりらしい。

（煙の動きで大体の動きは掴める・・・そこだ！）

二機目の背後に回りこみ、急降下して背中に飛び乗る。そのまま勢いを殺さず地面に叩き付けた。

「くあああああああ！」

たまらず悲鳴を上げる声を無視してスラスターを噴かす。まるでスケボーかサーフィンのように敵を引き摺りながら後頭部に銃口を当てる。今度は少し威力を高めに設定したせいか、頭が丸ごと吹き飛んだ。

タイタンをアックスフォームに切り替えてすれ違いざまに腰を薙ぐように斬る。それだけで上半身と下半身が真っ二つに分かれた。

「安物使ってるな・・・」

失望したように呟き、ソードフォームに切り替えたタイタンで四機目を左肩から袈裟掛けに斬り裂いた。

あっという間に五人いた部下の内四人が殺された。しかもこちらの攻撃は全く当たっていないのだ。

（ありえねえありえねえありえねえ！相手は第二世代（アンティーク）を

弄繰り回しただけのポンコツだぞ！？それが何でここまで強いんだよ！？）
眼下では最後に残った部下が手足を撃ち抜かれて倒れている。そこにあの男が近づいていた。
「ま、待って・・・」
「・・・」
無言で銃を構える男に、部下は目を見開く。
「夜闇より濃い黒髪にライトブルーの瞳・・・まさか、『漆黒の隼（ダークネス・ファルコン）』！？お願い、助けて！何でもするから殺さないで！」
ガチャリと銃口が眉間に押し当てられる。
「そんな許して！お願いだから助けてよぉっ！」
トリガーにかけられた指に力が込められていく。
「死にたぐな・・・」
銃声。頭蓋骨も血管も脳髄も纏めて挽肉に変えるような一撃は彼女の命を一瞬で刈り取っていた。

「大して面白くもなかったな。次はお前が遊んでくれるのか？」
タイタンをロッドフォームに組み替えながらザックはオータムに尋ねた。
「へっ。今日は見逃してやるよ。覚えてやが・・・っ！？」
《ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》
ワンオフ・アビリティが発動し、逃げようと旋回したオータムの前に回りこむ。
「つれないじゃないか。それに俺は、お前達亡国機業（ファントム・タスク）を見逃す気は少しもないぞ」
そう言いながら腰のホルダーからＵＳＢメモリに似た器具を取り出してロッドに装着した。

《ＵＲＡ・ＲＯＤ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！》
（必殺技はＷか。イカしてるねえ）
そんな事を考えながらロッドを構えると、オータムは焦ったように喚き始めた。
「待てよ！大体何でてめえが私達の邪魔をするんだ！？こんな場所を守る義理でもあんのかよ！？」
「・・・強い奴だと思ってた」
唐突にザックは呟くように言った。
「どんな時も揺らがない、強い女だとずっと思ってたんだ。けど違った」
穏やかな目で話しながらも、槍の穂先は決してオータムの心臓から逸れない。
「本当の千冬（あいつ）は、俺が思ってたよりもずっと弱くて寂しがりやだった。それでもＩＳ学園（この場所）が好きで守りたいと必死で立っているんだ」
「それが、何だってんだよ・・・！」
意図が読めないのか、オータムは苛立ったように唸った。
「あの背中はここの全部を背負うには小さすぎる。だから・・・」
一瞬だけ瞑目し、ザックは目を開いてはっきりと宣言した。
「俺はあいつが、織斑千冬が守りたいと願う全てをあいつごと守ると決めた！」
青い電流にも似たエネルギーが槍に装填され、光を放ち始める。
「その為なら・・・！」
「ぐああっ！」
投擲した槍がオータムの心臓を直撃し、青い六角形のフィールドを形成して彼女を拘束した。
「誰が相手でも、戦ってやる！！」
飛び蹴りの体勢を取り、恐怖に歪むオータムを一気に蹴り抜いた。

「さて・・・これどうしたもんかね？」
ザックが苦笑いしているのは自分が戦った相手の死体処理だった。
流石に生徒達にここで殺し合いをやったというのは知られたくない。
「はろろ～ん♪そんな時は束さんにお任せぶいぶい！」
「神出鬼没なこって・・・」
何処から現れたのか、束は相変わらずニコニコと楽しげだ。
「えへへ～。ざっくんに褒められた～」
「褒めてない褒めてない・・・で、どうするんだ？」
「うん。この人達の死体、ＩＳごと私が持って帰るからごあんしーん！」
全然ご安心出来ない状況にザックが頭を抱える。
「何が狙いだ・・・」
「んーとねー、ざっくんのスカイファングに新しく追加された武器の元ネタのＤＶＤを貸して欲しいかな？」
元ネタというと間違いなく仮面ライダーだ。
「スカイファング、お前が参考にしたライダーのタイトル全部出せ」

仮面ライダークウガ

仮面ライダーアギト

仮面ライダー５５５

仮面ライダーカブト

仮面ライダー電王

仮面ライダーキバ

仮面ライダーＷ

「俺のお気に入り全部かコラァ！」
とはいえ束もこれで貸し借りなしにしてくれるようだし、ザックは溜息交じりにでも応じる事にした。
「ありがとね～。あ、ちいちゃんにもプレゼント持って来たんだ。必要になったら渡してあげてね？ばははは～い」
校庭に散らばっていた死体を量子変換で収納し、ＤＶＤの入った袋を片手に束はザックにそのプレゼントとやらを渡して姿を消した。
「プレゼント・・・ねえ？」

彼の掌には待機状態のＩＳが乗っていた。

ｄ・・・・・・

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅ

第十三話　英雄黙示録（後書き）

次回予告

ＩＳ高速機動バトルレース『キャノンボール・ファスト』、教師陣の願いも虚しく再び迫る亡国機業（ファントム・タスク）の魔手。そこでザックが対峙するのはオータムの敵討ちに燃える一人の女だった。

次回、「光速の宴」なるほどな、大体分かった。

あとがき

どうも、今回賛否両論ありそうなオリ主無双でした。この辺りの謎も今後出していくので。

蘭については、前回の告白シーンにいなかったので一夏にきっちりケジメをつけて貰いました。この子シャルロット以外ではダントツで好きなんですけどね。妹に欲しいわこういう子。いや、弾みたくボコボコにはされたかないですが。

予告通り候補募集を締め切り、決戦投票に移りたいと思います。

候補１：繚乱　機体色：白・ピンク

候補２：吹雪　機体色：白

候補３：蓮華　機体色：紅

候補４：白夜　機体色：白

どれでもお好きな候補に投票して下さい。方法は前回と同じ、感想コメント、活動報告コメント、メッセージ全てです。

締め切りは一週間後の日曜日、１２月４日になります。皆様、ふるってご投票下さい。
結果発表は本編で行いますのでお楽しみに。

第十四話　光速の宴（前書き）

キバット「今回は仮面ライダーキバについてだ。つまり俺について切々と語ろうという訳でぐっはぁ！？」

簪（バットを仕舞い）「キバの特徴は吸血鬼とカボチャがモチーフになってるところ。倒したファンガイアのエネルギーをキャッスルドランに食べさせたり、その中で暮らしているファンガイアの力を借りて戦うなど龍騎や電王に通じる設定があるの」

キバット（帰ってきた）「それをコントロールするのが俺の笛だ。ストーリーは昼ドラだなんだと言われてるが、やっぱり叩かれるのは致し方のないことなのか！？」

簪「じゃあ、Ｗａｋｅ　Ｕｐ！運命の鎖を解き放て！」

キバット「せめてこれくらいは俺にやらせろおおおおお！」

第十四話　光速の宴

トントンとリズミカルな音が聞こえる。一夏が目を開けると、シャルロットがパジャマの上にエプロンを着て朝食を作っていた。
「おはようシャル」
「おはよう一夏」
振り返った恋人はニコリと笑って挨拶してくる。一夏も笑い返して着替えを抱えて立った。

「そういえば、この前更識司令・・・もとい生徒会長が言ってた事どう思う？」
朝食を食べつつ、一夏はシャルロットに気がかりを一つ投げてみた。
「ああ、僕の実家がアレコレやってくる可能性？あるだろうね」
完全に赤の他人を哀れむ態度で答えるシャルロットに、一夏は首を振って言った。
「そっちじゃなくて、その回避方法。ほら、在学中に・・・」
「あ、その・・・一夏が十八歳になるのを待って結婚するって奴・・・？」
途端にシャルロットは真っ赤になりながらトーストを両手で持って縮こまる。
「一夏は・・・嫌？」
「んー・・・いずれはそうなると思うけど、責任取れるような状態じゃないしな。白式が何処の国の預かりになるかも分からないし、それが分からない事には収入とか将来の仕事とかの目処も立たない訳だろ？それに、逃げる理由付けでこういう大事な事を使いたくない」

きちんと考えているらしい一夏に、シャルロットはようやく顔を綻ばせた。
「くぉら万年新婚夫婦予備軍！ミーティングは０９００でしょうが！」
扉を蹴破りかねない勢いで鈴が突っ込んできた。因みに現在の時刻は午前八時、どう考えても間に合う時間帯である。

鈴に急かされるように会議室へと向かった一夏とシャルロットは、何か物々しい雰囲気に思わず後ずさった。部屋には既に箒、セシリア、ラウラ、楯無、千冬と真耶がいた。
「来たか。早速だが本題に入るぞ？先日の文化祭の最中、校庭の一角で銃声を聞いたという声が多数寄せられている」
ラウラは手元の資料を捲りながら告げた。
「尚、その時校庭にはジャミング込みの煙幕が張られており戦闘が行われた事については明白だ。ただこちらではその一切を把握出来ていないため、その時間帯に戦闘行為を行えた者のアリバイを確認している」
そういう事かと一夏は納得して頷いた。
「時間は昼過ぎか・・・俺はその時屋上で蘭と会ってたな」
「ふむ。それを証明出来る第三者は？」
「僕が。一夏が蘭ちゃんを連れて屋上へ行くのは確認したよ」
本来なら恋人や家族の証言はアリバイとして認めないのが定石だが、ここはラウラも余り小うるさく言わない。
「・・・つまり、ここにいる全員にアリバイがあると」
千冬は溜息をつく。こうなると間違いなく戦ったのはザックだ。
（しかし、仮にＩ．Ａ．Ｆ絡みだと逆に訊くのが躊躇われるな・・・

）
自分にだけは隠し事をしたくないと言った彼の感情を利用するのも少しばかり気がひける。
（・・・いや、あいつと私に小細工など無用だ。正面から話し合うのみ！）
小さく拳を握って気合を入れる千冬を、真耶が不思議そうに見上げていた。

「ザックいるか？話がある」
「ああ。ちょっと今手が離せないんで待ってくれ」
そう言ってザックはパソコンのエンターキーを叩いて振り返った。
「待たせたな。何だ？」
「単刀直入に訊く。文化祭の時何をやっていた？」
「料理部のコロッケ食べながら見回りがてらぶらついて、亡国機業（ファントム・タスク）のエージェントを合計6人程ぶっ殺したが」
（やっぱりか・・・）
千冬は頭を抱えそうになるのを堪えて続けた。
「目的は分かったのか？」
「束曰く、白式の奪取が目的だったらしい。因みにスカイファングはラファールベースなんで無視されてた」
「ちょっと待て。何故束の名前が出る？」
「死体処理手伝ってくれたんだよ。代償に俺のコレクションの大半が根こそぎ持ってかれたが」
何故自分を頼らないのかと微妙に理不尽な苛立ちを覚えつつ、千冬は軽く挨拶して部屋を後にした。

「何故・・・何故オータムは死ななければならなかったの？」
某所のマンション。その一室で金髪の女性が唯一残されたＩＳの腕を抱き締めて問いかける。
「・・・漆黒（ダークネス・ファルコン）の隼に出会ったんだ。十分過ぎる理由だろ」
答えたのは黒髪の青年だった。ライトブルーの瞳が冷徹に女性を射抜く。
「空を戦場とする奴等の間じゃ有名だぜ？黒い髪と蒼い瞳を持つパイロットが操る戦闘機に出会ってはならない。出会ってしまえばそれはそいつの最期、誰一人として逃れられない。例えその翼を焼かれようと、眼を潰されようとも奴等は決して飛ぶのをやめない。その瞳に宿した死沼に誘う鬼火（ウィル・オー・ウィスプ）に導かれるまま、生還を忘れた零距離射撃を敢行する・・・出会って即逃げなかった時点であの女は死神に抱かれちまったんだろうさ」
勿体無い。おどけて肩を竦める男に、女性は拳銃を突きつけた。
「おっとよせよスコール。仲間内で殺し合って数を減らそうもんなら上から切られるぜ？」
「分かってるわ。次の出撃は私が出る、貴方はここでＭと遊んでなさい」
軽く口笛を吹き、男は息をついた。
「まあいいさ。ただ一つ忠告しておくぜ？隼とやりあえるのは、隼だけだ」
「覚えておくわ、ザック・ブルード」
ザックと呼ばれた男は唇の端を持ち上げる独特の笑いを返した。

スコールが出かけた後、一室のドアが開いて一人の少女が出てきた。
「起きたかマドカ」
「ええ。スコールはもう？」
ザックと呼ばれた男は頷いてマドカを抱き寄せる。
「賭けないか？スコールが帰って来れるかどうか」
「賭けにならないでしょ？どっちも帰って来れないと思ってるんだから」
千冬そっくりの顔に嘲笑を浮かべ、マドカは男の膝に座ってキスをせがんだ。

キャノンボール・ファスト。それはＩＳの機動性を追及する為の妨害アリレースだった。
「さーて、一夏達は頑張れるかな？」
「さてな」
ザックと千冬は校舎の裏を並んで歩きながら雑談を交わしていた。別に逢引とかそういうのではない。
「じゃま、そろそろゲストを歓迎するか？」
待機状態のスカイファングに手をやりながら振り返ると、そこには殺気を滲ませた金髪の女性が立っていた。
「さしずめこないだのヘボエージェントの縁者か何か？」
「一応同僚という事になってるわ。個人的にも付き合いがあったのだけど、貴方のお陰で台無しね」
ザックはせせら笑いながらも彼我の距離とそこを詰めるまでにかかるであろう時間を計るのを忘れない。
「そいつはどうも。テロリスト風情に詫びと同情の言葉は持ち合わ

せちゃいないんで、代わりに鉛弾を受け取ってくれ」
「どうもお前の台詞を聞いているとどちらが悪役か分からんな」
呆れた口調の千冬に、ザックは「気にするな」と肩を竦めてみせた。
「今回は知覚される前に終わらせる。せっかく文化祭ではトラブルが表に出なかったんだからな」
「やれるならやってみなさい・・・オータム、今仇を討つわ」
「お前じゃ無理だ・・・超変身」
「来い、打鉄」
三人は同時にＩＳを展開し、動いた。

同じ頃、レースも佳境に入っていた。
「こっちでは負けんぞシャルロット！」
箒が紅椿のスラスターを全開にしてトップに躍り出・・・た途端にセシリアとラウラが集中砲火を浴びせて動きを鈍らせる。
「何をするか！今は真剣勝負の・・・」
「競っているのは私達もだという事を忘れるな！」
「仮にも第四世代、集中的に狙わせて頂きますわ！」
どちらもご尤もなだけに、箒も軽く歯軋りする。
「いいだろう・・・ならまずはお前達から・・・！」
「お先に！」
疾風（ラファール）の名に恥じない動きでシャルロットが前に出る。互いに撃ち合っていた他の専用機組が固まる横を、更に一夏が駆け抜けた。
「夫婦でワンツーなんかさせるかあああああ！」
「そこで何で俺を狙うんだお前えええええええ！？」
激烈なデッドヒートに観客の興奮も最高潮に達しようとしていた。

《ＧＵＮ　ＦＯＲＭ》
タイタンをガンフォームへと変形させ、まっすぐにスコールのＩＳを狙い撃つ。しかしその銃弾は金色の繭に阻まれた。
「無駄よ。貴方がどんなに攻撃しようとこの繭は破れない」
「ならば！」
続いて千冬が切りかかるも、これも防がれた。
「終わり？なら今度は私の番ね・・・あの世でオータムに詫びなさい！」
「オータムが地獄にいるって分かってる訳だ。大した女だぜ全く！」
ザックは何を思ったか、腰のホルダーから紫のメモリを取り出してタイタンに装着した。
《ＲＹＵ・ＧＵＮ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！》
「どんなに撃とうと結果は変わらないわ。後は私が引き金を引くだけ・・・」
「知ってるか？」
紫のエネルギーを銃口に集めながらザックは問いかけた。
「そうやって自分の優位をわざわざ口に出す奴ってのは、大体五分以内にボロ負けするって事をさ」
《ＣＬＯＣＫ　ＵＰ！》
「！？」
距離にしておよそ１０ｍは離れていたはずのスカイファングが懐まで飛び込んできた事にスコールの美貌が驚愕にゆがんだ。
「ぐっ・・・あっ・・・！？」
腹部を貫くアームブレードを見つめ、その口から鮮血が零れた。
「この距離ならバリアは張れないな！」
そのまま零距離で叩き込まれるエネルギー弾に意識を奪われる寸前、

スコールはあの男が言った言葉を思い出していた。
（漆黒の隼（ダークネス・ファルコン）に出会ってはならない・・・本当にね・・・）

「すまなかったな。然程役にも立たなかった」
「別にいいさ。お前は手を汚すな」
ザックはスコールの頭になにやらセンサーのような物を取り付けながら答えた。
「それは？」
「脳に特殊な電波を流し込み、記録されている情報を引き摺り出す装置だ。これで何か分かればいいんだが・・・」
そう言ってザックはスイッチを入れた。

《一年生部門、優勝は・・・セシリア・オルコットさんです！》
見事一位の台に立って笑顔のセシリアを、二位の台に立つシャルロットと三位の箒が拍手する。もちろん観客は総立ちで拍手していた。
「まさかあそこでセシリアが刺してくるとはな・・・」
試合の顛末は、鈴から一夏を守ろうとシャルロットがスピードを落としたところに戦っていたラウラと箒が乱入。ラウラの撃ったレールガンが鈴を直撃し、その隙にシャルロットと一夏が漁夫の利を得てリードを広げたセシリアを追撃。しかし途中で白式がガス欠を起こして一夏まさかのリタイア、ラウラを最大戦速で振り切った箒が追ってくるも、何とか二位を保持してシャルロットがゴール。そん

なオチであった。
「それ以前にラウラ・・・あんた覚えときなさいよぉ・・・！」
「勝負は時の運だ。まあ許せ」
壇上に立っていたシャルロットが一夏に気づいてパチリとウィンクする。一夏はサムズアップで応えた。

「うーん、やっぱりちーちゃんの反応速度に打鉄が追いつけてないな～。あの程度のバリアなら、暮桜で簡単に破れた筈なんだけど・・・」
自前のラボにて。束はザックと千冬がスコールと戦う姿をモニターしていた。
「ざっくんいつになったらちーちゃんにアレ渡してくれるんだろ？・・・ん？」
背後で物音がした。
（まっず侵入者？）
もし諜報機関とかなら少し分が悪い。束はそう考えて設備を量子変換して窓から飛び出した。

外はいつの間にか雨が降っていた。シールドで雨をよける訳にもいかず、束はずぶ濡れになりながら手近な公園に駆け込んだ。
「はぁ、はぁ・・・ここなら多少は安全かな？」
胸元に流れ込んだ雨水だけでもどうにかしたいと思っていると、一人の男が近づいてきた。

「あ♪おーい、ざっ・・・くん・・・？」
「死ね」
咄嗟に身を翻して駆け出そうとした時、冷たい感触が痛みと共に彼女の背中へ潜り込んできた。
（あ・・・死・・・ヌ・・・？）
続いて銃声が二発響き、右肩と脇腹が火傷をしたように熱くなる。
「ちー、ちゃん・・・ほうきちゃん・・・ざっく・・・ん・・・たすけて・・・」
水溜りに叩きつけられるように倒れ、束は意識を手放した。

人を殺した夜は無性にアルコールで喉を焼きたくなる。そんな欲求を満たすべく、ザックは近場のコンビニへバイクを走らせていた。
「ＦＵＬＬ　ＦＯＲＣＥ誰よりも早く、走るのが条件♪・・・ん！？」
鼻腔を突然突いた鉄臭い臭い。血の臭いに気づいてザックは慌ててバイクを止めた。
「近い・・・こっちか！？」
応急処置キットを取り出して公園に駆け込む。そこに倒れていた人物はザックを驚愕させるのに十分すぎた。
「束・・・おい！しっかりしろ！！」
彼女の立場を考えると病院へ連れて行くのは得策とは言い難い。背中のボタンを外して患部を露出させつつザックは思考を巡らせる。
（やむをえん・・・ＩＳ学園に連れて行くしかないか）
ミネラルウォーターで傷口を洗い、一度包帯を巻いてからバイクに乗せる。幸い銃創は前後二つずつあったので弾丸は貫通しているらしい。そこだけが救いだったとザックは思った。

. . . .

To Be Continued...

第十四話　光速の宴（後書き）

次回予告
寮の自室で束を匿うザックと千冬。やがて目覚めた束はザックによく似た男に襲われたと話す。その言葉が示す真実とは？
それと時を同じくして、ザックは楯無から妹の専用機開発を手伝って欲しいと頼まれる。次回、「簪超強化計画」人を守るためにライダーになったんだから、ライダーを守ったっていい！

あとがき
はい。束さんまさかの大ピンチでした。ザックによく似た男、マドカとの関係、次々と増える謎をとりこぼさないよう頑張ります。
次回は簪の話もですが、相当に悪ノリするのでお気をつけを。これをやりたいが為にオリ主をライダーオタクにしたといっても過言ではないので。

現在千冬専用機名称決戦投票開催中です。まだどれも発案者の一票しか入っておりません。皆様の投票を待っています。ではでは。

第十五話　簪超強化計画（前書き）

キバット「仮面ライダーディケイドは平成シリーズのお祭り作品として製作された仮面ライダーだ。その為歴代の仮面ライダーが次々と登場する展開になっている」

クラリッサ「うむ。確かにスーツは登場したが、オリジナルの俳優やストーリーを踏襲した訳ではないのだったな」

キバット「その辺りは予算の兼ね合いもあっただろうし、俳優自身の都合もあっただろう。クウガのオダギリジョーはライダーを演じた事自体を否定しているし、佐藤健は事務所の都合で特撮自体出演出来ないからな」

クラリッサ「とはいえ、ウルトラマンメビウスのようにかつての俳優をそのまま起用して大成功した前例があっただけにファンの失望も大きかったようだな」

キバット「挙句最強形態であるコンプリートフォームのデザインがな・・・アクターの高岩さんはえらく苦労されたらしいぞ。ではそろそろ・・・」

クラリッサ「・・・言わないのか？」

キバット「（感涙）で、では俺が・・・」

クラリッサ「言わないのなら仕方ない。全てを破壊し、全てを繋げ！」

キバット「OTL」

第十五話　簪超強化計画

（さて、とりあえずＩＳ学園に連れ帰りはしたが・・・）
束の存在を学園に知られる訳にはいかない。最低限千冬と箒辺りには話を通しておくべきかと考え、ザックはとりあえず束を自室に連れて行った。
「フーッ！」
「落ち着け。すぐ臭いも消える」
血の臭いに警戒するアポロを宥めながら束をベッドに横たえる。
「・・・」
早急に手当てしなければならないが、ここで自分がやった場合確実に日本刀（下手すると紅椿も）が飛んでくる。
「・・・千冬起きてるといいが」
携帯電話を取り出し、ザックはボタンを押した。

「・・・ん？」
自室でまどろんでいた千冬は、枕元の携帯が鳴ったのに気づいて目を開けた。
「何だザック。こんな時間に」
《悪いとは思ったんだがな。さっき外に出たらちょいと厄介な兎を拾っちまってさ》
千冬は溜息をついた。
「また拾ったのか？お前の部屋は何時から動物園になったんだ」
《ただの兎ならわざわざかけたりしねえって。言ったろ？ちょいと厄介だって。多分お前も見たことのある兎だ》
（ちょいと厄介で・・・私が見た事のある兎・・・？いや、それ以

前にこいつが回りくどい言い方をする時は確実に傍受を恐れている時だ。・・・まさか！？）
動揺を瞬時に抑制し、千冬は起き上がって寝巻きの上にジャージを羽織る。
「まあそこまで言うなら少しくらい見てやるか」
《お、意外と気になったか？》
「抜かせ」
軽口を叩き合って電話を切った。

「・・・やっぱりか」
呆れた口調ながらも千冬の顔色は余りよくない。
「とりあえず見つけた時に応急処置はしたが、まだ本格的な治療には入ってない。ってーか男の俺がそこまでやる訳にはいかんだろうし・・・」
「軍にいた時は女性隊員の怪我もお前が治療してただろうが。私が許す、やってくれ」
ザックは珍しく固まった。

極力胸には目をやらないようにしつつ腹の銃創を縫合（弾が入っていない事は携帯タイプのレントゲンで確認済）、背中の傷も同じように縫ってザックはようやく一息入れた。
「はぁ・・・すまんな箒も。わざわざ叩き起こして輸血頼んだりして」
「いえ、それで姉の容態は・・・？」
鎮痛剤も打ったためか、幾分穏やかな寝顔になっている束を見つめ

て箒は呟くように尋ねた。
「とりあえず夜が明けて無事だったら大丈夫だろう。雨の中でどれだけ出血してたのかが鍵だな」
大分血を抜かれた為に箒も疲れたらしい。安心した顔でそのまま床で眠り始めた。
「私はお前の欠勤を報せておこう。心配するな、ちゃんとフォローはしておく」
「なあ千冬、微妙に機嫌悪くないか？」
「何を言っている？そんな事がある訳ないだろう？」
（わーお微妙どころか無茶苦茶怒ってるよこの人。何でだ？束を連れて帰ったのがマズったか？）
千冬は話にならないと思ったのか、鼻を鳴らして部屋を出て行った。
「・・・立ち入り禁止の札は下げとくか。それと」
部屋の隅で威嚇していたアポロとルナに近づく。
「しばらく引っ越すか？」

アポロとルナを一夏に預け（何故自分じゃないのかと鈴が暴れたが）、束を部屋に匿うようになってから一週間が過ぎた。
「んあ・・・」
「ようやくお目覚めか。アリスが目を覚ましたらエンディングなんだがな」
とろんとした目で周囲を見回し、束はザックに目を留めた。
「ざっくんだぁ・・・」
「さて、腹が減ってるなら何か作るが・・・あ、箒のほうがいいか？」
千冬と箒の携帯に「目が覚めた」とだけメールしながらザックは尋ねた。

「んー・・・箒ちゃんのお粥がいー・・・・」
「分かった。伝えとくから寝とけ」
にへらっと笑って布団を被りなおす束を眺め、ザックはふとこいつはこんなに幼く笑う奴だったかと考え込んだ。

同じ頃、住人が二人に減ったマンションでマドカはコーヒーを淹れていた。
「・・・遅い」
夕食当番の男（というより料理が出来る人間がもう彼しか残っていない）を待っているのだが、待てど暮らせど買い物から帰って来ない。
「全く・・・今日はハンバーグにすると言っていただろうが・・・」
ぶつくさと言いながら砂糖を入れようとし、男が何時もブラックなのを思い出してそれを止める。
「よし、今日こそ・・・っ！」
ブラックを飲もうと一口口に入れ、結局砂糖を入れた。
「ただいまーっと」
のんきな声に、マドカは思わず「遅い！」と怒鳴りながら玄関へと走った。
「悪い悪い。良い挽肉が売り切れててな、隣町まで行ってた」
「なら別に他の料理でも構わん！」
「・・・お前がハンバーグがいいって言ったんだろうが」
マドカは呻いて俯く。
「ま、そういう訳だから早速作るとするさ」
笑ってキッチンへ向かう男に、マドカはその後を追いながら声をかけた。

「ところでザック、ＩＳ学園のザック・・・あああもうまどろっこしい！」
「普通にオリジナルでいいぞ？」
さらりと言われ、マドカはコホンと咳払いした。
「それだ。そのオリジナルというのはどうも気に入らん。お前も何か自分だけの名前を持つべきだ」
「名前ねえ・・・サーティーン」
「それは貴様の番号だろうが！もういい私がつける！」
ザックと呼ばれている男はフライパンでたまねぎを炒めながら笑った。
「そりゃいい。期待しているぜ」
「う、うむ。任せろ・・・」
考え込むマドカに笑いを零し、男は料理に意識を戻した。

「俺と同じ顔！？」
箒特製の鮭粥を食べ終え、何故自分が大怪我をしたのかを語った束の言葉にザックは飛び上がらんばかりに驚いた。
「束、冗談では済まさんぞ」
「冗談なんかじゃ言わないよこんなの。私だって訳が分かんないんだから」
珍しくおどけた空気もない束は頬を膨らませる。
「しかし姉さん、スカイファングの座標履歴を調べれば先生が学校にいた事は明白では・・・」
「そこなんだよねえ。ねえざっくん。今までに何か遺伝子情報を何処かに漏らすような事した？」
言われてザックは考え込む。

「今日日遺伝子なんざそれこそ髪の毛からでも採取出来るご時勢だぜ？心当たりが多すぎて逆に特定不可能だ」
「一番有り得るのはクローンだからね。あ、一応言っとくと私じゃないよ？ざっくんの遺伝子はそんな無粋なやり方よりも私のお腹の中にへぶらっ！？」
「「いい加減にしろエロ兎！」」
ザックと千冬の声が綺麗にハモった。ついでに束の頭に拳骨を落とす動きもシンクロしていた。
「話を戻すとだね、恐らく相手は亡国機業（ファントム・タスク）。ざっくんは彼らと何かしらの因縁でもあるのかな？」
ザックは小さく溜息をついた。
「詳しくはいずれ話すが・・・今イエスかノーかで答えるなら、イエスだ」
誰も何も言えない、或いは言わないまま夜は更けていく。

翌朝。ザックと千冬は一日交代で束を看病する事に決め（箒曰く、「寝込むと途端に一人でいるのが駄目になる」）、今日は千冬が看病していた。
（授業が終わったら買い物だな。一夏達にアポロとルナの餌を差し入れて、束には蜜柑の缶詰と桃缶とってそれは風邪だろうが！）
「先生？」
背後から声をかけられるも、ザックは気づかず考えを巡らせていく。
（服の替えを早急に用意する必要があるな・・・これは千冬に任せるか。俺が女物の服買いに行ったら即通報だし、ってーか束の奴なんで俺のYシャツ勝手にパジャマにしてやがんだ？お陰で千冬の目がすげー怖いんだが）

「先生ってば」
（まさか千冬に限ってやきもち妬くなんてこたあ・・・）
「先生！」
背中に衝撃を受け、ようやくザックは振り返った。
「何だ楯無か。どうした？」
「なんか傷つくんですけどその対応」
「悪い。で、何かあったのか？」
楯無は感情を切り替えて頷いた。

「・・・妹の専用機開発？」
「そうなんです。私の妹・・・簪というんですが、あの子の機体は倉持技研究所が作ってるんです」
「ちょっと待て。確かそこって一夏の白式にかかりきりじゃなかったか？」
楯無は少し苦い顔で頷いた。
「まあ、教え子がスタートラインにすら立ててないのは問題だな。了解。この程度のテコ入れなら上も贔屓だなんだとは吼えんだろ」

昼休み。ザックは簪のデータを読みながら四組へとやって来た。
「よ」
「あ、先生！」
「どうしたんですか？担当じゃないのに・・・」
口々に近づいてくる生徒を手で制し、ザックは用件を伝えた。

「更識はいるか？ＩＳの事で話があるんだが」
「・・・はい」
眼鏡をかけた少し表情に乏しい少女が歩いてきた。
「ここじゃなんだ。整備室に行きながら話すか」
「分かりました」
どうにも無口な子である。ザックは内心頭をかきながら目的地へと歩いた。

小柄な簪と長身のザックではどうしても歩幅に差が出るため、ザックの横を簪が小走りについていく事になる。
「もう少しゆっくり歩くか？」
これでも大分抑えているのだが、ザックは申し訳なさから提案した。
「いいです・・・」
どうにも素っ気無い。ラウラでももう少しとっつき易かったと思いつつ、ザックは本題を切り出した。
「単刀直入に言おう。お前の専用機を完成させるのに俺も協力させてくれ」
「一人でやりますからいいです」
楯無から聞いていた通り、かなり強情な性格らしい。
「一応言っておくが、拒否権はないぞ。ていうか周回遅れどころかスタートラインにすら立てていない生徒を放置してるとなると俺や他の先生方が上から雷落とされんの。俺だっておまんま喰いあげるのは嫌だしな、ささやかな善意を理由に協力させてくれと言うのより納得出来ると思うが」
「・・・分かりました」
凄く嫌そうな雰囲気を全身から噴出させながら簪は頷いた。
「よし。じゃあさし当たってどんな機体にするかだが・・・」
簪が無言でデータをよこす。苦笑を禁じえないまま、ザックは目を

通していく。
「ミサイル一斉発射を切り札にした射撃戦仕様か。Ｇ３－Ｘかデルタかギャレンか・・・」
「ゾルダ・・・です」
「お、それが一番近いな。確かに荷電粒子砲もある訳だし、後はガドリングがあれば完璧か」
「薙刀も・・・装備しているので、ドラゴンフォームやストームフォームも・・・」
だんだんと饒舌になる簪と会話していたザックだったが、ややあって違和感に気づいた。
（何でさっきから俺達会話が成立してるんだ？俺ずっとライダーネタ出しまくってるんだが・・・）
さり気無く簪に目をやるが、彼女はきょとんとした風に見上げてくるだけだ。
（少しカマかけてみるか・・・？）
「俺が思うにストーリーで言えばクウガかアギトだが、デザインで言えばキバだし、何よりアクションのキレで見るなら５５５の右に出るのは・・・」
「Ｗを忘れてます。ストーリーもデザインもアクションのキレも最高です・・・！」
確信した。彼女は同類だと。
「よし握手だ更識。お前と俺はどうやら同じらしい」
簪も今度は素直に握手に応じた。

「俺のスカイファングには既にＷのガイアメモリと電王のデンガッシャー、カブトのクロックアップにエクシードギルスの両腕、挙句

ファイズポインターが搭載されてる訳だが・・・」
「夢のＩＳ・・・」
目を輝かせる簪に苦笑しつつ、ザックは部屋から持ってきたＤＶＤを取り出す。
「まだスカイファングが使ってないのが龍騎と剣（ブレイド）、響鬼にディケイドか。どうする？」
「龍騎は絶対・・・です。後・・・うーん・・・ギャレンで」
ザックは軽く頷いてデータを組み立てていく。
「じゃあ待機状態をギャレンバックルで、武装を龍騎系のカードにしていくか？どんなカードを使いたいか言っといてくれ」
「えっと・・・ソードと・・・ストライクと・・・シュートと・・・コンファインと・・・」
「コンファインか。じゃあ電子戦能力を強化しとかないとな。それで相手のＩＳコアにハッキングして武装の量子変換（インストール）を強制解除して・・・」
物騒な事を呟きながらザックはデータを構築していく。
「アクセルと・・・ファイナルはゾルダみたいなので・・・」
「エンドオブワールドか。よっしゃ、システム周りは俺が構築するからハード面の調整は任せるぜ？」
「はい・・・！」
嬉しそうに簪は頷いた。

その夜。ザックは自室でパソコンと睨み合っていた。
「量子変換（インストール）したミサイルランチャーを左右に展開させて一斉発射・・・あー、マルチロックシステムも調節しないとな。頼まれちゃいないけど、一応『アレ』も入れておくかね？」

「ねーざっくん、束さんにも見せて欲しいなそれ♪」
一瞬ザックはためらったが、束の知恵も借りれるなら更に強力な機体を作れるかもしれないと思い承諾した。
「どれどれ・・・おおおー！カードで戦うなんて斬新だねえ。コンボシステム？組み合わせで更に強くなるんだ！凄い凄い！こんなの考えた事なかったよ～」
楽しそうにシステムを弄り始めた束に苦笑しつつ、ザックは冷めかけたココアを飲んだ。

二週間後。ザックと簪は第五アリーナに立っていた。
「じゃあ始めるか」
「はい」
お互いに距離を取り、二人は同時に身構えた。
「超変身！」
閃光と共にスカイファングが装着される。
「・・・」
簪はバックル型の装置にクロスした二丁の銃が描かれたカードを差し込む。それを腹部に持ってくると、バックルから伸びたベルトがしっかりと彼女の腰に装置を固定した。
「変身！」
その叫びと共にバックルの端を軽く叩く。
《ＴＵＲＮ　ＵＰ！》
その音声と共にカードを入れた部分が裏返り、トランプのダイヤを象った意匠が表に出る。それと同時に彼女の体にもＩＳが装着されていた。その姿はかつて簪が作っていた打鉄二式とは大きく異なっており、その色は鮮やかな翠色。右手にはギャレンラウザーをモチ

ーフにした銃、左腕には大型のビームシールドが装備されている。

「さて、システムのテストと行くか」

「行きます！」

簪は張り切って腰のバックル（カードデッキとしての機能もある）から一枚のカードを抜き取った。そこに描かれた意匠は柄で結合した二本の剣。そのカードを銃身の下から引き出したスロットに差し込み、そのまま仕舞う。

《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》

その電子音声と共に簪の手にはカードに描かれたものと同じ剣が握られていた。ただの剣では無論なく、刀身にビームフィールドを形成する事で装甲やシールドを斬り裂く能力が一段と上がっていた。

「私と・・・一緒に戦って、翠煉（すいれん）！」

剣を大きく振りかぶり、簪は鋭く叫んだ。

・・・・

Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．

第十五話　簪超強化計画（後書き）

次回予告

遂に完成した翠煉。開催されるタッグマッチトーナメントで簪が組む相手はラウラだった。そして相手はあろう事か、箒と楯無。果たして簪は姉を越える事が出来るのだろうか？次回、「果てなき希望（ゆめ）」やはりそういう事か！

あとがき

どうも。今回で千冬専用機名称決選投票は予告どおり締め切ります。感想コメントや報告コメントでの投票はありませんでしたが、メッセージでの投票はちらほらあったためそこから集計しました。登場を楽しみにしてて下さい。ではでは。

第十六話　果てなき希望（前書き）

キバット「仮面ライダークウガは、平成シリーズの第一弾だ。その分非常に根強いファンも多いまさに名作と呼べる作品だろう」

弾「だよなあ。マイティ、ドラゴン、ペガサス、タイタン。さらにライジングとアルティメットだ、まさに最強だぜ」

キバット「ストーリーも完成されており、グロンギの造形などでも満点に近い評価を得たクウガだが・・・しかし悲しいかな、欠点がない訳じゃない。しかも作品の外だ」

蘭「何それ？」

キバット「以前から度々言っているが、クウガ信者の暴走だ。絶対視する余りに他のライダー、特にアギトや電王だな。その辺りのライダーを徹底的に叩き、他のライダーファンの顰蹙を買い捲っている」

弾「何だそりゃ。仲良くやれねえのかよ」

キバット「勿論クウガを愛する全ての人間がそうだとは言わない。だからこそあえてファンと信者を分けて表現しているのだしな」

蘭「内容は少しハードだけど、これぞ仮面ライダーって感じね。それでは、Ａ　Ｎｅｗ　Ｈｅｒｏ．　Ａ　Ｎｅｗ　Ｌｅｇｅｎｄ！」

弾「発音いいなお前・・・」

第十六話　果てなき希望

「さあ始まりましたＩＳ学園タッグマッチ！果たしてどんな血湧き肉踊る戦いが見られるのでしょうか！？実況と解説は私、放送部部長・加持雲雀と・・・」
「整備科の黛薫子でお送りします♪」
尋常でない盛り上がりを見せるアリーナにて、ザックは缶ジュースを片手に教師席にいた。
「ザック。済まないが部屋で観戦してくれるか？束を野放しには出来ん」
「だな。んじゃちょっくら行って来る」
申し訳なさそうな千冬に手を振り、自室へと向かった。

同じ頃。控え室で簪は翠煉を見つめていた。
「こうして肩を並べるのは初めてだな。ラウラ・ボーデヴィッヒだ。苗字は読み辛いだろうから、ラウラで構わん」
「そう・・・更識簪、簪でいい・・・」
そのまま会話が途切れる。ラウラは少し悩んでから口を開いた。
「では簪。この機体だが、教官が携わったのだったな？」
簪はコクリと頷いた。
「たくさん話して、たくさん考えて、そして出来た機体・・・」
「当てにさせて貰おう」
ラウラが笑うと、簪も小さく微笑んだ。
「ザックさんも見てるから、負けられない・・・！」
「む？教官を名前で呼ぶのか？」

簪は頷いた。
「先生じゃなくて、同志(なかま)だから・・・」
ラウラは訳が分からず首を捻った。

「さて束・・・最近の口癖になってるんだが・・・」
自室に戻ったザックはこめかみを押さえながら大きく息を吸い込んだ。
「俺のYシャツを勝手に着るのはもういい！でもせめて下に何か穿け！それから俺のベッドで物食うな！しかもそれ限定版のカスタードプリンだろうが！」
「うんおいしーよー」
裸にYシャツという中々に刺激的な格好でスプーンを銜えたままニコニコと笑う束に、ザックはいい加減毒気を抜かれて溜息をついた。
「はぁ・・・もういい。タッグマッチの中継つけるか？」
「見る見る！私とざっくんで作った翠煉の出番は？」
ザックはぼそりと簪を入れろと突っ込みながら電源をつけた。

「第一試合のカードを発表します！赤コーナー、ラウラ・ボーデヴィッヒとシュヴァルツェア・レーゲン、更識簪と翠煉です！」
雲雀が興奮気味に叫ぶ。
「片やドイツが誇る停止結界と距離を選ばない汎用性を売りとして

いますが、翠煉のスペックは未だ謎に包まれております！この戦いでそのベールは脱ぎ去られるのでしょうか！？」
ラウラと簪はデモンストレーションを兼ねてアリーナを一周する。それだけでも観客のボルテージは上がりっぱなしだ。
「対する青コーナー、篠ノ之箒と紅椿、更識楯無とミステリアス・レイディです！世界で唯一の第四世代ＩＳとＩＳ学園最強の名を持つ霧の淑女、そのコラボレーションをご堪能下さい！」
二人が着地するとほぼ同時に箒と楯無が飛び出す。簪達と同じように一周して着地した。
「ルールは実にシンプル、先にＳＥが尽きて全滅したパーティの敗北。或いは降参で決着です！」
四人は一斉に身構える。

「第一試合、ＩＳファイトォォォォォ・・・ッ！レディィィイイイッ、ゴオオオオオオ！」

《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》
簪は銃にカードをベントインし、双剣を呼び出す。ラウラが突っ込んできた箒をＡ．Ｉ．Ｃ．で停止させるのを確認して楯無に切りかかった。
《おっと、まずはそれぞれタイマンを張って様子見というところでしょうか？それにしてもボーデヴィッヒ選手、のっけからカードを

切ってきましたね》
《紅椿はそのスペックで一歩先を言ってますから、どうしてもそうなるでしょう》
実況と解説には好きに言わせておけばいい。簪は剣を回転させて一気に楯無目掛けて振り下ろした。
「なかなかね、けど・・・！」
楯無はナノマシンで制御された水のドリルランス、《蒼流旋》を呼び出した。
（実戦で上手くいくかどうかテストしないと・・・）
数度切り結び、一度距離をとる。カードデッキから取り出したカードにはヒビの入ったガラスが描かれていた。
《ＣＯＮＦＩＮＥ　ＶＥＮＴ》
電子音声と共に楯無の手に握られた蒼流旋が粒子となって消える。楯無は流石に驚いたのか、慌ててシステムをチェックして小さく舌打ちした。
「武装システムの強制ロック・・・！？やってくれるわね！」
《これは！？翠煉のワンオフ・アビリティなのでしょうか？ミステリアス・レイディの武装が強制解除されましたあああああ！》
《恐らく電子戦装備の賜物でしょう。中々面白い機体ですね》
簪とザック、束しか知らない事だが、コンファインの効力は精々五分かそこらしか持たない。その間にどれだけダメージを与えられるかが鍵だった。
「主導権は渡さない・・・！」
《ＳＨＯＯＴ　ＶＥＮＴ》
次にベントインしたのは巨大な四門の砲が描かれたカード。簪の両肩と腰に合計四門の砲が装備された。
「まっず・・・！」
「楯無先輩！」
四つの砲口から放たれた荷電粒子砲が割って入った箒を直撃した。
「ぐぅぅ・・・っ！」

「済まん簪！振り切られた！」
「大丈夫・・・纏めて叩くから・・・」
そう言われ、ラウラの頭に電球が灯った。
「そういう事か・・・よし、止めるのは私に任せろ！」
終始簪・ラウラペアのペースで終わる、そう誰もが思った時だった。

突然ザックは首の後ろに電流のような衝撃を覚えて飛び上がった。
「どしたのー？」
「何か分からないが・・・来るぞ！」

唐突に現れたそれは二体のＩＳだった。
「あれは・・・イギリスのサイレント・ゼフィルスと、スカイファング？」
それも第二形態の時のものだ。だとすればザックではないのは確実だが、果たして彼以外の人間があんな趣味丸出しの機体を好んで使うだろうか。
(いや、一人やりかねないのがここにいたな)
横目で簪を見やる。当の本人は厳しい目で砲身を構えなおしていた。
「姉さん・・・そろそろ凍結は・・・解除されてる筈」
「え？あ、本当だわ・・・よしっと」
蒼流旋を呼び出し、楯無は軽く素振りをした。
「できればもうあれはやめて欲しいかな？」
「・・・・・・・・・・・・嫌」

「そこすっごい悩んだ上に拒否しないでー！」
箒は苦笑しつつも絢爛舞踏を発動させて失ったＳＥを回復して身構えた。
「さて、そこのＩＳ。今は試合中でな、できれば観客席なりで観戦していて欲しいのだが？」
どちらも仮面で上半分を覆っている。隠されていない口元が嘲笑を刻んだ。
（どうする・・・？避難はまだ全部は済んでいないが？）
ここで初めてしまうか、一瞬ラウラが迷った時だった。
「っ・・・いけない！」
簪がスカイファングと客席の間に割り込むのと、スカイファングのガドリング砲が客席目掛けて火を噴くのは殆ど同時だった。
（間に合って・・・！）
《ＧＵＡＲＤ　ＶＥＮＴ》
実体化した巨大な盾を掲げて銃弾を防ぐ。ビームシールドは強力だが、ＳＥを少なからず消耗してしまうため余り使いたくない。
「・・・中々速いな。今ので十五人は殺せる算段だったんだが」
ラウラ達の目が見開かれる。その声はザックそのものだったからだ。
「違う・・・」
自分でも驚く程冷たい声が出た。簪は構わずに目の前の男を睨んだ。
「貴方はザックさんじゃない。彼の声で、それ以上嘶かないで・・・不愉快だから」
「意外に吼えるな。いいだろう・・・俺の名はキョウ、俺が誇りを持って名乗るのはそれだけだ」
キョウは辺りを見回し、既にアリーナには簪達しか残っていない事を確認して頷いた。
「奴を殺すつもりで来たが気が変わった。お前達と遊んでやろう」
「へえ、面白い冗談ね？」
蒼流旋が唸りを上げ、楯無の怒りを体現した。
「・・・来い」

今まで黙っていたサイレント・ゼフィルスの操縦者が言った。
「私とキョウには決して勝てないと教えてやろう」
ビットが動き出し、同時に箒とラウラも飛び出した。

同じ頃、一夏達は校内のあちこちから進入していた無人機の相手に追われていた。
「くっそお！何体いるんだこいつらは！」
雪片弐型と雪羅・ブレードモードの二刀流で七体目の無人機を斬り伏せて一夏は苛立ち紛れに怒鳴った。
「とにかく今はこいつらを後者に近づけないようにしないと・・・！」
教師部隊も応戦しているが、とにかく数が多い。シャルロットは既に全弾撃ち尽くしたアサルトライフルとバズーカを投げ捨て、ブレードで近接戦闘を挑んでいた。
「シャル、無理なら遠慮なく下がれよ？生徒の誘導に回ってくれても・・・」
「駄目だよ一夏」
何とか恋人を危険から遠ざけようとする一夏に、シャルロットは笑って首を振った。
「職権乱用。一夏は隊長なんだから、僕一人を贔屓するような事しちゃ駄目だからね？」
「・・・分かった」
微妙に不貞腐れた顔になる一夏が愛おしくなり、シャルロットはまた笑った。

「うおらあ！」
アックスフォームのタイタンで一気に三体纏めて撫で斬りにする。
マキシマム・ドライブはエネルギーの消耗が激しいため余り使いたくはなかった。
「束！これお前がやったのか！？」
《ざっくん酷い！ここ半月束さんはずっとざっくんと同棲生活だよ！？翠煉以外にＩＳ弄ってないのはざっくんが一番よく知ってるでしょー！？》
「ああよく分かってるとも！実際お前がやったならもうちょい手強いわな！それから同棲言うな！」
言い合いながらもザックは更に五体の無人機を血祭りに上げる。

聞き覚えのある音楽が聞こえてきたのはそれから数分後の事だった。

二体のＩＳは巧みな連携でこちらを翻弄していく。ＳＥ自体は紅椿の絢爛舞踏で回復出来るとはいえ、搭乗者の疲労まで回復出来る訳ではない。
（何か、何か手は・・・？）

望みを託すように簪はカードを引き、目を丸くした。
「何これ？」
ト音記号が一つ書かれただけのカード。メモが貼り付けてあり、「クライマックスで使おう」と可愛らしい丸文字で書いてあった。
「ザックさんじゃない・・・？」
何か強力なカードかもしれない。そう思い簪はそのカードをベントインした。
《ＳＯＵＮＤ　ＶＥＮＴ》

果てなき希望（ゆめ）

突然翠煉を中心に音楽が鳴り始めた事に、戦っていた全員が固まった。
「え？簪ちゃん、何これ？」
「戦闘中に音楽だと！？何が起こっているんだ！」
「龍騎の処刑用ＢＧＭか。なんともいい選曲だな」
上から楯無、箒、ラウラの反応である。
「処刑用・・・分かった・・・！」
簪は大きく頷いてもう二枚のカードを取り出した。
《ＡＣＣＥＬＥ　ＶＥＮＴ》
《ＳＷＯＲＤ　ＶＥＮＴ》
二枚のカードを同時にベントインし、コンボを発動させる。
「疾風（ブラスト）・ラプソディ の狂詩曲！」

クロックアップと同等のスピードで四方八方から同時に斬り付ける。
それに合わせて楯無も援護射撃を始めた。
「ほらほら箒ちゃんもラウラちゃんも。簪ちゃんに美味しいところ全部持ってかれちゃうわよ？」
「それは困ります！」
「唯でさえ出番がないというのに！」
慌てて箒とラウラも飛び掛る。その猛攻にキョウとサイレント・ゼフィルスは同時に下がった。
「少し舐めすぎたようだな・・・流石に分が悪いか」
「キョウ、ここは退くぞ」
それだけ言い残し、二機のＩＳは姿を消した。
「勝ったとは言い難いけど、生き残れたわね・・・」
肩で息をしつつ、楯無は苦笑した。
《簪聞こえるか！？》
ザックから通信が入った。
《今学校に侵入したゴーレムもどきをそっちへ誘導している。纏めて叩き潰すぞ！》
ピンときて簪は頷いた。
「何をする気だ？これ以上出番を持って行かれるのは正直辛いんだが・・・」
「・・・ごめんなさい」
「奪う気満々か！？」
割と本気の入ったラウラと箒の絶叫に簪は申し訳なさそうに微笑んだ。

それから五分後、インフィニット・ファルコン小隊と教師部隊が無

人機を誘導してアリーナに入って来た。
「皆、私の後ろに・・・」
味方が全員自分の後ろについたのを確認し、簪はカードデッキから巨大な弓を構えた天使のカードを取り出した。
《ＦＩＮＡＬ　ＶＥＮＴ》
彼女の目の前に巨大な砲台が姿を現し、その周囲にもミサイルランチャーやレールガンがこれでもかと並ぶ。簪は砲台に銃を接続して狙いを定めた。
「エンドオブワールド！」
トリガーが引かれると同時に荷電粒子砲、ミサイル、レールガンが一斉に火を噴いた。
「・・・何この過激武器」
唖然とした顔で楯無が呟く。これは恐らく簪とザックを除く全員の意見であろう。そのザックは満足げに全滅した無人機の残骸を眺め、一夏達に向き直った。
「紹介しよう、ファルコン０５（ゼロファイブ）・・・更識簪だ」
「よろしく・・・お願いします・・・」
何時もどおりぽつぽつと、しかしその唇にははっきりと微笑みを刻んで簪は頭を下げた。

「更識簪、か・・・」
逃走しつつ、キョウは確かめるように呟く。
「なかなか、楽しめそうだな」
楽しげに笑う彼のわき腹に、サイレント・ゼフィルスの操縦者―マドカは割りと本気のパンチを入れた。

. . . .

To Be Continued.

第十六話　果てなき希望（後書き）

次回予告

久々に何もない休日。一夏はシャルロットとデート、箒と束は姉妹水入らず、セシリアと鈴はラウラ共々遊びに出かけ、簪は楯無と姉妹の絆を取り戻しつつあった。

そんな折、ザックと千冬はそれぞれ別に出かけるもばったり出くわしてしまう。

次回、「咲き乱れるは恋の花？」何処まで運が悪いんだあいつ・・・・。

あとがき

次回はちょっと生き抜き回です。何しろ千冬ルートにも関わらず真耶とはデートして束とは同棲して、千冬には何もイベントないですから入れないと（汗）

翠煉のカードはまだ全部は出てきてません。何があるか予想してみましょう。ではでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1745x/

ＩＳ鏡伝～漆黒の隼～

2011年12月11日23時45分発行